Okinawa Prefectural University of Arts

鎌倉芳太郎の前期琉球芸術調査と美術観の変遷

原田　あゆみ
（沖縄県立芸術大学大学院
芸術文化学研究科）

0　はじめに

鎌倉芳太郎（写真１）は1898（明治31）年香川県木田郡氷上村に生まれた。香川県師範学校時代から日本画家を目指していた鎌倉は、1918（大正７）年には東京美術学校図画師範科に入学。美術学校時代の４年間に絵画製作の面で多大な刺激を受けたのみならず、東洋美術史の大村西崖(1868～1926)、西洋美術史の矢代幸雄（1890～1975)、色彩論の菅原教造（1881～1967）といった新進気鋭の学者達の薫陶を受け、作家としての眼と美術史の素養を身につけて美術学校を卒業し、美術教員として沖縄県女子師範学校に赴任となる。

写真１　鎌倉芳太郎

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

鎌倉芳太郎は沖縄県女子師範学校美術教員として赴任した2年間と、財団法人啓明会から補助を受けた2回の琉球芸術調査、さらに那覇市天尊廟における「歴代宝案」調査、首里城と浦添城を中心とした発掘調査の延べ5回の現地調査[(1)]を行った。その調査報告として展覧会・講演会を実行、また東京美術学校では日本・東洋の美術史、風俗史の教鞭をとる傍ら、東洋美術に関する著書を記し、戦後は紅型作家として人間国宝に認定されるまでに至った。そして最晩年に鎌倉芳太郎の成した仕事の集大成として刊行された『沖縄文化の遺宝』は、戦禍で失われた沖縄の造形を今に伝えるのみならず、鎌倉自身の多分野にわたる興味と、対象に向かい合う柔らかな感覚と根気、文化に対する謙虚な姿勢を留めている[(2)]。

鎌倉は美術史家でもあり、紅型作家でもあり、徹底したフィールドワーカーでもあり、その各分野で多大な研究成果があるわけだが、それほどまでに彼を駆り立てたものは一体何だったのであろうか。

筆者は鎌倉芳太郎による沖縄調査をその調査方法と調査内容から、以下の前・中・後の三期にわけて考えている。

【前期】

・沖縄県女子師範学校美術教員期【1921(大正10)年～1923(大正12)年】

・第1回琉球芸術調査期【1924（大正13）年5月初旬～1925（大正14）年5月】

【中期】

・第2回琉球芸術調査期【1926（大正15）年～1927（昭和2）年9月】

【後期】

・「歴代宝案」調査期【1933（昭和8）年8月】

・城跡発掘調査期【1937（昭和12）年1月】

本稿は鎌倉の前期の琉球芸術調査、1921（大正10）年4月の沖縄県女子師範学校赴任時から、1925（大正14）年5月の第一回琉球芸術調査終了までの期間の美術に関する調査記録を中心にしている。また、鎌倉芳太郎の実際の動向を具体化するための資料を作成し明らかにした上で琉球美術に関する認識の変遷と美術観[(3)]について考察してみたい。本論をすすめていく上で度々引用する都合上、煩雑化を避けるために資料に関して説明したい。

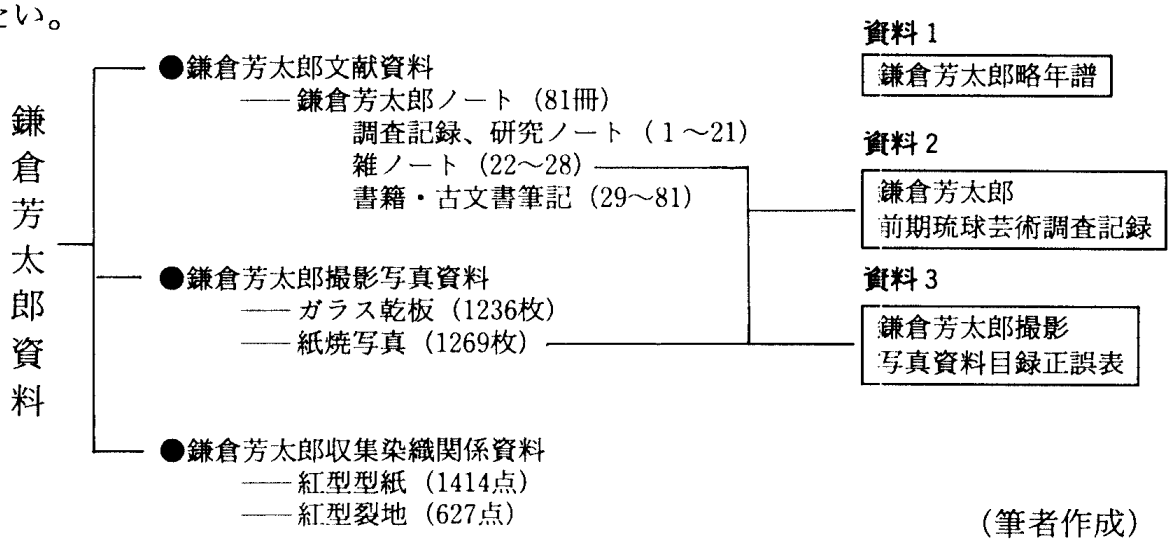
NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

1　鎌倉芳太郎資料について

鎌倉芳太郎が沖縄滞在中に収集した資料は、工芸、美術関係の実物、古記録、さらに文学、芸能、民俗関係と多岐にわたり、鎌倉の旺盛な研究意欲と広い視野が窺える。そして現在残る鎌倉芳太郎資料を語る上で忘れてはならないのは、鎌倉芳太郎の「琉球芸術調査」を援助した財団法人啓明会の存在である。[(4)] 啓明会と鎌倉芳太郎の関わりについては後述するが、鎌倉芳太郎は1924（大正13）年３月から伊東忠太と「琉球研究調査事業」という共同研究名義で、財団法人啓明会から３度にわたって補助金として計１万円を得ており、その期間に収集された沖縄関係の資料は膨大な数にのぼる。現存する鎌倉芳太郎資料は、この啓明会の補助なしにはあり得ないことであった。

これらの資料のうち第二次世界大戦の戦禍を免れたものは「鎌倉芳太郎資料」として昭和60年度、平成２年度の２回にわけられて、沖縄県立芸術大学に寄贈され、「鎌倉芳太郎文献資料」「鎌倉芳太郎撮影写真資料」「鎌倉芳太郎収集染織関係資料」の三部門において、現在一般公開に向けて調査整理が進められている。[(5)] しかし、現時点では公開されていないため本稿で作成した資料の原資料にあたることはできないことをあらかじめ断っておかねばならない。本稿は「鎌倉芳太郎資料」一般公開時には、有用に各資料を使用できるよう作成に努めた。鎌倉芳太郎資料と作成した資料の関係を図１に簡略化して図解した。この中で、特に本稿に関わる部分の資料について以下に紹介したい。



（筆者作成）

図１　鎌倉芳太郎資料

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

1-1　鎌倉芳太郎撮影写真資料

写真資料には鎌倉が大正から昭和にかけて沖縄各地で撮影したガラス乾板（1236枚）と、同乾板から焼付された紙焼写真（数千枚）がある。ガラス乾板については、一部乳剤面剥離等の劣化をおこしているものもあるため、定着材コーティングを施すことや、資料永久保存のためのガラス乾板自体からのスキャニング作業等が考えられてはいるが、それに伴うガラス表面の溶解や膜面剥離等の大きな危険性に対応するだけの技術確保は難しく、現在のところ資料の現状維持に力がそそがれている。そのため、写真資料として調査研究の対象としているのは、寄贈されたガラス乾板から焼かれた1287枚（現存1269枚）の紙焼写真である。この他に、岩波書店1982年刊行『沖縄文化の遺宝』（以下『遺宝』と略称）で使われたと思われる写真資料、鎌倉自身がガラス乾板から直焼したもの等があるが、現在のところ詳しい調査は行っていない。これまで一般に公開された『遺宝』に掲載された写真は、現在調査中の写真資料の半数ほどである。筆者は残り半数の写真内容を明らかにするための整理調査を進め、現在同乾板から焼付された紙焼写真をスキャニングして画像データに変換し、パーソナルコンピュータ上で「鎌倉芳太郎写真画像データベース」を構築中である。[(6)]

1-2　鎌倉芳太郎ノートの美術関係記録

現在調査中の写真資料の半数に関する情報を得るためには、鎌倉が当時の日記や調査記録を記した大学ノート「鎌倉芳太郎ノート」（以下「鎌倉ノート」と略称）との照合が必須であった。ただし現段階では膨大な数にのぼる資料の照合全てを行うことは不可能であるため、本稿では美術に関する調査記録を中心に行った。

「鎌倉ノート」のうち、美術工芸品に関する記録が中心となっているものは、ノート番号の１番から28番（以下「ノート【　】」と略称）に集中している。ノートの内容としては以下の通り。（ノート中、記載日から年代がわかるものは〈　〉内に記した）

1　美術　彫刻

2　美術　絵画

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

3　工芸　陶工
4　工芸　雑工　金工
5　美術　紋様
5 B工芸　陶磁工
6　工芸　染織工１附　縫工　〈大正14年11月14日〉
7　工芸　染織工２
8　工芸　染織工３
9　工芸　染織工（久米島之部）A
10　工芸　染織工（久米島之部）B　〈大正15年１月23日〉
11　工芸　染織工（久米島之部）C
12　工芸　染織工（宮古島之部）A
13　北部神座考　〈大正15年～昭和２年〉
14　琉球国由来記寺社坤（聖）　〈大正15年12月21日〉
15　聞得大君加那志様御新下日記　他（文献資料）　〈大正15年～昭和２年〉
16　フィールドノート（この冊全般的に絵図よりなる）
17　フィールドノート（この冊全般的に絵図よりなる）　〈昭和２年〉
18　Miyako Kazumata（この冊全般的に絵図よりなる）　〈昭和２年〉
19　瀬長島神事研究録（この冊全般的に絵図よりなる）
20　フィールドノート　〈昭和２年〉
21　入墨ノ研究［久米島研究資料］　〈大正15年～昭和２年？〉
22　雑ノート（絵画関係調査記録）
23　雑ノート（調査記録・日記）　〈大正12年～13年〉
24　雑ノート（写真撮影に関する記録等）　〈大正13年〉
25　雑ノート（研究メモ・フィールドノート・撮影記録等）〈大正11～12年〉
26　雑ノート（研究メモ・フィールドノート・資料抜粋等）　〈大正11年〉
27　雑ノート（撮影記録・研究メモ・スケッチ等）　〈大正13年〉
28　雑ノート（撮影記録・調査スケッチ等）　〈大正14年〉
29～文献資料

上記の整理番号は、「鎌倉芳太郎資料」が沖縄県立芸術大学に寄贈される際に便宜的に付された整理番号であるため、これを編年的に並べ替え分類する

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

必要がある。管見の限り、ノート【1】から【28】までを見ていくと、以下のことが明らかになった。

・ノート【15】とノート【29】以降は文献（文字）資料。

・ノート【23】～【28】ノート表記「雑ノート」。最も早い時期のもの。〈I〉

・ノート【1】～【12】記述スタイルから見て啓明会「琉球芸術調査事業」後の記録。〈II〉

・ノート【13】～【21】大正15年以後のノート。〈III〉

・ノート【22】「雑ノート」は「絵画関係調査記録」となっているが、その筆跡は明らかに鎌倉のものとは異なり調査地は沖縄ではないため対象外とする。

以上のことから、ノート【1】から【28】は三期に分けることができる。

〈I〉ノート【26】【25】【23】【24】【27】【28】（【22】）（順序は年代順）

〈II〉ノート【1】～【12】

〈III〉ノート【13】～【21】

このうち、最も早い時期のノート【23】～【28】、表題「雑ノート」が記されたのは、1921（大正10）年4月の沖縄県女子師範学校赴任時から、1925（大正14）年5月の第一回琉球芸術調査終了までの期間である。「雑ノート」は、琉球芸術調査の調査記録としてまとめられる前の状態、調査体系がまだ固まっていない段階の記録で、個人的な雑記帳である。その記述は、日を追って記述された日記的なもので、それ故、調査した記録だけではなく見たもの、聞いたこと、気になる本のこと、論文の構想等がすきまなく一緒に綴られており、その行間からは、鎌倉が自分の足で歩き、直にモノに触れ、思索したことが読みとれ、当時の社会と緩やかに絡み合いながら、鎌倉自身の美術観が発酵していく様が読みとれる。この「雑ノート」を見ていくことが、鎌倉芳太郎の実際歩いた行程を辿ることに最も近いと考える。つまり、この時期が本稿の中心となっている。

1-3　資料1、資料2、資料3について

図1で示した資料1の「鎌倉芳太郎略年譜」は鎌倉芳太郎の全体像を把握するためと、鎌倉芳太郎の全生涯の中で本稿の中心となる期間1921年から1925

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

年の具体的な位置づけをするための資料として作成した。「鎌倉ノート」の記述や当時の新聞記事から新たにわかったことも明記した。

資料２の「鎌倉芳太郎前期琉球芸術調査記録」は、上記の「鎌倉芳太郎ノート」の「雑ノート」と「鎌倉芳太郎撮影写真資料」の照合から明らかになった鎌倉の前期琉球芸術調査の軌跡と、実際の調査対象を表にした。この資料は鎌倉の調査の軌跡を明らかにしておくことが先決であると考え、照合結果が編年的に見えてくるようにして他の資料と対応させる工夫をした。「鎌倉ノート」との照合により、写真資料だけではわからない物の寸法や状態がはっきりしただけではなく、調査記録を編年化したことによって調査への写真記録の導入時期や調査対象の傾向が明らかになった。

資料３の「鎌倉芳太郎撮影写真資料目録正誤表」は先に1-1で紹介した「鎌倉芳太郎撮影写真資料」の目録の正誤表である。ただしこれは訂正箇所を表にしただけではなく、『鎌倉芳太郎資料目録』の1998年刊行後現在までに、資料２の照合結果から写真資料に関して新たに判明したことを記した改訂版的意味合いを持つ。

なお、これらの資料の詳細に関しては各凡例を参照されたい。

2　前期琉球芸術調査

—沖縄県女子師範学校教員時代から第一回琉球芸術調査までの調査概要—

鎌倉芳太郎の琉球美術観の変遷をみていくためには、その論考からだけではなく、鎌倉芳太郎の実際の動向を明らかにしていくことが重要と思われる。資料として載せた調査記録の期間は、1921（大正10）年４月の沖縄県女子師範学校赴任時から、1925（大正14）年５月の第一回琉球芸術調査終了までの期間である。この期間の記録としては、「鎌倉芳太郎ノート目録」のノート番号【23】から【28】にあたり、表題は「雑ノート」となっている。(7) この「雑ノート」を見ていくことが、鎌倉芳太郎の動向を辿るために有用であることは前述したとおりである。

ノート中の記録と写真資料の照合を資料２の「前期琉球芸術調査記録」にまとめ、調査の輪郭をより具体的にすることができた。その照合結果として、

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

先ずは調査の軌跡を見ていきたい。

2-1　沖縄県女子師範学校美術教員（1921《大正10》年4月－1923《大正12》年4月）

1921年4月に鎌倉は沖縄県女子師範学校兼沖縄県立第一高等女学校の教員として沖縄に赴任する。当時を振り返り、学校勤務の余暇に各地の遺跡をみて歩いてはいたが、最初の間はいわば亜熱帯の美しい自然や、その景観の中にたたずむ荒城や遺跡の情緒を味わう、といったものであったこと[8]などを語っている。

それが次第に琉球文化を本格的に知りたいと感じ、実際に調査をするきっかけとなったのは、大正11年の春頃『沖縄タイムス』に連載された末吉安恭（1886～1924）の「琉球画人伝」を目にしたことによる[9]。

鎌倉の琉球研究とその調査記録が記された「鎌倉ノート」中に、鎌倉が実際に見た沖縄の美術に関する記録で記載日が明記されているものとして確認できるのは、ノート【26-502】[10]の弁財天堂（首里当蔵町）を訪れた記録が最初である。以後、資料2「前期琉球芸術調査記録」に沿ってみていきたい[11]。

「鎌倉ノート」の記録を見る限り、鎌倉が琉球の造形の実地調査を始めるのは、8月に長嶺華國（1852～1932）を訪れてから後ということが言えるようである。元来日本画家を目指し、古美術を愛していた鎌倉が、末吉の「琉球画人伝」を目にして琉球の絵師の歴史を知り、琉球芸術の歴史に触れる感動を覚えたことは想像に難くない。鎌倉は「琉球画人伝」について尋ねるべく、末吉を訪ねたという。

末吉の「琉球画人伝」は、琉球藩絵師の科挙試験に合格した最後の一人である長嶺華國のまとめた「琉球歴代画人表」を原案としていることから、末吉は鎌倉に長嶺を訪ねるよう勧め、長嶺宛に紹介状を書く。鎌倉は8月22日には、長嶺華國の私宅を訪問しており、この頃を境にしてノートの記録は美術関係の調査記録が中心になっていくのである。ノート【26-484】には、末吉を訪れた時にメモしたと思われる長嶺華國の住所が走り書きされている。鎌倉が初めて末吉を訪ねて行った期日は明らかではないが、おそらく8月以降ではないかと想像する。

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

また、末吉を訪れた後ほぼ時を同じくして、当時沖縄県立図書館長であった伊波普猷（1876～1947）や、『沖縄一千年史』刊行を翌年に控えた真境名安興（1875～1932）を訪ねている。[12] 末吉にはじまり、当時沖縄の文化活動の中心的存在であった人物達との接触は、鎌倉に琉球芸術を本格的に実地調査させる刺激となったはずである。鎌倉は末吉の「琉球画人伝」を、長嶺華國の「琉球歴代画人表」に準拠しているといえども、文化史的時代背景をとらえた琉球絵画史として評価しており、末吉との交友によって琉球文化、特に造形芸術に関わる姿勢が本格化したものと思われる。実際、鎌倉自身が『遺宝』の「第三部　琉球絵画の系譜」を記すにあたって、「若しも末吉と相会わなかったならば、私がその後の調査研究に進み得たかどうか。末吉安恭こそこの研究のための恩人であることをここに記して置く。」と記している。[13]

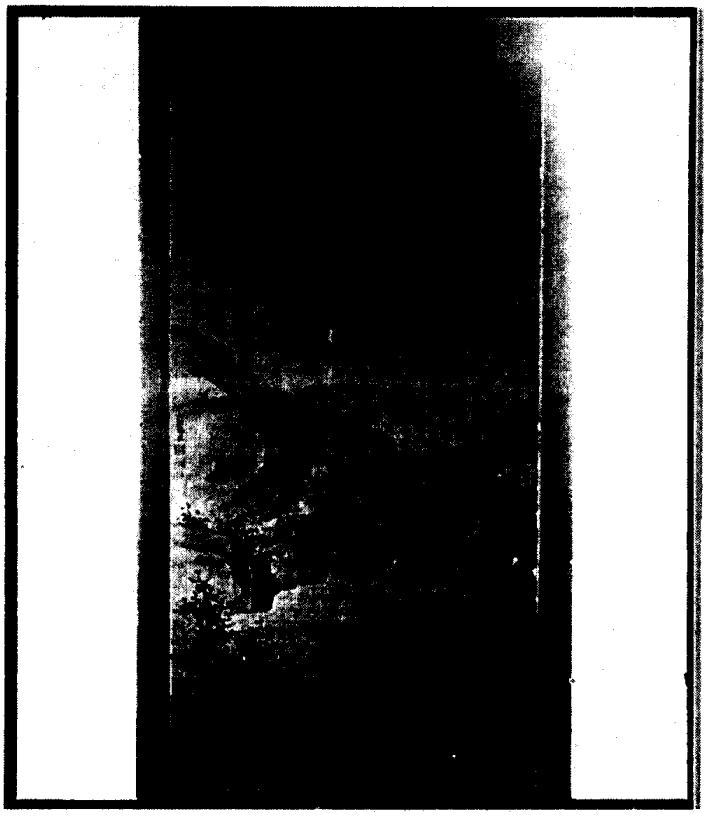


図２　殷元良筆「山水図」

この後一月もたたない９月初めには、比嘉朝健（1898～1945）を訪ねて、殷元良筆「山水図」（図２）、毛長禧筆花鳥図五巾、呉著温筆「山水図」を見せてもらっている【26-507】。比嘉朝健は鎌倉芳太郎と同様に末吉安恭にたいへん影響を受けた人物であり、年齢も鎌倉芳太郎と同年代である。比嘉の父

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

が尚順男爵（1873～1945）と親しいこと、家が裕福であることなどから、尚家関係の美術品にはよく通じていたという。また、比嘉自身も昭和10年代、東京で活発に琉球美術に関して執筆活動を行っており、鎌倉の琉球研究とその影響を考える上で重要な人物である。[14]

この後、鎌倉が行うことになる琉球芸術調査事業の地固めは、この時期沖縄の文化人との交流を通して着実に進んでいたのである。しかし、資料２からその軌跡を一見して、初期の調査対象は所有者を介さず個人で調査しやすい寺院や社殿が中心であり、個人的に一人黙々と調査を続けていた様子が想像される。

2-2　宮古・八重山調査（1923《大正12》年２月11日～３月５日）

大正12年２月10日から３月７日にかけて、[15]鎌倉は宮古郡へ入学試験官として出向のおり、八重山郡も見学をしている。八重山で見た数々の造形に鎌倉が強い印象をもったことは、末吉が主筆をつとめていた『沖縄タイムス』に掲載した「先嶋藝術と桃林寺の印象」という記事や、後に東京でまとめた論考からも窺える。[16]また、この時期の鎌倉の琉球美術観を知る手がかりともなる。この論考については後で詳しく見ていくことにして、ここでは調査の動向を追うにとどめたい。

この八重山調査の成果として、鎌倉が八重山蔵元絵師喜友名安信の画稿112枚を、喜友名の甥にあたる宮良安宣から譲り受けたことはよく知られているところである。[17]しかし、ここでは、「鎌倉ノート」中最初に撮影記録が確認できるのが八重山調査の時期であるということを特記すべき事項としてあげておきたい。

写真資料とノート資料の照合の上で、鎌倉がいつから撮影を始めたかが問題になる。今まで見た限りでは、撮影の記録はノート【25-340】に見られる２月25日の記録が最初である。[18]ノートには同日、喜舎場永珣と共に桃林寺を訪れたことは記されているが、撮影に関する記録に関しては「字大川　崎山用宴　写真師　（29歳）」との記述が見えるだけである。ただ、八重山調査の印象記「先嶋藝術と桃林寺の印象」中に、同日２月25日に桃林寺の全ての写真撮影をしたことが記されているため、資料２の調査記録には撮影記録にお

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

ける初見として記した。

写真2　八重山権現堂と八重山調査時の協力者たち

『遺宝』にも掲載された八重山の建築や彫刻の写真は、この八重山調査の時に撮影されたものである。しかし、「先嶋藝術と桃林寺の印象」によれば、八重山調査時の写真撮影は地元の写真師である崎山用宴によるところが大きい。機材の準備から撮影全般にわたっては崎山が中心となっておこなっており、鎌倉は撮影助手は行っているが、この時点ではまだ写真術を体得していないことがうかがえる。(19)

鎌倉自身の本格的な写真撮影は八重山から沖縄本島に戻ってから始まる。資料2の表の3月末から4月の記録を見ると、八重山調査から沖縄本島に戻った鎌倉は、赴任期間が終わり帰京するまでの一ヶ月ほどの間を、ほとんど日を開けずに調査に明け暮れていることがわかる。ノート【25】には、当時沖縄で唯一写真原料販売を行っていた坂元商店で乾板を購入した記録や、写真撮影の記録が多く見られるようになるのである。(20) その初期の写真撮影の記録の中に小橋川朝昇という名前が見られるのだが、この人物は末吉安恭の遠縁にあたる米国帰りのアマチュアカメラマンで、鎌倉は写真撮影に関する技術

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

面、機材面で彼の世話になっている。[21]

ノートの記述を追ってみると、鎌倉の造形物に関する実地調査は、八重山調査を境にして格段に内容の濃いものになっていることがわかる。特に実地調査に伴う写真撮影を本格的に始めることになったのは、八重山調査以後である。鎌倉に多くの刺激を与えた八重山調査ではあるが、これまで『遺宝』に掲載される八重山の写真に関しては、八重山の写真師崎山用宴の存在は触れられてこなかった。しかしながら、崎山用宴や小橋川朝昇等、当時の写真師が果たした役割について、今後検討が必要になると思われる。

調査資料に写真をとりいれたことで、鎌倉個人の研究対象、つまり琉球の造形が、写真という視覚的伝達力によって鎌倉帰京後、東京美術学校の教授たちに知られることになり、さらに多くの関心を集めることになっていった。

2-3　東京美術学校研究生（1923《大正12》年5月～1924《大正13》年4月）

大正12年5月1日、東京に戻った鎌倉は母校東京美術学校美術史研究室に研究生として席を置く。赴任期間中の個人的研究として持ち帰った沖縄の建築、彫刻、絵画、工芸等の調査研究と写真資料（キャビネ版）が正木直彦東京美術学校長（1862～1940）に認められ、正木校長の紹介で東京帝国大学教授の伊東忠太（1867～1954、写真3）から指導をうけることになる。

伊東忠太は、日本で最初に「建築史」を始め、法隆寺が世界最古の木造建築であることや、エンタシスがギリシャ建築に繋がると唱えたことでよく知られる人物である。伊東の数多くの著作の中でも初期の「法隆寺建築論」は非常に硬質な学術論文として知られ、鎌倉が出会う頃の伊東は、すでに東京帝国大学定年退官を間近に控えた建築史の第一人者であった。後述するが鎌倉は大正10年3月、沖縄に赴く前、奈良・京都の古寺を見て歩き、そこでみた日本の古美術を原点として沖縄の造形に向き合っている。特に法隆寺は10日をかけて見学し、金堂壁画のすばらしさに感動している。奈良の日本美術を原点として沖縄に赴いた鎌倉にとって、伊東から直接指導を受けることは幸運以外のなにものでもなかったであろう。

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

写真3　伊東忠太

帰校した鎌倉はこの時期、東京美術学校に在籍しながら精力的に論文執筆や研究に打ち込む。大正12年7月と11月には「琉球美術史論―島津氏の琉球入りと天才自了の出現に就いて―」1、2を『東京美術学校校友会月報』に掲載[22]、翌年大正13年はじめから数カ月におよんで「八重山芸術の世界的価値/近代芸術に於る新しき指針」を『沖縄タイムス』紙上に連載している[23]。

この大正12年という年は関東大震災の年でもあり、9月1日の震災当日、鎌倉は東京美術学校の一室でこの震災を体験する。前代からの街並やそれまでの財産を一掃し、多くの命が失われたこの震災を体験した者にとって、この日は人生の中でも特別の意味を持つに違いない。震災時の手記がノート【23-51】に見られる。

「千九百二十三年九月一日　正午前八分の頃だ。こゝまで書いて来た時地震がひとゆりきた―――又きた。大地震だ！

（中略）

ロダンの黄銅時代が壊れましたよ。と誰かが云ふ。一万円で買約済みになってゐたものだと誰やらがいふ。私は考へた。名作もそれは大自然の偉力の前には何の支ふる力もないのだ。ゆれる。たまらなくゆれる。私は八重山の大海嘯の時[24]を實感したやうに感じた。東京にもその沖積層

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

地帯は海嘯はありはしまいか。とそんなに思った。

（中略）

こゝまでかいてきた今。又ドド・・・・とゆれる。ゆれるものすごさよ。大きな不安だ。天から灰が落ちてくる。今は火事だ。さっき誰やらが十何カ所の大火だといふ。天は一面に暗々として暴風雨の雲に火煙を混じて流れてゆく。太陽は眞赤だ。血の逆上したやうだ。私のもってゐるペンと手の影は血のやうな光に照らされる。動物園はものすごい。◆岳工蔽が大火なんだ。私は、小さい私の考は。心配になってきた。琉球の美術品の看◆考等全部なんだ。伊東博士邸に置いたあの品々なんだ。もしやもしやと思ひつづけてゐる。春日町から水道橋の間だといふ。どうなる◆か。あの八重山の画稿の運命だ。それよりも私達の生命さえも不安である。あるがまゝに。そうだ。宇宙の還元なんだ。多分今日琉球では私のあの論文が発表になったろう。その日だと思へば。未練の大きさは私の私の生命そのものゝ如くに。戦くのだ。灰はふる。ふってくる。太陽は赤い。二時十分記載。」（読解できない字には「◆」をあてた。）

大正８、９年頃から東京美術学校では結城素明（1875～1957）と松岡映丘（1881～1938）の推進の下、日本画卒業生を中心に古画の研究保存を目的とする模写事業の計画が起こっていた。大正13年の関東大震災は、多くの古美術を焼失させたが、同時にこの模写事業の価値を見直させる結果となった。[25] 鎌倉は香川県師範学校在学中、中央美術社発行の『日本画講義録』（結城素明〈写生〉、松岡映丘〈大和絵〉、鏑木清方〈美人画〉、安田靫彦〈模写〉）を熱心に学んでおり、後年紅型作家となってからもこの時期学んだことが研究に多く役立ったと述べている。[26] 古画研究模写を推進した結城素明と松岡映丘は、この『日本画講義録』の著者でもあり、鎌倉が結城達の古画模写事業から美術研究上の影響を受けたことは間違いない。このことを証明するように、震災後鎌倉は東京を離れて三ヶ月ほど奈良・京都の古美術の研究に従事するのである。当時の東京美術学校の動向の中で鎌倉が古美術研究を思い立ったことは充分理解されよう。

東京に戻った鎌倉は久しぶりに日本画の製作を始める。大正12年11月６日

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

の手記には、

「十一月六日製作を初(ママ)める、一歩一歩難関にぶつかゝるやうな気もする。又楽しい境地を堀(ママ)ってゆくやうにも思へる、法隆寺の壁画の前で得た心観が私の畫に働く、薬師三尊の像繪も。今度こそは改った気持で掘ってゆかねばならない。」(ノート【23-52】)

と記されている。この翌年1月には伊東忠太の勧めで、財団法人啓明会の補助を受けるための推薦を正木校長に願い出るのであるが、その名目は沖縄円覚寺壁画の研究をするというものであった。この研究題目は前年の古美術研究から打ち出されたものであることが想像される。鎌倉はこのように大和の古寺を憧憬し、またそれらから制作意欲をかき立てられた。この時期の鎌倉の美術観は、法隆寺を代表とする「日本美術」という概念に決定づけられていくことになるのだが、ここでは鎌倉が大和の古美術、絵画制作、円覚寺の壁画という3点に立ち返っていることだけにとどめ、その研究スタンスについては次章にて考察していきたい。

鎌倉の研究と東京美術学校が大いに関係していることは、既に述べたとおりだが、鎌倉が本格的な写真技術をマスターできたことも、東京美術学校によるところが大きい。[27] 3月18日に伊東忠太との共同研究名義で琉球芸術調査が啓明会の補助を受けることが決定するとすぐに、鎌倉は調査のために東京美術学校臨時写真科の森芳太郎教授(1890〜1947)に写真技術を指導してもらえるよう願い出る。ノート【24-104〜130】の記録には、機材や薬品の取扱から化学反応式に至るまで事細かに記され、短期間ではあるが森から学んだ写真技術が如何に高レベルで内容の濃いものだったかを伝えている。そして、大正13年4月末、「琉球芸術調査事業」という大きなプロジェクトを背負い、再度沖縄に出発した。

2-4 第一回琉球芸術調査(1924(大正13)年5月−1925(大正14)年4月)

第一回琉球芸術調査は5月から始まった。この年書かれたノート【24】の冒頭には「写真術要項—あらゆるもの、完成は自ら信ずることにある—」と記され、鎌倉の第一回琉球芸術調査に出発する前の志が伝わってくる。

5月7日、沖縄に着いてすぐに写真現像のための暗室の設置を頼むために

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

首里市役所の高嶺朝教市長を訪ね、その足で円覚寺に向かい久しぶりに円覚寺の壁画に対面する。ノート【24-132】には、「円覚寺へくる。壁画は仲々光によって美しい。デッサンの微妙さは今更ら驚歎せしめられた。模写や写真の設備を考へたが容易に名案が出てこない。」との手記が見られ、鎌倉が円覚寺の壁画を写真撮影するだけではなく、模写をしようとしていたことがわかる。

全体

部分

図3　円覚寺壁画

しかしながら、この5月7日の記録の後、6月28日にダゴールデッハによる写真撮影の練習を始めるまでの間、絵画のみならず建築、彫刻に関しての調査はほとんど行われていない。この時期、にわかに増えてくる記録は染織関係のものであり[28]、紅型の起源についての研究がこの時期から始まっていることが読みとれる。しかし、実際の動向はノートの記録からは見えにくい。この時期は造形物に関する調査記録はなく、文献資料研究に力を注いでいるようである。

7月31日から8月20日の間、伊東忠太が現地調査にやってくる。伊東の琉球実地調査は地元の熱烈な歓迎を受けてはじまる。那覇港に着いた伊東を埠

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

頭では鎌倉をはじめ、沖縄県、首里市の官公吏員、尚侯爵家、新聞社の人々が出迎え、伊東が滞在する那覇市の楢原旅館には県関係者のみならず、末吉安恭、真境名安興、伊波普猷といった面々が続々と来訪した。[29] 滞在中には宜野湾御殿（尚琳家、首里市当蔵町）で宴が設けられ伊東が主賓となり尚順男爵、亀井沖縄県知事、その他県の高等官、高嶺朝教首里市長、また太田朝敷、玉城尚秀等が集まり、冊封使のような待遇を受ける。さらに中城御殿（尚侯爵家、首里市当蔵町）では珍蔵の家宝数十点を観覧し、松山御殿（尚順男爵家、首里市桃原町）にも数百という書画骨董が蔵されていることを聞くが、これは見学する間を得なかった。このような歓待の背景には、伊東が建築史の第一人者であるということだけではなく、この年の４月、当時腐朽が激しく保存困難な首里城が、鎌倉と伊東の奔走によって解体される危機を免れたという出来事が関係している。[30] さらに、首里城調査のため相次いで来県した黒板勝美（1874～1946）は、明治から大正にかけての国史学者でもあり、文部省関係では国宝保存会、史蹟名勝天然記念物調査会、重要美術品等調査委員会などの委員となって文化財の保存に努めた人物である。沖縄の人々が伊東や黒板に寄せる期待も大きかったようである。ただ沖縄の歓待はそれだけではなく、伊東その人の人柄も関係しているようである。例えば、大正13年８月18日の『沖縄タイムス』の記事[31]には、「暴風雨に遭って好い経験を得たと伊東博士の悦び　熱心な視察振に尚順男爵も感心」という見出しがつけられ、伊東の熱心な視察態度に尚家の人々をはじめ多くの人々が好感をもったことを伝えている。

この間の調査記録は「雑ノート」の中には見あたらないが、当時の新聞記事や伊東の手記から、短期間にも関わらず、内容の濃い視察であったことが窺える。鎌倉が伊東来沖を迎える準備として組んだ日程表[32]がある。この日程表は伊東から依頼を受けて作られたものなのか、鎌倉自身が考案したものかは定かではないが、限られた日数の中で琉球芸術を一通り見るための配慮がなされている。実際には伊東がデング熱にかかってしまったり、台風上陸で、実質調査は10日程度に縮まってしまうが、ほぼ予定した内容をこなしているのである。

伊東が帰京した後、鎌倉の活動は密度の濃いものになる。その対象は、こ

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

れまで調査対象としてこなかった工芸関係が加わり、寺社関係の建築や彫刻だけではなく、個人の所蔵品の調査が非常に多くなる。個人の所蔵品を調査するには、しっかりした名目が必要である。このことは鎌倉の琉球芸術調査の知名度が、伊東の来沖によって俄然上がったことをも意味している。実際に、三木健氏のインタビュー[33]によれば、鎌倉は首里城を救った恩人として尚家の協力を得て、同家に所蔵される多くの家宝を目にすることができたという。何より伊東と黒板の来県によって、鎌倉の琉球芸術調査の意義は公に知られるようになったことが、尚家をはじめ多くの協力を得ることに繋がっていったことは間違いない。

さらに、大正14年２月28日には、首里市第二小学校にて「古琉球の美術」という題目で講演会を行っている。この講演会は、古琉球芸術に関する写真数百枚を陳列しての展示会も同時開催されたという[34]。この講演会及び展示会は、同年９月に財団法人啓明会によって東京美術学校で開かれる「琉球芸術展覧会」及び講演会に先立つもので、帰京を前にした鎌倉が研究成果を確認した場として、また沖縄での古美術への関心を喚起する場として重要な意味をもつ試みであったといえよう。

1925（大正14）年５月には、鎌倉はこうした研究成果を携えて帰京する。膨大な数の研究資料は東京美術学校美術史研究室に運ばれ、臨時写真科の一室で写真等の整理作業は行われた[35]。そして、琉球芸術調査事業に関して公開発表として啓明会主催で「琉球芸術展覧会」が東京美術学校を会場に、９月５日から７日の３日間開催される。鎌倉が主に蒐集した約2000点とその他借入品を併せて3000点もの品々が展示され、また同期間中に琉球文化に関する講演会[36]が開かれ、３日間で５千名もの来館者が訪れた。

この講演会の講演者でもあり展覧会を訪れた柳田国男は、会期中の観衆の様子を「會衆の一部には勿論故島を愛慕する在京沖縄人が有ったが、他の多数は初めて沖縄に此の如き藝術があることを知った人であった。」と語っている[37]。大正年間当時にあっても、琉球についての一般的関心の中心は為朝渡琉伝説であり、馬琴の「弓張月」を代表とする小説的な琉球イメージが江戸期以来続いていたようである[38]。「琉球芸術展覧会」以前、実際の沖縄の様子を本

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

土に伝えることはあっても[39]、大々的に一般大衆に沖縄を紹介したこの展覧会がその後の沖縄に関する知識を一般に普及した意義は大きい。

ちなみに、鎌倉の琉球芸術調査の以後の動きを概観してみたい。展覧会の予想以上の成功に、啓明会からさらに研究費を受けることになり、1926（大正15）年4月から1927（昭和2）年9月まで、沖縄本島以外に八重山諸島はじめ離島の調査を行う。これらの調査報告を1928（昭和3）年9月に開かれた啓明会主催の『琉球朝鮮波斯印度展覧会』及び講演会にて「琉球染色に就きて」という題目で発表し、その後は東京美術学校で教鞭をとる傍ら、1933(昭和8）年の『歴代宝案』調査、1937（昭和12）年に首里城・浦添城を中心に発掘調査をするため沖縄をおとずれている。

3　前期琉球芸術調査の特質と往時における鎌倉芳太郎の琉球美術観

前節では鎌倉の前期琉球芸術調査の動向を探り、調査の対象や調査方法が変化していることを見てきた。本節では同時期における鎌倉を取りまく状況を把握した上で琉球美術に対する認識の変化と美術観を鎌倉自身の著述からとらえてみたい。鎌倉の著述の引用に関しては「鎌倉芳太郎論文・著書一覧」をさらに「主要参考文献・資料」を併せて参照されたい。

3-1　琉球研究出発点

そもそも鎌倉が琉球研究を始めるきっかけになったのは、美術教員として沖縄県女子師範学校に赴任したことにはじまるが、この沖縄赴任は鎌倉自身が美術学校図画師範科主任の白濱徵教授に願いでて、文部省から出向を命ぜられたものである。

鎌倉の沖縄行きの動機は、水上泰生（日本画家1877～1951）の助言[40]によっている。当時を回想して鎌倉は次のように記している。

「大正十年三月、東京美術学校を卒業したが、それ以前の或る日水上先生を訪ね、将来のことについて相談したところ、官費で琉球に行って学校の図画教師を一、二年間やって、琉球には古くから特殊な文化があったと思われるからそれを研究したり、また亜熱帯の自然の風物も面白い

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

からそれを写生したりして絵の題材を探すのもよかろうという話に感銘し、それで早速白濱徴教授にお願いして、沖縄県女子師範学校教諭として文部省から出向を命ぜられるに至った。」　［鎌倉：1969年］ 4p

しかしながら鎌倉自身に琉球研究のはっきりとした目的が芽生えたのは、赴任前の一ヶ月以上に及ぶ奈良見学であった。鎌倉の指導教官であった平田松堂（琳派系日本画家、1882～1971）は鎌倉に、沖縄赴任前に、奈良の古美術を見て行くことを勧め、奈良県知事を紹介しただけではなく研究費として百円を渡している。知事から各寺院への紹介状をもらい、特別待遇で研究上万端の便宜をあたえられた鎌倉は、大和の古寺をゆっくり散策し、法隆寺では須弥壇に上がることや、今は無き金堂の壁画をも三脚梯子に上って見ることを許される。この法隆寺では壁画を毎日のように見学し、10日もの間逗留している。そして、沖縄赴任を目の前にして、唐招提寺で鑑真和上が遣唐使船で阿兒奈波島（沖縄島）に到着したという記事を『群書類従』本の「唐大和上東征傳」で知り、未だ見ぬ沖縄にも大和の寺々を建立した建築家や彫刻家が行っているはずだと確信した。実際、鎌倉は着任早々、鑑真一行の沖縄島到着地点は、今の崇元寺廟前の沖縄御嶽の所であると推定しており、これを「琉球研究の出発点」として語っている。(41)

このような心持ちで沖縄に赴いた鎌倉は、当初、琉球美術に対してどのような認識を持っていたのだろうか。

鎌倉は沖縄での初めの年の事に関して、下宿した首里士族座間味家で首里語を覚えたこと、東京美術学校時代から興味をもっていたゲーテの色彩論の原理を、沖縄の地で実際に体感したこと等を語っている。(42) また、1921（大正10）年9月27日に記された日記から始まっている鎌倉ノートには、前半は沖縄の言葉や歌謡、習俗に関することが記され、その記録からは、鎌倉の興味の対象が如何に広く、且つまた、それぞれの分野について深く探求していたかが読みとれる。このことは、鎌倉のその後の研究の基礎となったわけだが、当初鎌倉が目指していた鑑真一行がもたらしたであろう造形、つまり大和の古寺に繋がるべく造形をはっきりと確信することはなかったようである。

沖縄赴任最後の年の1923（大正12）年2月に行った八重山調査が、本格的

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

な琉球芸術調査の始まりであったことは、既に述べたとおりである。最初の論考である「先嶋藝術と桃林寺の印象[43]」の中で鎌倉は、八重山の造形を担ったグダウシュマイ（大浜善巧）やスサイシノバグ（白髪の首里大屋子）、桃林寺仁王像の作者についての考察を丹念に行っている。初めての論考としての八重山に寄せる純粋な情熱を感じる。同時に八重山との出会いは、琉球行の目的でもあった天平時代以前の古代芸術研究の活路を見いだしたものでもあった。鎌倉は八重山で見た桃林寺の仁王像や八重山蔵元絵師喜友名安信の画稿について、次のような印象を述べている。

「そのモチーフの純真なる遠く鎌倉期の仁王像にも凌駕するであらう。否私の直感には推古期なる法隆寺の大門を連想せしめた。共に発生期の藝術である。」　［鎌倉：1923年①］11p

「或は日本美術史に於ける鎌倉、藤原以前の大和絵や、奈良時代以前の仏教彫刻やこの間に隠見する当時の落書や（あの大仏連弁の落書、唐招提寺所蔵の仏像台座の落書）更に万葉集の歌人共の生活の現実味を研究する唯一の資料となることでしょう。桃林寺のニオーンガナシ、マカーボトケは法隆寺の山門に叫怒する仁王像と相呼応しています。」

［鎌倉：1923年①］6p（末吉安恭に宛てた手紙）

「千九百二十年三月、丁度学校を卒業した儘の私が数年間苦しみ続けてきた疑惑の反省として、しかも且琉球行の発端として、私のすべての新鮮さと勇気とを以て懇望し着手したところの生活は、天平時代以前の古代藝術の研究であった。（中略）千九百二十二年一月十二日の私は更に懐ふ。当時の私はこの奈良時代藝術の讃歎がやがて南島研究の出発点であることを予見していた。」　［鎌倉：1923年-①］32～33p

八重山調査から戻った後の鎌倉の調査に対する意気込みは、その調査内容から明らかである。帰京を前にして琉球研究の立脚点に立ち返ったと言えるだろう。

さらに帰京後の論考を見てみたい。鎌倉が琉球の歴史の概要と絵師自了（城間清豊　1614～1644）[44]について書いた「琉球美術史論―島津氏の琉球入りと天才自了の出現に就いて―」は、東京美術学校帰校後、7月と11月の『東京

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

美術学校校友会月報』に掲載された。

この中で、鎌倉は琉球文化史を「静的に概称すれば支那日本朝鮮及び南洋諸国の接触或は刺激による構成であり、動的な見地よりすればこの諸国文化移動に於る仲介地及び仲介者の歴史である」と述べ、この琉球文化の第一高潮期を尚真王期（1477～1525）、第二高潮期を尚敬王期（1713～1751）としている。そして第一高潮期を

「現今、琉球本島に於いて見出される当時の遺品は、一、支那伝来の様式、二、日本伝来の様式、三、南洋伝来の様式、四、此等の混和せる様式、五、純粋なる琉球の様式、の五部門に分たれる、全く東洋文化の小博物館である。私はこの雑然たる五部門の総てを琉球第一期高潮文化として眺める時によりより多き意義を見出すものである。」

［鎌倉：1923-②］69p

としている。とりわけこの論考で注目されるのは、この二大高潮期をうまくつなぎ、さらに高めていったのが、接点となる1609年の島津氏琉球入りであると声を大にして唱えていることである。例えば、以下のような記述が見られる。（以下（　）内筆者による）

「琉球尚家の王府はこの薩摩の後見によって革命の憂を去りてその存続を保証せられた、ために文化運動の傾向も静的に発展し次代尚敬王朝期の爛熟文化へ進まねばならなかった。それ即ち第二高潮期の文化である。江戸時代が発酵的雰囲気を形成した如くここに相呼吸するものがあった。」

［鎌倉：1923-②］69～70p

「二大強国間に介在する琉球の文化が支那崇拝に傾き過ぎた時、俄然襲したものは島津氏の琉球征伐であった、（中略）結局この琉球入りは日本思想の復活であったこれを代表する僧侶の地位は又高められる時が来た。」

［鎌倉：1923-②］70p

「琉球最大の伽藍円覚禅寺は萬暦四十六年に至って修造せられた、その裏面には薩摩の指金が動いていたやうに考えられる、（中略）琉球入り以後の宗教芸術の勃興は建築絵画彫刻等に一新生面を開いた事であろう」

［鎌倉：1923-②］71～72p

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

さらに1924（大正13）年2月から4月にかけて、『沖縄タイムス』に連載された「八重山芸術の世界的価値/近代芸術に於る新しき指針」という記事[45]には次のようにある。

「それは琉球王朝が支那文化に傾注した結果、日本文化の空虚が流れこんだ。西、一六〇九年、慶長十四年に島津氏の琉球入りに伴ふ変動である。即ち琉球尚寧王朝の手をとほして日本本土の文化の影響をうけた時であって或る意味から云って、我国欽明天皇朝前後の時と餘程の類似がある。(中略)純真な藝術―殊、四箇村に於ては、美術の発生問題が横はってゐるのである。(中略)四箇村の研究は、日本美術の発生期であり黄金時代である推古朝期の根本研究と相一致するのである。時と環境が残って呉れた推古朝の縮図であると見られるのである。」

［鎌倉：1924年］（28）大正13年3月18日

「エー　現存する作品の種類によってこれを区分せば

一、桃林寺及権現堂の藝術は、歴史的展開と、現今の遺品とは狭小ながら、日本美術に於ける推古朝前後の法隆寺其他の諸藝術の根本問題と最も相一致する。

二、其他諸家に什蔵する美術及工藝品は又前記の如く、日本古代美術の精神を包括し、殊　絵画に至っては万葉集の挿絵と見られるものが数多い。

ビー　作品の價値的方面より眺むれば

一、歴史的方面と立脚すれば日本美術発生當時の根本研究に属する美術であること。

二、現今世界に於ける美術の傾向よりすれば民衆藝術論の立場に立脚する美術であること。」

［鎌倉：1924年］（31）大正13年3月21日

こうして1924（大正13）年の第一回琉球芸術調査に赴く前までの鎌倉の琉球美術の捉え方を概観してみると、次のことが言える。

・八重山で目にした造形を日本の推古朝に通じる「発生期の藝術」と讃歎する。

・琉球美術は中国の影響や南洋の影響を受け独自の様式を持つとしながらも、

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

慶長の薩摩の琉球入り以降、つまり日本文化の流入によって、その美術は発酵し洗練されていったと認識する。

・八重山の造形においては、美術の発生期には純粋な芸術が生み出されるという普遍的な捉え方をしながらも、沖縄本島の琉球美術の認識と同様に日本美術を基調にして語っている。

また、鎌倉は琉球美術を琉球王朝美術としてとらえていることが上記の引用部分からも窺えるが、このことについては後述することにして、先に鎌倉が沖縄赴任以来こだわってきた日本と琉球のつながりを探る姿勢を培った背景をみてみたい。

3-2　東京美術学校と日本美術史

ここまでみてきて気がつくのは、鎌倉の琉球美術の捉え方はその特徴や特定の問題を歴史的に考え、形態の発展によりその過程を跡づけようとする美術史的アプローチを顕著に示しているということである。ここでは鎌倉の著述が「日本美術史」の上で語られていることに着目し、立ち返って、当時の美術史がどのようなものであったのか確認する必要がありそうである。

日本において「美術」という言葉は、1873（明治６）年のウィーン万国博覧会に参加した際、現在わたしたちがいうところの「芸術」に近い意味のドイツ語Kunstgewerbeの翻訳として造語された。1884（明治17）年の岡倉天心とアーネスト・フェノロサによる法隆寺夢殿救世観音像調査は、何百年もの間直接目に触れられることのなかった秘仏を、調査という名目で開扉した有名な出来事である。このことは後に文化財保護行政へとつながっていくように、美術史研究と古美術保護は深い関係を持っている。そして、古美術保護は国家による美術品の価値付権威付として、国内だけではなく対外的な役割も担ってきた。文化財行政と日本の国民国家の形成については、高木博志氏の研究[46]が明らかにしたとおりであり、天心とフェノロサによる美術調査以来、法隆寺の建築や仏像は「日本美術史」の規範となっていく[47]。

鎌倉の琉球研究を多方面より支えた東京美術学校は1887（明治20）年、高等美術教育機関として創立された。1889（明治22）年に東京美術学校ではじめて「美学美術史」が、また同年東京帝国大学で「審美学美術史」の講義が

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

はじまり、それ以後、両校は日本の「美術史」を形成してきたといってよい。

鎌倉が東京美術学校在学時「東洋美術史」を担当していた大村西崖は、日本における「東洋美術史」および「日本美術史」の大系構築を担った人物である。大村西崖の『東洋美術大観』は、1908（明治41）年８月から1918（大正７）年７月まで15冊に及ぶ膨大な全集として審美書院から刊行された。鎌倉は当時最新の研究方法を大村から学んでいたことになる。さらに言えば、美術史として最も早い時期、1900（明治33）年に編纂された『稿本日本帝国美術略史』は、伊東忠太や啓明会の中心人物である平山成信がその編纂に関わっており、鎌倉はこうした当時美術史を編んだ中心人物たちを近くでみていたのである。

東京美術学校で学んだ美術史研究やそれをとりまく環境が、鎌倉の琉球美術観に与えたであろう影響を考慮して鎌倉の研究の実体を認識しなければならない。

また、次第に大東亜共栄圏的な雰囲気が広がる社会の中で、「東洋」における「日本」の位置づけや「東洋」に向けられた啓明会の文化事業[48]がどのような展開と意味合いをもつかは今後検討されるべきであろう。

ただし、東京美術学校や東京帝国大学が「美術史の規範」の制度的役割を果たしてきたことは否めないが、官制の「美術史」編纂というよりは、教授達の在外研究などから海外の見聞や最新の情報がもたらされる大学では、学究の場としてリベラルで時に反体制的雰囲気を持ち合わせていたことも忘れてはならないだろう。

3-3　伊東忠太との合同調査前後の変化

琉球美術を日本美術史の中でとらえていた鎌倉の姿勢に、伊東忠太との合同調査を境にして変化がみられる。ノート記録を見てみると、啓明会の援助で再度沖縄に赴いた1924（大正13）年５月から、伊東が訪沖する７月までの記録には、造形物に関する調査記録はなく、文献資料研究に力を注いでいることがわかる。この時期、鎌倉の興味の対象は工芸関係に集中しており、それぞれの起源を探求しようとしている様子が窺える。[49]

伊東が来沖した後の記録はどうだろうか。1924（大正13）年10月から始ま

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

るノート【27】の調査記録は、非常に詳細な記述であり目を引かれる（図４）。計測図が一つ一つ書き込まれ、調査方法の練られた記述となり、その調査対象は絵画、彫刻、建築、漆工芸、陶磁器、染織品、とほぼ造形物を網羅している。伊東の視察以降、鎌倉が各方面から多くの協力をうけたことによって調査対象が飛躍的に増えるのである。

７月までの鎌倉の調査方法は、円覚寺壁画を自ら模写することや、紅型の起源を探るための史料探索等、研究の構想は大きいが限られた期間で行うには困難であったと思われる。この時期、伊東が鎌倉に指示したことは明らかではないが[50]、鎌倉は伊東との合同調査によって伊東が長年のフィールドワークで得たノウハウを吸収したことは間違いない。伊東の帰京後の記録であると思われるノート【24-191】には、「[琉球藝術調査] 分担（要目）」（以下「調査要目」と略称。）という記録があり、琉球芸術調査研究を論文化する構想がこの時期既にあったことが窺える。

図５に「調査要目」を載せたので、参考されたい。この題目に「分担」と記されているとおり、琉球芸術調査のうち鎌倉の担当が記されている。伊東の専門である建築の項目はここには見あたらない。しかし、それ以外の絵画、彫刻、工芸といった視覚的な美術を中心に、舞踏、演劇、歌謡、音楽までが鎌倉の調査項目の範疇となっている。これに続く記録にはさらに必要な調査項目や写真資料の確認がされており、伊東の来沖によって、再度調査の計画が練り直されたこととともに、翌年東京で開催されることになる「琉球芸術展覧会」に向けて調査方法を新たにした様子が窺える。

琉球芸術に関して、この時点で鎌倉が言おうとしていたことは「調査要目」の結論部分から読みとれる。「時代逆行原理」としているのは、「日本美術発生當時の根本研究」に通じる八重山の彫刻や絵画を想定したのであろう。さらにここで「日本美術史に於ける」琉球芸術としてだけでなく、「東洋藝術史に於ける」琉球芸術の位置を記そうとしていたことは注目される。

この変化に関係すると思われる伊東忠太の講演記録が残っている。伊東は1924（大正13）年８月の来県中に沖縄県女子師範学校で「沖縄美術建築に就いて」という講演を行った[51]。その講演の中で琉球建築の特色を、１、古色を帯びていること、２、気分が大様なこと、３、細工ものは巧妙奇抜なこと、

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

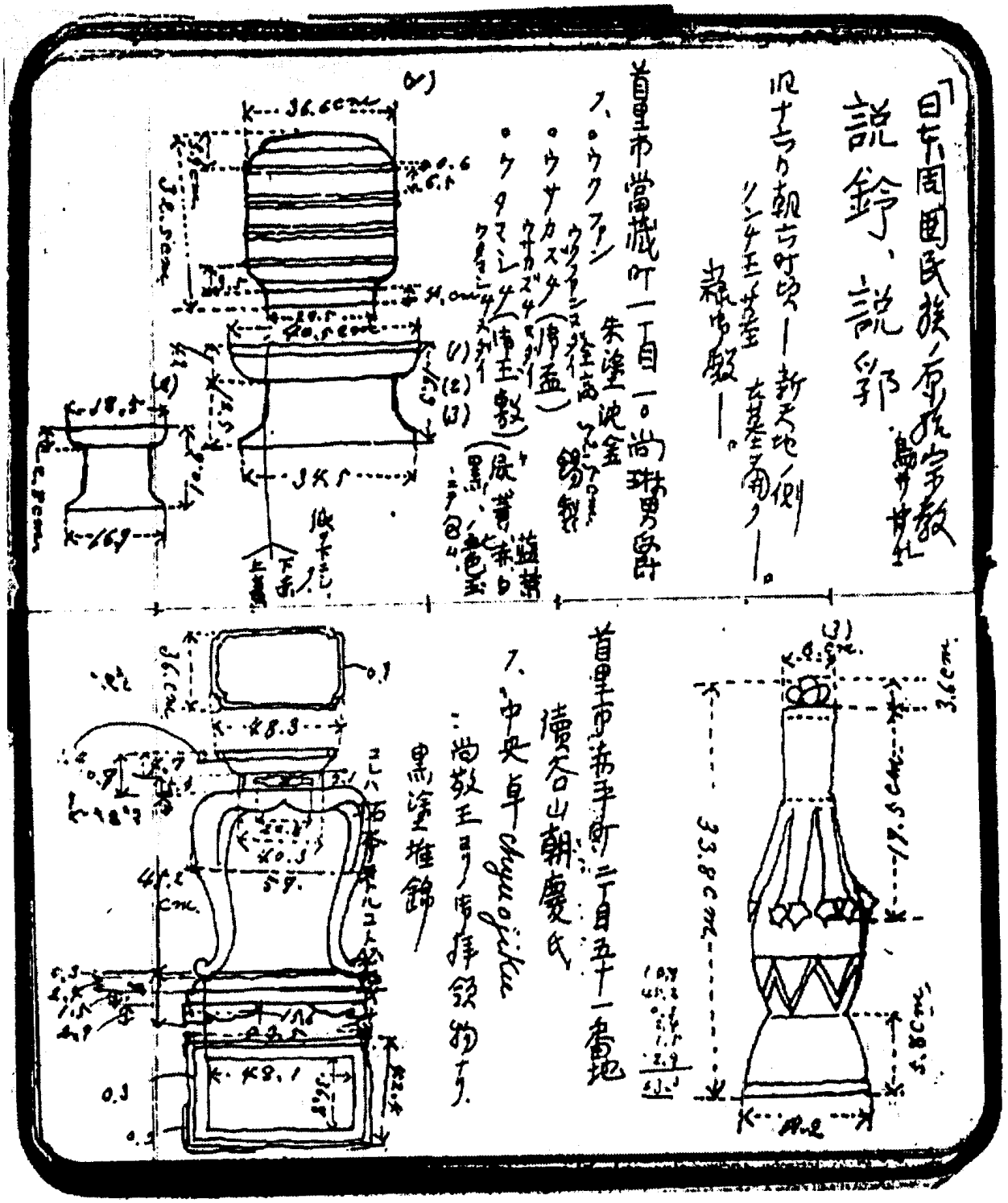


図４　鎌倉芳太郎ノート【27-51】

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

序言
總論　一、分布ノ範囲
　　1、本島、2、奄美大島、3、宮古島、4、八重山島
　二、琉球建築
　、琉球美術及工藝
　三、調査事業ノ分担
　四、残存スル古代文化ノ状況　遺存ノ状況、
本論　本論ハ之ヲ経ト緯トニ分チ経ハ旧王国ノ史的変遷ヲ考究シ緯ハ現今ニ於ケル遺品ノ分布ニツキ系統ヲ附シテ叙述スルモノトス。
一、琉球本島ノ藝術
　A、美術（本質的方面ヨリ分類）（史）
　　1、紋様　・幾何学的様式→自由曲線式→絵画的様式
　　2、絵画　・平面的表現様式（色彩平塗）
　　・立体的表現様式（濃淡陰影）
　　3、彫刻　・平面的様式
　　・平立中間様式
　　・立体的様式　《単体　群像》
　B、工藝（應用方面ヨリ分類）（史）
　　1、漆工　2、陶工　3、染織工　4、染工　5、金工其他雑
　C、其他ノ藝術ノ概況的操作　舞踏、演劇、歌謡、音楽等
二、宮古及八重山群島ノ藝術
　A、美術（史）
　　1、紋様　2、絵画　3、彫刻
　B、工藝（史）
　　1、陶工　2、織工　3、染工
　　4、其他雑　時間的要素ヲ加味シタル
　　補参考資料トシテ
　C、其他藝術的操作ノ概況（時間的要素上立脚スル藝術）
三、奄美大島ニ遺存在スル古代琉球文化ノ遺品
　註　本論ト比較研究ニ并ｓフモノトス
結論　琉球藝術ト文化史ニ於ケル（日本藝術史ニ於ケル）時代逆行原理（ト附随的價値）ニ對シテノ論
　1、琉球藝術ノ本質的價値　ヨリ琉球藝術の考察
　2、琉球藝術ノ東洋藝術史ニ於ケル位置ノ考定

図5　［琉球藝術調査］分担（要目）　（ノート【24-191】）

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

4、周辺地域の影響を上手く和合させていること、の4点にまとめ、また、東洋芸術を「マホメット藝術」「印度藝術」「支那藝術」であるとして、その一柱である支那芸術の中に、琉球と日本とを並立させてとらえている。翌年大正14年9月に東京で行われる「琉球芸術展覧会」の講演でも、沖縄で行われたこの講演内容がほぼ踏襲されている。

ただ東京での講演では、琉球芸術は「父（国民）」と「母（国土）」の気質を受けて一つの型ができ、「第三元の師友（影響関係）」によってその芸術があるとして、この「国民」を説明して「沖縄人も亦た均しく大和民族である」としている。しかし伊東は、前述の「母（国土）」を（風土）と言いあらため、より重要なのは「母（風土）」であると明言しており、琉球芸術をさして「何れの地方にも見ることの出来ない一種美しい特色を厳存（ママ）するのは、即ち一つの流派を成して居る所以」で「味ひが独立して居る」と言い表している。

ところで、沖縄の講演では言及しなかった「沖縄人」の帰属について、この東京での講演中言及していることは、同講演会の前日に講演した伊波普猷や東恩納寛惇等の言説から受けたであろう影響が想像される。

1924（大正13）年8月の伊東の講演内容に感化されて、鎌倉が「琉球藝術調査」の報告として「東洋藝術史に於ける」琉球芸術の位置を示そうとしたことは想像に難くない。伊東は日本の建築を語るときにも、日本を日本の中だけで考えることはせず、常に世界の中で考えようとするのである。伊東がアカデミズムの領域内で日本、あるいは東洋の問題と密接に関わってきたことは確かであり、なによりも三カ年かけて中国、インド、トルコ、エジプト、小アジアを踏査した経験を持つ伊東との合同調査は、鎌倉に世界の広がりを実感させたに違いない。しかし付言すれば、この時点では鎌倉の論考を見る限り「支那」や「南洋」という比較対象となる地域名はあっても、実際に現地を知らない鎌倉の論からは、対象となる周辺諸国の美術と琉球美術とを比較する現実感が感じられない。

1925（大正14）年の1月には、『琉球新報』に4回の連載で「円覚寺壁画考」[52]を執筆する。円覚寺壁画についての研究は、啓明会から援助を受ける際に鎌倉が、提出した研究題目である。鎌倉はこの論考の中で円覚寺壁画の制作年

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

代を1400年代として、その作者は琉球の絵師であったと推定している。円覚寺壁画は慶長の役前、鎌倉のいう琉球文化の「第一高潮期」にあたるわけだが、その時期の琉球の絵師が琉球独特の題材によって制作をしていたことを「おもろさうし」を引いて提言する[53]。この論考では、中国や南洋、そして日本からの影響を受けながら、琉球独自の解釈によって伝来物を受容し、高めていった当時の琉球文化の趨勢を高く評価した見解を提言をしている。

「かかる佛殿の壁画は絵畫を描くことは勿論支那流であり絵畫の様式も南方支那の文化と顕著なる類似がある。然るに内容を凝視すると画因の◆抜さは支那流で◆い部分に◆する。比較研究の結果私は南方支那文化の影響を受けたる琉球王国古代の作家によってなされたことを強く首肯するのである。(中略)尚又當時の琉球絵畫には尚圓壬尚眞王の御絵及銘苅子の肖像の描寫があって琉球獨特の様式をも創生してゐる事が想像せられる。されば畫家の輩出したとほぼ疑ひの余地もない」

［鎌倉：1925年-①］ 4 （読解できない字には「◆」をあてた。）

3-4　前期琉球芸術調査の特質――「琉球芸術展覧会」が明らかにしていること

鎌倉の前期琉球芸術調査の集大成といえる「琉球芸術展覧会」は、1925（大正14）年9月5日から3日間東京美術学校を会場に開催された。

「九月七日の午後、東京美術学校の大講堂には琉球の舞踊が琉球音楽の伴奏の下に独自な情調と気分を醸しつゝ行はれてゐた。琉球の青年と少女が踊る手と足との動き身のかはしは琉球の楽器のひびかせる素朴な音調につれて深く見者の心に喰ひ入った琉球の音楽と舞踊とに接して晴れやかにおどる心を押へながら私は展覧会の各室を巡り歩いた。それは芸術展とその名を冠してゐる如く建築絵画彫刻の美術品を主としたものであったけれどなほ琉球に関する文献図書、土俗、金石文、楽器、生物を展列して見る人をしてよく南島の技藝風物の系統的知識を與へるものであった」　　（「琉球展を観る」『沖縄朝日新聞』大正14年9月30日）

上記の記事は同展覧会の印象記である[54]。この記事と図6に載せた「琉球藝術展覧會陳列品目録」（以下「展覧会目録」と略称）をみてみると、会場の模様がおぼろげながら浮かんでくる。この展覧会がどのようなものであったか

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

を知ることは、鎌倉の前期琉球芸術調査が如何なるものであったかを探る手がかりになるはずである。

日本において「美術」という言葉が博覧会という制度の中でうまれたことにより、「美術」の概念は博覧会を開くために展示品を分類し序列することを通じて階層的に整序されていった。[55] そのため展覧会陳列品目は、当時の美術概念の表れとして重要な資料となる。「展覧会目録」（図６）も、展覧会の主旨を反映していることになる。ただし、この展覧会は鎌倉一人が開いたものではなく、伊東や鎌倉を東京美術学校でサポートしてきた正木直彦の思想が反映されており、さらに言えば、展覧会を主催した啓明会や時の美術行政とも深く関わっていたといえる。逆に言えば、先に見た鎌倉の「調査要目」（図５）から、何がどのように変わっているかを見ることで、調査当時の鎌倉の琉球美術観を探ることができるのではないだろうか。

3-4-1　純粋美術と応用美術

この展覧会は講演会も併せて開催され、この場で鎌倉は「琉球美術工芸に就きて」という演目で、展覧会の出品内容を中心に講演している。[56]

> 「まず第一に、美術即ち純正藝術と呼ばれる方面に就いて、申上げることに致します。絵画の部に於いて、此所に並べました順序は、甲、仏教其他信仰に関する絵画、乙、肖像及人物画、丙、花卉鳥獣及四君子画、丁、山水画、戊、風俗画、附、八重山の絵画と致しました。いずれの國を問はず美術―もう少し範囲を縮めまして絵画―が行はれます時には、信仰の問題即ち宗教に関係して発達して来るようであります。」
>
> ［鎌倉：1925年-②］114～115p

鎌倉は最初に美術を「純粋藝術」と「応用藝術」に分け、純粋芸術を絵画、彫刻、建築とし（ただし、講演では「建築」は伊東の分担）、それらをさらに宗教的な造形と非宗教的な造形とに分けている。

ここでいう「純粋藝術」と「応用藝術」とは、明治期から美術界の中で対立観念として用いられていた「純粋（純正）美術」と「応用美術」という言葉の応用とも言える。当時、美術を「純粋」「応用」と区別する事に対して高まった批判は、美術を序列化することへの懸念として生じてきたものだった。

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

日時　第一日…九月五日（土曜）　第二日…同月六日（日曜）
　　第三日…同月六日（月曜）
　　午前九時より午後五時迄
場所　東京美術學校（上野公園内）

一、文書　甲、古文書
　乙、書籍　1、琉書　2、和書　3、漢書　4、洋書
　丙、畫圖
　丁、金石文、
二、土俗　甲、衣食住　乙、冠婚葬祭　丙、行事　丁、交通
　附、風俗に關する繪葉書
三、繪畫　甲、佛畫其他信仰に關する繪畫
　乙、肖像及人物畫
　丙、花卉鳥獸及四君子畫
　丁、山水畫
　戊、風俗畫
　附、八重山の繪畫
四、彫刻　甲、宮殿及城堡に屬する彫刻
　乙、陵墓に屬する彫刻
　丙、圓覺寺其他佛教信仰に屬する彫刻
　丁、天尊廟其他道教信仰に屬する彫刻
　戊、孔子廟其他儒教信仰に屬する彫刻
　己、民間信仰及行事に關する彫刻
　庚、家具調度及儀式娯樂に關する彫刻
　附、八重山の彫刻
五、建築　甲、宗教建築　1、琉球固有の神祠　2、神社　3、佛寺
　4、儒教建築　5、道教建築　6、陵墓
　乙、非宗教建築　1、城堡　2、宮殿官衙及邸宅　3、民家
　4、橋梁　5、石牆　6、庭園
六、漆工　甲、沈金　乙、堆錦　丙、貝摺　丁、箔繪
　戊、蒔繪　己、墨繪　庚、彫刻木地
七、陶磁工　甲、荒焼　乙、上焼　1、第一期　2、第二期　3、第三期
　4、第四期
　附、壺屋窯發掘の陶磁破片
八、染工　甲、大模様型　乙、中手模様型　丙、中模様型
　丁、細模様型　戊、型紙を使用せざる模様染　己、無地染
九、職工　甲、縞織　乙、絣織　丙、縞絣織　丁、絽織　戊、花織
　己、ドートン織　庚、二重織　辛、綾織
　附、久米島貢納布標本
十、刺繍工
十一、金石工　甲、金工　1、彫金　2、鍛金　3、鑄金
十二、樂器
十三、生物　甲、哺乳類　乙、爬虫類　丙、兩棲類　丁、蜘蛛類
　戊、蝶類　己、甲殻類　庚、貝類　辛、珊瑚類　壬、植物

図6　琉球藝術展覧會陳列品目録（財團法人啓明會主催）

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

しかし「考古利今」を旨とする美術行政にあっては、むしろ工業製品への美術応用に対する関心が高く、啓明会の理事長である平山成信は、明治19年という早い時期に『竜池会報告』に出した「竜池会の前途」という論考の中で、「応用美術」の有用性を説いている。[57] 本稿では明らかにできないが、当時の社会と応用美術に対する美術行政の役割は、柳宗悦の「民芸」をも含めて充分な検討が必要となるはずである。

1924（大正13）年の「調査要目」（図５）にも、「琉球本島ノ藝術」を「A、美術（本質的方面ヨリ分類）（史）」「B、工藝（應用方面ヨリ分類）（史）」とに分けており、当時から「応用美術」に対する美術界の動きを意識していたことが窺える。なお、鎌倉が「美術」の「本質」は絵画や彫刻といった「純粋美術」であると大正14年の時点で認識していたことも、両者を比較したときに見えてくる。

3-4-2　「美術」か「美術史」か

「展覧会目録」（図６）の「五、建築」にある「甲、宗教建築」「乙、非宗教建築」という区別は、伊東が前年沖縄で行った講演で既に述べているところであり、それを鎌倉が展覧会において、絵画と彫刻に応用したことがわかる。絵画と彫刻の部分にしぼって「調査要目」（図５）と「展覧会目録」（図６）とを比較してみたい。鎌倉が1924（大正13）年調査当時記した「調査要目」では、絵画を「平面的表現様式（色彩平塗）」「立体的表現様式（濃淡陰影）」、彫刻を「平面的様式」「平立中間様式」「立体的様式」という具合に、表現様式上の分け方をしており、実践的な制作者としての視線が窺える。しかし、「展覧会目録」においては仏教、道教、儒教、民間信仰などの信仰形態の特徴や、肖像画、人物画、花鳥画、動物画、山水画、風俗画等の主題の特徴を分類基準として採用している。そしてこれらを「宗教的絵画」の発達から「鑑賞的絵画」の発生へと史的に説明しているのだが、ここに見る宗教画＞肖像画[58]＞花鳥画＞山水画というジャンルの序列のしかたは現在とほぼ同じである。

「調査要目」（図５）を再度見てみると、ＡとＢとに分けられた美術と工芸には括弧付けで「(史)」と付されていることに気付く。つまり、当時鎌倉は

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

これらを「美術史」的、「工芸史」的にとらえようかどうか迷っていたのであろう。結局、鎌倉は、東京での展覧会において「純粋美術」の絵画や彫刻については作品内容ごとに分類し歴史的に解釈する美術史の方法で提出し、「応用美術」である工芸については技法や素材の説明が中心となり、実践的な内容を語ったのである。

3-4-3　美術から工芸へ

鎌倉の帰京から展覧会開催後までの軌跡は、美術学校校長正木直彦の『十三松堂日記』に辿ることができる[59]。以下は正木の日記に見られる鎌倉に関する記述の抜粋である。

5月5日　鎌倉芳太郎琉球より帰来　銅銭を贈る

5月7日　鎌倉芳太郎来訪　琉球研究の報告

5月12日　鎌倉芳太郎琉球にて蒐集せる染物類を携示す　凡一千種餘れり　友染の文様甚雄大なるもの多し

5月18日　鎌倉芳太郎琉球より将来の陶器類を示す　朝鮮系統のもの多し

5月27日　鎌倉芳太郎蒐集したる琉球の焼物織物染物類を観る

6月12日　鎌倉芳太郎の研究室に入りて琉球花布原委の研究談を聞く　鎌倉か琉球にて得たる繪熊川の茶碗を借りて手入をなさんとて持帰る

7月31日　鎌倉芳太郎氏の琉球陳列會に出陳すへき琉球聘使略一冊琉球調査復命書友禅考なとを携示す

9月5日　今日より開會したる琉球藝術展覧會を観る　鎌倉芳太郎の主として蒐集したるもの約二千點　その他の借入品を併せて三千點計　博蒐の展覧會となれり　午後一時より東恩納寛惇學士の琉球史の概観柳田國男氏の南島研究の現状に就いての講演ありたり

9月6日　今日は日曜なれと琉球展覧會あるゆゑに出勤す（中略）午後一時より伊波普猷氏の古琉球の歌謡に就きて　鎌倉芳太郎の琉球の美術工藝　伊東忠太博士の琉球藝術の性質に就ての講

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

演を聴く

9月7日　今日は琉球展覧會の最終日也　細川侯爵来観せられて之と語る　樂浪古墳発掘に資金を提供せられたる次第を話さる　此日山内盛彬氏の琉球音楽の話あり　尋て琉球の奏樂舞踊の實演ありたり

9月23日　夜鎌倉芳太郎来訪　やかて又琉球の研究に出立つよしをいふ

展覧会前、鎌倉は逐一調査の報告を正木にしていたことが正木の日記から知ることができる。正木に携示した蒐集品は全て工芸関係の資料であることに留意しなければならないだろう。この時点で鎌倉の琉球美術に対する関心は「純粋美術」よりも「応用美術」に力点が移っていることが窺える。琉球の絵画や彫刻より工芸に強く魅力を感じた鎌倉の琉球美術に対する認識の表れであると言えないだろうか。

鎌倉が正木から学んだことは鎌倉の美術観を考える上で重要な位置をしめている。正木は1900（明治33）年のパリ万博の折には日本からの出品事務に携わっており、1907（明治40）年の文部省美術展覧会（文展）を時の首相西園寺公望、画家黒田清輝と開催するなど、展覧会事業との関わりは深い。そして、「趣味の廣い人で、事美術に關しては洋の東西を問はず、新古の別なく、また種別なくあらゆるものに通暁してをられた人で、殊に鑑識家としては當代稀に見る第一人者[60]」と称された人物であった。鎌倉の熱心な研究態度は正木校長に高く評価され、啓明会事業の協力のみならず、正木によって美術学校内での鎌倉の研究環境にも多くの便宜を与えられている。後に鎌倉は正木校長の講義を助手としてサポートし、正木に代わって講義を受け持つことになるのである。鎌倉は1923（大正12）年の東京美術学校研究生時代から正木が東京美術学校を退職した後も足繁く正木のもとに通い、調査の報告だけでなく正木の所蔵する古美術を鑑賞し、正木を介して多くの美術家たちとの知遇も得た。鎌倉にとって正木の下で過ごした時期は、厳密に対象とその質にたちむかう鑑識眼を学んだ時期だったといえよう。また本物を見る眼を養った鎌倉が、後にその目で研究対象の中心に選んだのは琉球の工芸品であった。

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

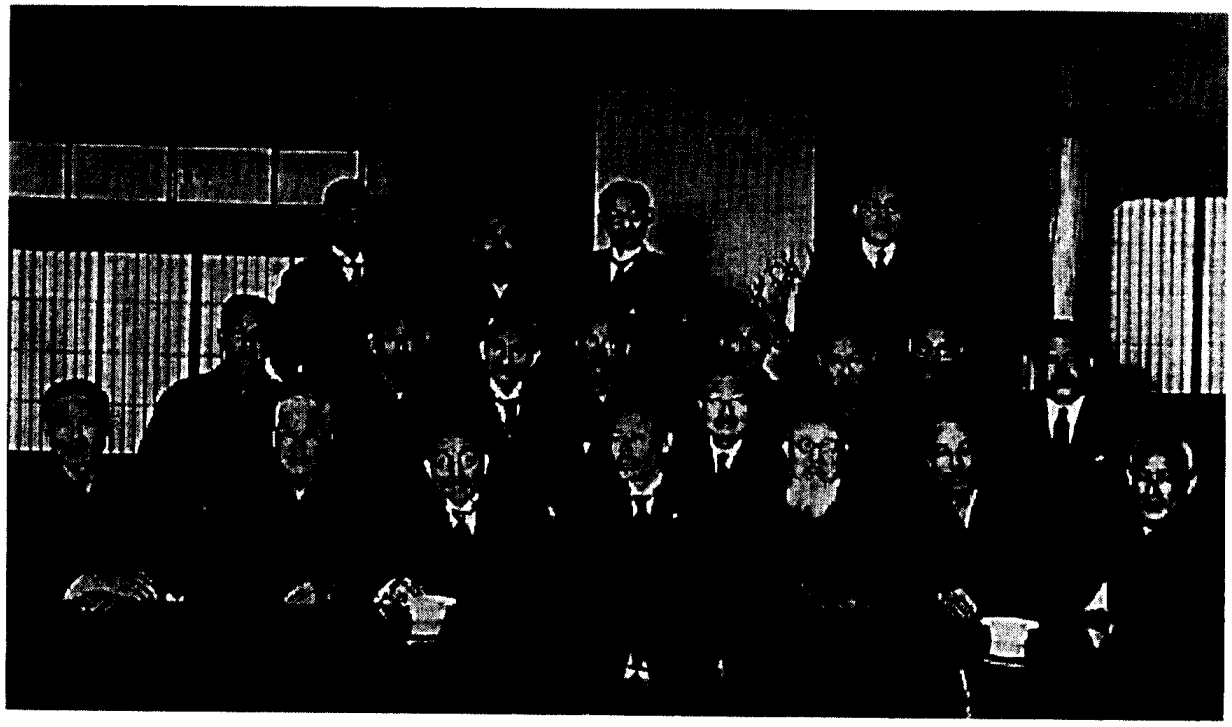


写真4　美術学校創立当時回顧座談会　昭和6年3月9日　於　翠松園
（前列中心が正木直彦、左・伊東忠太、右・高村光雲、後列右端・鎌倉芳太郎）

3-4-4　展覧会で提示された琉球芸術

最後に「展覧会目録」を見る限りにおいて注目されるのは、八重山の造形の位置づけと、楽器、生物等の展示である。1924（大正13）年の「調査要目」（図5）にあっては「琉球本島ノ藝術」と「宮古及八重山群島ノ藝術」として、独立して並記されていたものが、大正14年の「展覧会目録」（図6）にあっては八重山の造形はそれぞれ「附」として、絵画と彫刻の各分類項目の後に置かれている。この経緯は明らかではないが、鎌倉が日本の展覧会事業や美術行政の中心的人物達の啓蒙を受けてきたことは既に述べたとおりであり、啓明会や時の美術行政とも深く関わっていた伊東、平山、正木達のそれぞれの思想が、この展覧会に反映されていることは当然考えられる。例えば、この講演会で鎌倉の次に講演した伊東は言う。

「鎌倉君は建築のことには御觸れにならなかった。又問題が藝術の御話でありますから、藝術以外のものには御觸れにならなかったのでありますが、私の考へでは文書でも、土石でも、動物でも、植物でも、廣い意味に於て皆藝術である。」

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

伊東は元来珍しいと思ったものは何でも蒐集する質で、「展覧会目録」中、「十三、生物」は伊東たっての願いで集められたものであったらしい。[61]

鎌倉は沖縄女子師範学校教員時の1923（大正12）年の八重山調査以来、八重山の造形にたいへん惹きつけられていた。しかし、啓明会の事業である大正13年から14年にかけての第一回琉球芸術調査では八重山調査は行われていないのであるから、この展覧会において独立部門を設けることはできなかったのかもしれない。後述するが、鎌倉の琉球美術に対する関心の中心は後に八重山芸術から離れていくことになる。しかしながら、この1925（大正14）年９月の展覧会時点ではむしろ八重山の造形に対する鎌倉のこだわりは大きかったといえないだろうか。鎌倉はこの講演会で琉球芸術に「附」された八重山の造形を次のように語っている。

「最後に附として、八重山の絵画――主として風俗畫稿――を百数十點列べておきましたが、これは先程伊波文學士が、「南島には古い日本の言語が其儘残ってゐる」と、お話になりましたやうに、土俗の方面、殊に民間服飾にも、亦、極く古い日本のものが、残ってゐるやうでありまして、殊に支那并に日本の文化普及しなかった八重山島には、實に面白いものがおおいのでございます。」

［鎌倉：1925年-②］118p

「附として列べました八重山の彫刻―、あの彫刻も、絵画で申上げましたと同じく、矢張り古い日本の彫刻の味があるやうでございます。彼の桃林寺の山門を飾って居る仁王像の表現には、和銅年製と伝へられている法隆寺の仁王と、何処か類似した所がありませんでせうか。」

［鎌倉：1925年-②］119～120p

上記の言及から鎌倉にとっては中国や日本の中世・近世ではなく日本の古代の雰囲気を今に残す八重山の造形に対する関心の高さが窺える。ともあれ、鎌倉の前期琉球芸術調査の成果はこの「琉球芸術展覧会」において、加味要約され「南島の技藝風物の系統的知識を與へるもの」となった。[62]

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

3-5　鎌倉芳太郎の美術観

鎌倉の前期琉球芸術調査は予想以上の成功をおさめた。啓明会からのさらなる援助を受けて、鎌倉の意欲的な琉球研究はこの後も続いた。その研究成果は現在でも高く評価され、鎌倉芳太郎資料は沖縄研究になくてはならないものとなっている。

これまで、前期琉球芸術調査の時期を中心に鎌倉の琉球美術に対する認識を考察してきたが、その美術観はこの時期にのみ限定しては見えてこない。そのため、鎌倉の著述から前期琉球芸術調査後の琉球美術に対する意識を概観してみたい。

1928（昭和３）年に開催された「琉球朝鮮波斯印度展覧会」及び講演会では紅型を中心とする染織工芸資料3000点を出品し、「琉球染色に就きて」という題目で、第二回琉球芸術調査の報告を行う。さらに翌1929（昭和４）年に平凡社から刊行された『世界美術全集』の中に「琉球美術各論」を執筆している。この中で鎌倉は琉球芸術を便宜上、「純粋藝術」「応用藝術」とわけ、さらに建築と絵画にあっては「宗教的」「非宗教的」とわけて述べるなど、ほぼ大正14年の「琉球芸術展覧会」の講演内容を踏襲している。しかし、ここに至っては彫刻は建築に付随するものとして独立しては考えておらず、以前鎌倉が最も傾倒していた八重山の画稿や彫刻に関してはほとんど触れられることはない。この中で「琉球芸術の精華は実に工芸において認められる。」と語っており、彼の考える「琉球美術」の中心は完全に工芸に移っている。

鎌倉は晩年『沖縄文化の遺宝』を出版するにあたって、「琉球文化」とするか「沖縄文化」とするか、迷っていたという[63]。1975年に京都国立近代美術館が刊行した『沖縄の工芸』には鎌倉の「沖縄の工芸の歴史と特質」という論考が載せられ、その冒頭に「琉球」をこう定義している。

> 「沖縄といえば、沖縄県のことで、その中心地が沖縄島である。沖縄群島、宮古群島、八重山群島の総称であるが、慶長十四年（1609）島津氏の攻略分轄以前には、奄美群島を併せて琉球三十六島と称し、海上王国を形成していた。そしてこれを大琉球と称し、台湾を小琉球と呼んだのは、明初の頃と思われる。
>
> 明の太祖は、洪武五年（1372）琉球中山王察度を招諭し、察度は王弟

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

泰期を遣わし、表を奉じ方物を貢したが、これが琉球の中国に通じた始まりで、ここに明の外藩としての琉球王国が成立した。そして明治十二年（1879）の廃藩置県にいたる五百年間、独立形態の海上王国として、独自の文化を醞醸し造成した。これが琉球芸術であって、明治以後、今日の伝統となっている。」　［鎌倉：1975年-①］226p

また同書に掲載された「沖縄の染織について」では、次のように言っている。

「沖縄の工芸、慶長以後の琉球工芸は、この王国の統制経済の社会の中で、内需としては貴族を中心とする人々によって使用され、外需としては貢納用または外資獲得のための貿易用としてつくられた。それ故下手な民芸的ではなく、高級上手なものを作ることを理想とした。これは漆器や織物、染物だけではなく、他の工芸にも言いうるところである。」

［鎌倉：1975年-②］231p

以上の叙述から鎌倉は「琉球美術」を「琉球王朝美術」として捉えていることが窺える。この観念は終生一貫している。鎌倉の美術観の変遷を前期琉球芸術調査の時期を中心に追ってきたつもりだが、その当初において鎌倉が八重山芸術を琉球本島の芸術と分けて考えたのも、鎌倉にとって「琉球芸術」の本筋は王朝文化によって醸成された芸術であったからである。また鎌倉が琉球芸術の第一高潮期と第二高潮期と称した[64]時期は琉球王朝文化の高揚期であった。畢竟、鎌倉が最も惹かれていくのは王朝美術の粋を極めた「高級上手な」工芸であることが、このことを如実に物語っていると言えよう。

4　おわりに

本稿の前期琉球芸術調査において見てきた鎌倉の美術観は、八重山の画稿や彫刻などの「発生期の芸術」と「琉球芸術の精華」である琉球王朝の美術の間を大きく揺れていた時期のものだといえる。しかし大きく揺れながらも、この時期が鎌倉の美術観の根幹部分を最も露見させてもいるのである。事物を歴史的に考え、形態の発展や過程に関心を寄せて調査をし、論文を執筆するかたわら自ら絵筆をとって制作し、制作に欠かせない色彩や素材の研究をする姿は、一見、美術史家としての鎌倉と作家としての鎌倉のそれぞれ別の

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

顔のようにも受け取れる。しかし、古美術の偉大な造形に感動し、その由来を真摯に探求する姿勢は鎌倉という人間性のあらわれと言った方がよい。

前期琉球芸術調査において日琉のつながりを探求しようとした要因は、国家主義的なものや後からついてきた植民地主義的な時代の意識というよりも、おそらく鎌倉のもっと深い部分、つまり美術家たらんとしていた自分が沖縄にいるということの必然性、さらに言えば独自の存在の正当化として不可欠なものだったのではないかと想像するのである。そして、美術家としての鎌倉が当初目指していた日本画家から染色作家になっていくことは、切り放して考えられることではなく、むしろその美術観は一貫しているのである。鎌倉にとっては視覚美術である「絵画」と工芸である「染色」は、別個に考えられるものではないことに注意しなくてはならない。鎌倉が惹かれていったのは琉球の色彩であり、色彩を表現する紋様なのであり[65]、「工芸」や「絵画」というジャンルではなかったということである。1924（大正13）年の「調査要目」（図５）を見ていただきたい。「Ａ、美術（本質的方面ヨリ分類）」の筆頭にあげられているのは「紋様」であり、それは「幾何学的様式」から「絵画的様式」へと繋がっていく。鎌倉にとって染色紋様と絵画とは切り放せるものではなかった。このことに関しては鎌倉の作家としての側面をより深く探求する必要があるため、ここでは鎌倉の一貫した美術観を示唆するにとどめるが、今日我々が陥りがちな専門性の細分化に比して、鎌倉の美術観の力強さに驚きとともに感動を覚えるのである。

鎌倉芳太郎の前期琉球芸術調査の活動からは、沖縄にとどまらない近代の流れの諸相が見えてくる。琉球美術を沖縄の中からの視線と同時に、より広い世界の中で捉えようとした姿勢、そして鎌倉が美術の本質とは何かという問いかけを生涯において怠らなかったことが、鎌倉の琉球美術研究が現在でも高く評価される所以である。また付言すれば、常に鎌倉を非常に高い美術見識を以て両脇でサポートした伊東と正木がいたことも忘れてはならないだろう[66]。

この第一回琉球芸術調査の成果として開かれた1925（大正14）年の「琉球芸術展覧会」の意義は、この時期以降に活発になった沖縄関係の展覧会や、沖縄研究の高まりを別の視点から考察を重ねることによって、より明らかに

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

なってくるはずであると考える。

注

(1) 財団法人啓明会助成による琉球芸術調査事業をその時期から便宜上第1回、第2回とわけて記した。また、本稿でいう琉球芸術調査とは広義には本論に記した1921年から1937年の5回の現地調査をいう。さらに、これらの調査を鎌倉芳太郎による調査方法と調査内容からその時期を前・中・後の三期にわけた。本稿の中心となる前期琉球芸術調査とは、第1回琉球芸術調査までをいう。

(2) 鎌倉芳太郎の詳しい略歴については、資料1の「鎌倉芳太郎略年譜」を作成したので、本論と併せて参照されたい。

(3) 鎌倉は前期琉球芸術調査当時、「沖縄文化」とは言わず「琉球文化」「琉球芸術」と言っている。この言葉については鎌倉の美術観とともに後述するが、本稿は当時の鎌倉の言い方に従って、鎌倉の美術観を言う場合には「琉球」、筆者が地理的な捉え方で現在の沖縄県を言う場合は「沖縄」という名称を用いた。

(4) 財団法人啓明会は1918（大正7）年8月、赤星鐵馬が先代彌之助の遺志により公益事業にと寄付した100万円を基に牧野伸顕、平山成信らが中心となり設立された。評議員には、新渡戸稲造、大河内正敏、長岡半太郎、三上参次等、昭和12年の記録には伊東忠太も評議委員に名を連ねている。

琉球芸術調査事業として、鎌倉たちが啓明会から受けた補助は、1924(大正13)年3月に3千円、1926（大正15）年4月に3千円、1928（昭和3）年4月に4千円の計1万円にのぼる。ちなみに鎌倉が教員として受けていた一ヶ月の給料は当時100円だった。

(5) 「鎌倉芳太郎資料」についての詳細は、平成10年度3月に『沖縄県立芸術大学附属図書館・芸術資料館所蔵　鎌倉芳太郎資料目録』が刊行されたので参照されたい。

資料の主なものを列記すると、各地調査の際のフィールドノートおよび資料の筆写ノート（「鎌倉ノート」）81冊、「乾隆三拾年戊子百浦添御殿普請付御絵図并御材木記」「図帳（勢頭方）」等を含む古文書類16点、『歴代宝案』（複写印画紙）52（？）55冊、戦前の写真資料数千点、ガラス乾板1236点、紙焼写真数千点、紅型型紙1414点、紅型裂地627点等である。

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

また、「鎌倉芳太郎資料」に関する参考文献は以下の通り。参考文献の詳細は添付資料「鎌倉芳太郎論文・著書一覧」及び「主要参考文献・資料」を参照のこと。

・［沖縄県教育委員会：1997年］、［波照間：1998年］

(6) 『沖縄文化の遺宝』（［鎌倉：1982年］）掲載写真665/1269（1287中18点欠損）。『遺宝』には541点の写真が掲載されている（重複している写真を含む）。

「鎌倉芳太郎写真画像データベース」は成長型データベースとして、ガラス乾板から紙焼きされた写真をベースに『遺宝』に掲載された記録、「鎌倉ノート」に記された記録、スケッチ、各専門分野の研究者による意見、関連事項等の情報を現在も収集し順次つけ加えている。

(7) 1-2参照。特に本格的に調査を始めた1924（大正13）年5月から使っているノートは、常時持ち歩けるように、文庫本ほどの大きさのもので、その小さなスペースに、計測図や調査対象の特徴、それに関わる資料の筆写などが、びっしりと書き込まれている。

(8) ［鎌倉：1982年、167p］

(9) ［鎌倉：1982年、167p］

また、ここでいう『沖縄タイムス』とは、現在発行されている同名の新聞とは異なる。1921（大正10）年8月、『沖縄時事新報』を改題して発刊。末吉安恭が主として文化覧を担当した。現在、大正11年から14年頃の『沖縄タイムス』は、宮城真治の新聞スクラップとしてマイクロフィッシュ資料で目にすることができる。これによって、大正11年当時、末吉安恭は「陽春雑記」を『沖縄タイムス』に連載していたことがわかるが、ここにあげた「琉球画人伝」は、確認できない。

(10) ノートはマイクロフィッシュフィルムに焼かれており、見開きの状態で番号が付されている。ノート【26】に付された番号は405番から533番の見開き129枚。表題は「雑ノート」となっている。ノートの内容はすでに刊行された目録の通りで、大正10年9月27日に記された個人的な日記から始まり、前半は沖縄の言葉や歌謡、習俗に関することが記述されている。

(11) 資料2の調査記録についてはその凡例に詳しい。特に記載日については凡例の「1　【調査日】」を参照されたい。

(12) ［鎌倉：1982年、167p］

(13) ［鎌倉：1982年、167p］

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

(14) 比嘉朝健は1898（明治32）年那覇に生まれる。元東大史料編纂所勤務、琉球美術関係資料研究、1945（昭和20）年没。享年47歳。（『支那書画人名辞典』169p）

比嘉の論文には明らかに鎌倉芳太郎撮影写真と思われる図版が使われているということの他に、鎌倉と比嘉、比嘉と末吉の関係については、粟国恭子氏からたいへん有益なご教示をいただいた。

比嘉の論文中で扱っている殷元良筆「山水画」、筆山主人の「蘭画」、呉著温筆「雪中山水図」は、比嘉自身の所蔵していたものであり、鎌倉はこれらを調査している。鎌倉が比嘉の所蔵品を見せてもらうことによって、琉球絵画の造詣を深めたと同時に、比嘉が鎌倉の研究によって得たことも大きかったことが窺えるが、二人の関わりは現在のところ明らかではない。

(15) 那覇港出発は２月10日、那覇港帰着は３月７日。宮古島着は２月11日、石垣島出発は３月５日。

(16) ［鎌倉：1923年-①］、［鎌倉：1924年］

ノート記録としては、ノート【25-389】に、「八重山藝術論本日脱稿」という８月９日の記録がある。その論文自体は未確認だが、おそらく上記の「八重山芸術の世界的価値/近代芸術に於る新しき指針」の元原稿となった草稿であることが予想される。ノートに記された構成は以下の通り。

ノート【25-389】

目　次

一、八重山研究と竹富島の例証、

二、八重山美術の発達について、

三、八重山藝術の價値について、

A、日本文化史研究に於ける時代逆行の原理より

B、民衆藝術論の立場より

C、八重山藝術の世界的價値

(17) ［鎌倉：1923年-①］25p、［鎌倉：1982年］212p

「八重山風俗図」と呼ばれる画稿。1975（昭和50）年11月に石垣市八重山博物館で展覧し、その折すべての画稿を同館に寄贈した。現在も同館が所蔵し108枚が現存する。沖縄大百科事典には画稿の寄贈時期は1977（昭和52）年となっている。

(18) 資料２「前期琉球芸術調査記録」凡例の「５　【画像データ番号】」を参照。

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

(19) 崎山用宴に関しては[鎌倉：1923年-①]25pに記載されている。しかし、『沖縄文化の遺宝』中には写真師崎山用宴の写真撮影に関しては触れられていない。

鎌倉は『遺宝』に掲載した八重山の写真に関して次のように記述している。

「明治十五年改築の権現堂神殿は、今次大戦後改築されたが、私が大正十二年に撮影した写真原版は今に保存され、本書にこれを掲載することが出来たのは幸いである。」[鎌倉：1982年] 218p

(20) 坂本商店とは戦前、絵葉書の作成・販売および写真原料品販売をおこなっていた県内唯一の商店。那覇市天妃町の同市でもっともにぎやかな大門前通りと久米大通りの角にあり、ほかにも竹細工・画材・家具類・楽器・醤油などの販売を手びろく営業していた。(『沖縄大百科事典』)

八重山調査以後、ノート【25】に見る撮影の記録は以下の通りである。

【25-378】「三月二十四日（中略）私は那覇の宮里さんの所へゆきました、寫眞撮影のためにです、しかし通合はよくなかった」

【25-379】「三月二十五日（中略）円覚寺撮影　十一時石門ヲ出発シ大門ノ坂本（元）店ニヨリ乾板ヲトリテ首里ニ向フ十二時半円覚寺着　撮影」〈(　) 中は筆者による。〉

【25-379】「三月二十六日…暗室から出られた小橋川さんは◆◆ましくなられて強い精神のショックに感じたと云はれた…」〈解読不可な文字には「◆」をあてた。〉

【25-379】「一時―三時　小橋川→寫眞→市場→　　三月二十七日」

【25-379】「三月二十八日　　午前十時小川寫眞館ニテ撮影」

【25-379】「馬ヲ引ク図　寫眞　　縣立図書館」

【25-380】「四月一日　宮里家ニテ撮影」

(21) [鎌倉：1982年] 167p

(22) [鎌倉：1923年-②]

(23) [鎌倉：1924年]

(24) 1771（明和８、乾隆36）年、八重山を襲った大津波をいう。鎌倉は1923（大正12）年の八重山調査の折、この大津波によって損失した八重山の造形と大津波以後復興された新たな造形について考察している。

(25) 『東京芸術大学百年史　東京美術学校篇』３、1997年、185p

(26) [鎌倉：1969年] １p

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

(27) 啓明会の補助金を得た鎌倉は、当時一千円相当の最新式カメラ、ダゴールデッハ（ダゲレオダッハ）版とガラス乾板　Ilford special rapid plate（キャビネ版と四つ切）、現像に使用する薬品等の写真材料を日本橋浅沼商店で購入。購入に際しては東京美術学校臨時写真科の森芳太郎教授のアドバイスに従っている。また、1924（大正13）年6月から翌年4月まで行われた第一回琉球芸術調査で得た資料と写真の整理は、この臨時写真科の一室で行っている。森教授はこの後、大正14年11月から2年間、光化学研究のためドイツ、アメリカへ在外研究に赴き、東京美術学校の臨時写真科は、1926（大正15）年の5月には廃止されてしまう。鎌倉の在学期間と研究期間は、うまい具合に東京美術学校とタイミングがあっていたといえるだろう。

［鎌倉：1982年］276p、『東京芸術大学百年史　東京美術学校篇』3、268p、298p

(28) この時期のノート記録をざっと見てみると以下のような記録がある。

【24-141】琉球絣についての記述

【24-143】オモロに現はれたる麻布に就て/麻布と芭蕉布とどちらが先かといふ疑問/紋様資料

【24-153】「サツマとキリシタン及至南蛮船との史料」　馬氏世系図/「型付史料」馬氏家譜

【24-153】「型付史料」馬氏世系図、十二世良綱、

【24-163】（上儀保知念家）ニツキテ、　六月二十日午後三時半より五時まで（中略）型付伝来の起原を研究するは面白しきものなり。

【24-163】陶器業ノ起源

【24-166】傳尚巴志王墳墓の研究

【24-175】第一次推定、友禅染法ハ琉球染法ノ伝来ニヨリ発達セシモノナリ、

【24-176～】「こゑにや」の部

【24-189】紋様研究　1、入墨ノ種類ト様式　2、時双紙ニ表ハレタル古占字、3、与那国ガイダー字、4、家紋所　/碑文拓本

【24-189】友禅の研究

(29) ［伊東：1942年］

(30) 首里城正殿は腐朽が激しく保存が困難なため、1924（大正13）年3月25日から取り壊されることになった。このことを東京で知った鎌倉と伊東の奔走によって、

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

首里城解体を見合わせ保存し、さらに鎌倉、伊東の調査報告により1925(大正14)年4月には国宝に指定され、1927（昭和2）年8月より国の補助を受けて本格的な解体復元工事が行われ、1931（昭和6）年に工事は完成した。

当時の沖縄の新聞記事は現存していないため、首里城正殿保存問題については、その取り壊しをくい止めた時期は、鎌倉が『遺宝』に記した時期により1923（大正12）年とこれまでは考えられていた（[鎌倉：1982年] 276p)。しかし、この問題に関する記事が1924（大正13）年3月25日、4月4日付の『鹿児島新聞』に掲載されていたことを東京大学法学部附属近代日本法政史料センター（明治新聞雑誌文庫）に保管されているマイクロフィッシュ新聞資料より確認することができたため、改めて1924（大正13）年の出来事として記した。

(31) 伊東の来県中新聞に見られる伊東関連記事は以下の通りである。

○『沖縄タイムス』

・伊東忠太「建築の理想と実際」(啓明会講演記録より)（一）～(十八)
大正13年8月2日～22日

※同時期に柳田国男の「南島研究の現状」(1月29日～2月14日)が掲載される。

・「暴風雨に遭って好い経験を得たと伊東博士の悦び　熱心な視察振に尚順男爵も感心」大正13年8月18日

「十日にはチングーがやっと癒たばかりのフラフラした身体を起こして首里に赴き円覚寺其他の視察を了へて尚順男爵邸を訪ひ其の所蔵の珍品等を一見したが男爵が本縣の石垣として最も優秀なのは小禄御殿のそれなりとの紹介に博士は乗り気になり風雨を侵して直ちに同所を視察した。幸それは男爵邸の隣だったがチングーの病気疲れある身を厭はぬこの熱心さには両男爵もさすがと感心したさうである」

・伊東忠太「琉球を去るに臨みて」大正13年8月22日

「私はこれから東京に帰しなほ深く琉球古藝術に就て考へて見たい。私の白紙は今や余程琉球の古色に染ってゐるが、私は之を冷静なる学問の水を以て充分洗練して見たい。そしてその色が益々冴へるか或は幾分褪せるかを見度い。私としてはその色が洗へば洗ふ程冴へて来ることを期待して居るのである。」

○『琉球新報』

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

・「縣社の認定を得たる後社寺保存法に依って正殿を沖縄神社の拝殿となし内務省の維持に依るのが得策　伊東博士の意見」大正13年８月９日

・「古典式の座敷に行燈の光り　凡てを純琉球式に伊東博士の歓迎会　当日の組踊は呼物」大正13年８月９日

・「伊東博士を聘し琉球美術建築の講演　縣教育主催で来る十一日於女学校　一般聴講歓迎」大正13年８月９日

・伊東忠太「沖縄の建築に就て」（一～三）大正13年８月12、13、14日

・「明るみに持出された琉球芸術の偉大さ　世界藝術の一部門に入るべき價値があると伊東博士の驚嘆」大正13年８月17日

・「縣下史蹟保存に関し両博士の意見書内容　現在建築中の縣社拝殿も名称変更を行い鳥井（ママ）の位置も変る　正殿を現在の儘拝殿として修理」大正13年８月24日

(32)　ノート【27-45】

	日程	調査物件
1	三十一日	尚家訪問、首里城調査
2	一日	首里城調査及諸氏訪問
3	二日	首里城調査
4	三日	円覚寺調査
5	四日	仝上
6	五日	仝上　天王寺天界寺調査
7	六日	（空白のママ）
8	七日	神社調査
9	八日	陵墓調査
10	九日	同
11	十日	住宅調査
12	十一日	同
13	十二日	廟祠調査
14	十三日	工藝品調査
15	十四日	諸買物及訪問

付随見学

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

一、音楽　二、劇　三、農民生活　四、動植物　五、工業品
六、名所古蹟
採集物件
一、動植物及砂　二、絵はがき及写真　三、特産物（漆器、織物、陶器、その他）　四、特殊日用器具類　五、美術的作品

(33)　［三木：1998年］

(34)　粟国恭子氏のご教示によるが、現時点において筆者は出典を確認できなかった。

(35)　「紋様、絵画、彫刻、織工、陶磁、漆工、楽工、等につき古記録、実物（三千点）、写真（四切約一千枚カビネ一千枚）を蒐集して…」ノート【24-269】
蒐集資料は啓明会主催「琉球芸術展覧会」に出品するため整理される。出品のための資料目録はノート【24-203】から【24-210】に記される。

(36)　講演会の内容は以下の通り。（『啓明会第28回講演集』啓明会事務所）
「琉球史外観」東恩納寛惇/「南東研究の現状」柳田国男/「古琉球の歌謡に就きて」伊波普猷
「琉球美術工芸に就きて」鎌倉芳太郎/「琉球芸術の本質」伊東忠太/「琉球の音楽に就きて」山内盛彬

(37)　［柳田：1970年］

(38)　近世から近代にかけての一般的琉球観と琉球学に関しては［横山：1998年］に詳しい。ちなみに、鎌倉が東京美術学校を卒業した年の1921（大正10）年の日本画科の卒業制作の中には「琉球に残したる為朝の傳説」（島根県出身　野津唯尹）という作品がある。

(39)　展覧会として注目されるのは、1881（明治14）年の第二回内国勧業博覧会に琉球漆器が出品されたこと、「人類館事件」として有名な1903（明治36）年の第五回内国勧業博覧会の美術館に、比嘉華山（1868～1939）、山口瑞雨（1868～1933）等の沖縄風俗画が出品されたこと等があげられる。最も早い沖縄の写真記録は、1853年のペリー来航時にブラウン大尉に撮影されたもので、その後、人類学者鳥居龍蔵（1870～1953）が、1896（明治29）年と1904（明治37）年の調査に録音機、写真機を使用したことはよく知られているところである。また、1887（明治20）年、伊藤博文の九州及び沖縄地方巡視に同行した山本芳翠は、首里城美福門、崇元寺など風景人物風俗画を当時20点製作したと記録されている。この伊藤博文沖縄巡

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

視の頃には日本に写真機は既に入っているはずだが、写真師の同行があったかどうかは明らかになっていない。

・「沖縄美術年表」『沖縄美術全集』6、1989年、[笠原：1991年]、[高階：1998年]。

(40) 水上泰生（日本画家1877～1951）福岡市出身。1934（昭和9）年東京美術学校日本画科に入学、39年卒業。日本絵画協会・日本美術院連合絵画共進会や、美術研精会などに出品。

1914（大正3）年、鎌倉は、第8回文展にて三等賞を受賞した水上の「琉球の花」(六曲一双)を見ている。その後鎌倉は、東京美術学校入学後まもなく水上を訪ねて行き、そこで制作の手伝いを通して狩野派の彩色原理を学ぶなど、制作面において水上から強い影響を受けた。また、水上から聞く沖縄の自然風物や特殊な文化の話から、沖縄に対する関心を高めたようである。

(41) このことは、鎌倉自身が多くの場で言及している。

「かようにして、奈良見学は一ヶ月以上に及んだが、最後に通った唐招提寺で、その開基鑑真和上が、天平の昔遣唐使大伴胡麿の船で吉備真備、阿倍仲麿等と同行して阿兒奈波島（沖縄島）に到着したという記事を『群書類従』本の「唐大和上東征伝」で知り、そうであるならばこの寺を建立した建築家や彫刻家は皆沖縄に行っている筈である。それで今や私の赴任しようとする沖縄に大きな夢がふくらむ思いであった。着任早々このことを調べてみたが、その沖縄島の到着地点は、今の崇元寺廟前の沖縄御嶽の所であると推定した、千年以上の昔安里八幡前の真和志は、壺屋附近まで湾内の海であったと思われ、その真和志野にある赴任校に於て心行くまで千年の夢をそそられた。そしてこれが私の琉球研究の出発点となった。」[鎌倉：1969年] 5p

また、三木健氏のインタビューに対して同様の事を語っている。[三木：1998年] 102～103p

ノート記録としては、1922（大正11）年11月頃書かれた記録に「日本古代史にあらはれたる琉球」ノート【25-279】、「鑑真」【25-280】、「群書類従巻第六十九　傳部六　唐大和上東征傳」【25-282～286】等が見られる。

(42) 「二カ年の沖縄女子師範在職中は、先ず首里の士族座間味家に下宿し、家族の一員のようになって、約一年間で首里語を覚え、これを自由に話し聴くことがで

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

きるようになり、それがその後の研究の基礎となった。本土から行った人は多いが、当時としては言葉が通じないため単なる外面観察に終り、殊に老人相手に昔の家伝の技術を聴き出すようなことはとてもできない。紅型技術のことにしても、当時は国の中央集権化のため現地の若い人はもはや全く関心がなく、古く首里王家の専属紺屋の各家は殆ど廃業していた状態で、古法を知っている人は齢すでに古希を数えていたからである。」［鎌倉：1969年］ 5p

鎌倉は沖縄到着直後から、今まで体験することがなかった色彩現象に驚きかつ感動する。

「同（大正13）年十二月冬至の日は幸にも晴天で、冬のことではあり毒蛇ハブの心配もなく、早く暁暗に起き出でて現場に赴き、漸く明るみかけた東南海上を眺めていたが、冬期太陽光線が弱くなっているためか、この日は特別に美しい色は空間に見られず、ただ悠々として真赤な太陽が水際一線に見える東南方の久高島から昇って来た時には、その光芒はこの島に近い知念・玉城を照らし、天神降臨の神話の世界に引入れられた感がした。けれどもこれを色彩現象として見るならば、わが本土でも盛夏の頃の日の出・日の入りにはもっと美しい色が出る。ところが次年の夏至の朝、此所で見た色彩現象こそは、私の終生忘れ得ぬ美の感激と体験であった。」［鎌倉：1967年］ 3p

(43) 1923（大正12）年3月4日当時『沖縄タイムス』に掲載されたタイトルは「先島紀行と桃林寺の藝術」であったことが、1924（大正13）年3月18日に同新聞に掲載された「八重山芸術の世界的価値/近代芸術に於る新しき指針（28）」に記されている。後年『八重山文化』にまとめられた当時の記事は「先嶋藝術と桃林寺の印象」というタイトルになっている。現在、当時の『沖縄タイムス』をみることがかなわないため、確認できていない。

(44) 自了は生来の聾唖者であったが、探求心旺盛で独自の画風を築いていった琉球絵画史上作品を確認できる最初の絵師である。鎌倉はその画風とともに、数奇な運命にひかれ、自了を琉球絵師の筆頭にあげている。現在確認できる作品は「白沢之図」他数点しか残っていないが、鎌倉の撮影した写真資料には、自了作の作品は8点（うち1点は彫刻）が確認できる。

鎌倉芳太郎撮影写真資料にて確認できる自了（城間清豊）の作品は以下の通り。

「渡海観音図」　ノート【26-513】【27-69】/『遺宝』 330、331、/画像　16、429、

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

884。

「陶淵明図」　ノート【26-505】【25-379】/『遺宝』327、328、329、/画像　313、676、882、901、1053。

「高士逍遥図」　ノート【26-504】【27-60】/『遺宝』333、/画像　343、886。

「松下三高士囲碁図」　ノート【23-34】/『遺宝』334、/画像　345、879。

「李白観瀑図」　参考としてノート【27-69】/『遺宝』なし/画像　883、1024。

「松下三仙図」　ノート【28-109】/『遺宝』なし/画像　885、1276。

「白沢（夢喰）図」　ノート【28-110】/『遺宝』332、/画像　881、1275。

「雲龍彫短刀」　ノート【27-53、54】/『遺宝』541、/画像　245。

(45)　［鎌倉：1924年］(24) ～(45)

1924（大正13）年2月から4月にかけて『沖縄タイムス』に連載された、全45回に及ぶ鎌倉の八重山芸術論。当時の記事は宮城真治氏の『沖縄タイムス』新聞スクラップに見ることができるが、確認できるのは（24）からであり、期間としては1924（大正13）年3月5日～4月12日。連載開始から23番までと途中27、30、35、38、40、41、は欠如している。

(46)　［高木：1997年］264p

明治初年の廃仏毀釈に代表される前近代の文化的「伝統」の破壊に対する反省のもとに、日本の皇室独自の文化的「伝統」の顕彰をはかったもの。政策の基底には岩倉具視、伊藤博文らの国民国家形成にあたって国際社会の中でロシア・オーストリア・イギリス等の王室のごとく独自の文化的「伝統」を有することが「一等国」にとなるために不可欠とする認識があった。

(47)　美術史研究と古美術保護の関係は、西洋を出自とする「美術」を日本の伝統文化とのかかわりにおいて深く位置づけていった。日本の初期における博物館・博覧会事業に寄与したワグネル（Gottfried Waguner 1832～1892）は「東京博物館創立ノ報告」として、次のように提言している。

「欧羅巴諸博物館ニハ盛ニ日本及ビ支那芸術最勝ノ見本ヲ有セリ。而シテ日本芸術者其自国百工芸術ノ好式ヲ学バント欲スルモ、却テ欧洲ノ徒ヨリ難カルベシ。是故ニ東京ニ於テ新ニ創立スベキ芸術博物館ハ、本国芸術ノ博物館ナリト認ムルハ実ニ急務ナルベシ。」Gottfried Waguner・浅見忠雅訳「澳国博物館報告書」（明治8年序刊）（「資料編　3ワグネル氏東京博物館建設報告」青木茂・酒井忠康校

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

注『美術』日本近代思想大系17、岩波書店、1989年6月、所収)。

また、「日本美術」という言葉の概念的枠組みを、佐藤道信氏は次のようにとらえている。[佐藤：1996年] 19～20p

1、19世紀後半の対外的な世界観の中で設定された、相対的な美術観念。

2、「日本」という概念がそうであるように、「日本美術」という概念もまた、ナショナリスティックな国家思想を背景としている。

3、「日本美術」の地理的範囲は、基本的に近代「日本」が成立した明治初年段階の「日本」の領有地域によっている。

(48) 啓明会が援助した研究分野は洋の東西を問わず、たいへん多分野にわたるものであった。その研究成果は講演会や出版物として公開され、当時の学術研究を広くサポートした。アジアを中心にした文化活動が、対列強として大東亜共栄圏的国土意識を高める政治的煽動に利用されたことは否めないが、アジアの文化運動としての働きを十分に見直す必要があるだろう。

例えば、講演集としては、常盤大定「支那仏教史蹟踏査報告」、鳥居龍蔵「満州に於ける人類学上の研究に就きて」、矢代幸雄「日本の立場より見たる西洋美術」、黒板勝美「南洋に於ける日本関係史料遺跡に就きて」、補助成績出版物としては、佐々木信綱『校本萬葉集』萬葉集刊行会、ジョン・バトラー『アイヌ語辞典』教文館、高桑駒吉『大唐西域記に記せる東南印度諸国の研究』森江書店、内田清之助・下村兼二『鳥類生態写真』三省堂、望月信亨『仏教大辞典』等がある。

なお、啓明会の既往事業としては、1918（大正7）年8月から1941（昭和16）年度の記録が以下の通り確認できるが、戦後の形跡は明らかではない。

研究助成分野内訳　申し込み　773件　/採用　247件(合併、継続、追加は加算せず)

自然科学　95件　人文科学　152件　講演会・展覧会　121回

また、沖縄関係の講演題目としては以下の通り。

啓明会第8回講演会（大正11年11月4日）

「台湾琉球の音楽に就きて」田邊尚雄

啓明会第15回講演会（大正14年9月5～7日）

「琉球史外観」東恩納寛惇

「南島研究の現状」柳田国男

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

「古琉球の歌謡に就きて」伊波普猷

「琉球美術工芸に就きて」鎌倉芳太郎

「琉球芸術の本質」伊東忠太

「琉球の音楽に就きて」山内盛彬

啓明会第28回講演会（昭和３年９月６～８日）

＊啓明会創立十年記念事業として

「東洋藝術の系統」伊東忠太

「琉球染色に就きて」鎌倉芳太郎

(49) 注(28)参照

(50) 伊東は鎌倉が円覚寺壁画を模写していることに対して、以下のような感想をもらしている。[伊東：1942年、94p]

「鎌倉君はこの画を全部模写しようと云ふ大勇猛心を起し、既にその一部を完了されたが、これは非常な大事業で到底短日月で成就することの出来るもので無い。」

(51) 1924（大正13）年８月11日に沖縄県女子師範学校にて開かれた講演会で、伊東は「沖縄の建築に就て」という題目で講演する。その講演内容は早速翌日から３日間に分けて『琉球新報』に掲載された。伊東が述べた沖縄建築の特徴は以下の通りである。なお、句読点および（　）は筆者が付した。

「第一は琉球建築及び芸術を綜合して見ると、一體に古色を帯びて中央の同時代のものに比べたら数百年の差がある。先日沖之宮を観た時具體的の数字がでてきた。あの建築は四百二十年前のものである。あれに使ってゐるマスは奈良時代のそれと寸法が全く同じである。(中略)第二の特色は土地の矮小にも似合ず、其藝術に現はれた気分がいかにもぼんやりして大まかな所が窺はれる。一體小國の藝術はコセコセして悠然たる所がない。支那は大国であるから其藝術はぼんやりしてゐる。(中略)第三は一面において大きな所があると同時にその裏面において精巧な所がある。細かい細工が施されて巧妙奇抜の点がよく現れ、物によっての使い分けをよく呑みこんでゐる。第四は各系統の藝術の不思議なる和合である。或者は機械的混合になって居り或者は完全和合してゐる。(中略)今東洋藝術の分布を示して見ると左（右）の三つとなる。マホメット藝術　印度藝術　支那藝術而して支那藝術は支那本部日本安南に区別されて其他は皆これ等に包合されてゐ

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

るが偉大なる琉球藝術は今迄全く除外されてゐた。これは學界の欠点で又藝術上の大欠点であった。勿論琉球藝術は大きい意味の支那系統に属すべきものではあるが支那日本安南次に琉球の順にすべきであると思ふ。」［伊東：1924年-①］3

(52) ［鎌倉：1925年-①］1月1日/1月7日/1月10日/1月11日

この記事に、鎌倉は「於首里市役所内美術研究室　鎌倉春熙」という号名を用いている。この雅号は前年1924（大正13）年8月29日に首里城保存の協議のため、沖縄県庁に向かう途中、偶然得たということことが「鎌倉ノート」（ノート【27-93】に記されている。また「首里市役所内美術研究室」とは、前年5月に沖縄に到着した鎌倉が首里市長高嶺朝教に頼んで首里市役所内に写真現像用の暗室を設けてもらって以来、美術研究室として研究の根拠地に使用していた首里市役所内の一室である。この美術研究室には、鎌倉が蒐集した数百点美術参考品が保管されていた。なお、引用箇所の句点は筆者が付した。

(53) おもろさうし巻九「いろいろのこねりおもろ御双紙」（479）

大さとのけすおもひあんしのふし
さすかさが、くにもりぎや、
けらへ、みやうぶ、とよめは、みもん
大さとのとよみもり、
さふろくか、まころくか
うまの、かた、はりやう、やに
うしの、かた、つきやう、やに
あけず、かた、とひやう、やに
はへるかた　まやうやに

尚真王の長女差笠按司の家で立派な屏風が作られ、その作者は大里の豊見守のサフロク（マクロク）。馬の形走り様やに、牛の形突き様やに、蜻蛉形飛び様やに、胡蝶形舞様やにというような絵が描かれた屏風を讃美した歌である。

鎌倉は、この歌を引用する際、おもろさうし巻五「首里おもろの御さうし」としているが、巻九「いろいろのこねりおもろ御双紙」（479）の誤りであろう。以後、鎌倉は琉球絵画を語るとき、この「オモロ」を引いて、琉球独自の題材をもって鑑賞する絵画が琉球の絵師によって描かれたことを記している。

［鎌倉：1925年-①］4、［鎌倉：1925年-②］116～117p、［鎌倉：1929年］21p、

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

(54) 「琉球展を観る」おた（上）（中）『沖縄朝日新聞』 1925（大正14）年9月30日、10月1日［筆者の「おた」とは誰なのか明らかではない。また、同記事の（下）は確認できなかった。］

(55) ［青木・酒井校注：1989年］北沢憲昭「VI資料編　解題」

(56) ［鎌倉：1925年-②］114～115p

(57) 啓明会の理事長である平山成信（1854～1929）はいみじくも「美術」と博覧会制度の始まりともいえるウィーン万国博覧会に事務官として渡航し、以来美術行政に貢献した人物である。ヨーロッパ遊学経験を持つ平山は、アールヌーボーをはじめとする一連の「応用美術」のヨーロッパ社会における位置づけを十分に認識していた。平山成信「竜池会の前途」『竜池会報告』16、18号　1886（明治19）年9月、11月（『美術』1989年所収）

(58) 鎌倉は展覧会に出品した肖像画について信仰に関する絵画として取り扱っている。［鎌倉：1925年-②］115p

「琉球に於ける肖像畫は、全く特殊なものでありまして、殆ど宗教的絵畫に近い意味を持ってゐるのであります。國王の肖像畫竝に家々の祖先の畫像は、熱烈なる祖先崇拝の思想から、佛畫及諸神像と同じく、信仰の對象となるのであります。」

(59) ［正木：1965年］1

鎌倉の展覧会までの足どりは資料2の1925（大正14）年5月の項を参照されたい。

(60) 『東京芸術大学百年史　東京美術学校篇』3、831～832p、1940（昭和15）年3月2日に死去した正木への結城素明による追悼文。

(61) ［伊東：1942年］174p

(62) 注(54)に同じ。

(63) 平成10年度沖縄県立芸術大学附属研究所公開講座第1回（平成11年1月25日）「鎌倉芳太郎と沖縄」における外間守善氏のお話による。

(64) ［鎌倉：1923年－②］69p

(65) 鎌倉の型（紋様）と色彩に関する言及は以下の通りである。

「…紅型文様は全く自然の物象を象徴的に表現している。雲や波に花を散らして星や貝を想わせ、山の下に花や紅葉を配し、その下には紐結びを並べるという

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

風に、それは子供の描いた絵のように自由、奔放である。粗朴で純真な人々の夢幻的表現ともいえよう。

それ等の文様を色彩化するための型紙は、新しい自国産の奉書紙に筆で図案を描き、輪郭に従ってぐいぐい刀で突彫りして作ってあるが、これを図案し彫成した人は意識していたか、恐らく意識していなかったと思われるが、そこに作り出された影絵のような切り抜き型は、今日の新しい絵画理念からすれば極めて重要な問題を提起しているといえる。もとよりこれは私の見解である。この型紙の切り残した所は文様の部分で、その文様は輪郭線で鳥や花等の実体がシルエットとして決定され、その線形は上下左右等互に対象し照応する流動の形式(フォルム)を備えている。それ故その型紙を等間隔に続けていけば、基本となるリズム感は連続する。」[鎌倉：1967年] 8p

(66) 琉球芸術の本質を短い視察の間に的確に捉えた伊東の著述に関しては既に紹介したとおりである。伊東が沖縄を去るにあたって述べた言葉［注(31)参照］には、さすがに世界の本物を見て歩いた伊東の見識が窺える。

また、第2回琉球芸術調査を終え、再度啓明会主催の展覧会、講演会を成功させた鎌倉に、正木はあえて次のようなことを忠告したという。

「今琉球だけやっていると井の中の蛙大海を知らずになるから、初めは書物で古今東西の世界一流の美術について学ばなければならない」[鎌倉：1982年]279p

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

鎌倉芳太郎　論文・著書一覧

1923年－①　「先嶋藝術と桃林寺の印象」(大正12年３月４日『沖縄タイムス』紙上に掲載）［『八重山文化』2　東京・八重山文化研究会　1974年再録］

〃　－②　「琉球美術史論－島津氏の琉球入りと天才自了の出現に就いて－」（一）（二）　『東京美術学校校友会月報』22-4（７月）、22-6（11月）号　東京美術学校校友会

1924年　「八重山芸術の世界的価値／近代芸術に於る新しき指針」全45回（大正13年２月？日～４月12日『沖縄タイムス』紙上に連載）宮城真治新聞資料

1925年－①　「円覚寺壁画考」（大正14年１月１、７、10、11日『琉球新報』紙上に連載）宮城真治新聞資料

〃　－②　「琉球美術工芸に就きて」『啓明会第15回講演集』　啓明会事務所

1926年　「琉球神座考断章」（上）（下）『沖縄教育』157・158

1927年－①　「琉球の人名に就いて」『世界美術月報』16　平凡社

〃　－②　「私立琉球炭鉱尋常小学校参観記」『沖縄教育』165

1928年－①　「琉球染色に就きて」『啓明会第28回講演集』　啓明会事務所

〃　－②　「絵画の有機的構成に於ける色彩論－黒田重太郎氏の構成論に対する質疑」『東京美術学校校友会月報』27巻第１号　東京美術学校校友会

1929年　「琉球美術各論」『世界美術全集　第十七世紀南欧北欧サラセン琉球及び徳川時代(1)』21　平凡社

1930年　『東洋美術史』【田邊孝次との共著】　玉川學園出版部

1931年　「琉球の服飾について」『国際写真情報』10-5　国際写真情報社

1932年　『南畫と北畫』（玉川文庫第27篇）　玉川學園出版部

1937年　『南海古陶瓷』【伊東忠太との共著】　宝雲社

1938年　「絵画鑑賞講座」『茶わん』７

1943年　『東洋の彫刻』　大雅堂

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

1956年　『琉球紅型・第一集』　京都書院
1958年－①　『古琉球紅型の研究』　京都書院
〃　－②　「沖縄の美しいもの」『沖縄タイムス』（7月16日～26日）
1959年　『古琉球型紙』全5冊　京都書院
1964年－①　『古琉球型紙の研究』　京都書院
〃　－②　「久米島紬についての考察－琉球「かすり」の発祥を論ず」『李刊　南と北』31（12日）
1965年－①　「尚家所蔵琉球染織」『大和文華』43　大和文華館
〃　－②　「久米島つむぎについての考察」『琉球新報』（2月10日～13日）
1967年　「色彩論」『古琉球紅型第1期』　京都書院
1968年　「沖縄の染織展目録　解説」　サントリー美術館
1969年　「技法論」『古琉球紅型第2期』　京都書院
1972年－①　「50年前の沖縄－写真でみる失われた文化財－　解説」　サントリー美術館
〃　－②　「砲弾下に失われた琉球の名画」『古美術』36
1973年－①　「沖縄の自然と琉球王統」『琉球王家伝来衣裳』　講談社
〃　－②　「琉球の染織工」『琉球王家伝来衣裳』　講談社
1975年－①　「沖縄の工芸の歴史と特質」『沖縄の工芸』　京都国立近代美術館編　講談社
〃　－②　「沖縄の染織について」『沖縄の工芸』　京都国立近代美術館編　講談社
1976年　『セレベス沖縄発掘古陶瓷』（『南海古陶瓷』の復刻版）　国書刊行会
〃　『鎌倉芳太郎型絵染作品集』　講談社
1982年　『沖縄文化の遺宝』　岩波書店

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

主要参考文献・資料

・『重要歴史資料調査報告書２　県内絵画遺品調査報告書』　沖縄県教育委員会　1977年

・『沖縄美術全集』全６巻　沖縄美術全集刊行委員会　1989年

・『東京芸術大学百年史　東京美術学校篇』１～３　東京芸術大学百年史刊行委員会　ぎょうせい　1997年

・『沖縄の染織』（Ⅰ）染織品編　（II）紅型型紙編　（沖縄県資料調査報告書シリーズ第１集　沖縄県文化財調査報告書第126集）　沖縄県教育委員会　1997年

・『沖縄県立芸術大学附属図書館・芸術資料館所蔵　鎌倉芳太郎資料目録』沖縄県立芸術大学附属研究所　1998年

・青木茂・酒井忠康校注『美術』（日本近代思想大系17）　岩波書店　1989年６月

・飯沢耕太郎　『日本写真史を歩く』　新潮社　1992年

・池田孝之　「琉球の建築発見と都市づくり」(沖縄地区大学放送公開講座)『琉球に魅せられた人々－外からの琉球研究とその背景－』琉球大学公開講座委員会　1996年

・伊東忠太　「沖縄の建築に就て」１－３（『琉球新報』紙上に連載　大正13年８月12、13、14日）　宮城真治新聞資料　1924年－①

・　〃　「琉球を去るに臨みて」(『沖縄タイムス』紙上に連載　大正13年８月22日）　宮城真治新聞資料　1924年－②

・　〃　「琉球芸術の性質」『啓明会第15回講演集』　啓明会事務所　1925年

・　〃　「東洋芸術の系統」『啓明会第28回講演集』　啓明会事務所　1928年－①

・　〃　『木片集』　萬里閣書房　1928年－②

・　〃　「琉球藝術総論」『世界美術全集第十七世紀南欧北欧サラセン琉球及び徳川時代(1)』21　平凡社　1929年

・　〃　『琉球－建築文化－』　東峰書房　1942年

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

・　〃　　『東洋建築の研究（下）』　龍吟社　1944年
・笠原政治　「鳥居龍蔵の沖縄調査」『乾板に刻まれた世界－鳥居龍蔵の見たアジアー』　東京大学総合研究資料館特別展示実行委員会編集　東京大学総合研究資料館　1991年２月
・鎌田弥寿治　『日本写真教育史』　東京写真大学短期大学出版部　1975年
・佐藤道信　『＜日本美術＞誕生　近代日本の「ことば」と戦略』　講談社　1996年
・新城栄徳　『琉文手帖４　沖縄近代文化年表　1868－1945』　琉文菴　1999年
・第一出版センター編　『人間国宝シリーズ　鎌倉芳太郎』14　講談社　1984年
・高木博志　『近代天皇制の文化史的研究－天王就任儀礼・年中行事・文化財』　校倉書房　1997年
・高階絵里加　「山本芳翠の沖縄訪問に関する試論」『美術史』144　美術史学会　1998年
・田辺　泰　『琉球建築』　座右宝刊行会　1972年
・多和田真重　『沖縄文化財百科』全４巻　那覇出版社　1988年
・馬場萬夫監修「日本文化団体年鑑　昭和２年～昭和20年」『（シリーズ戦時下参考図書）日本文化団体事典』１～３　大空社　1990年
・波照間永吉　「琉球の資料学　鎌倉芳太郎が集めた沖縄関係文献資料」『文学』季刊第９巻・第３号　岩波書店　1998年
・正木直彦　『十三松堂日記』１～４　中央公論美術出版　1965年～1966年
・三木　健　「鎌倉芳太郎　沖縄文化研究の半世紀」『沖縄ひと紀行』　ニライ社　1998年９月
・宮城真治新聞資料（『沖縄タイムス』大正11～13年　『琉球新報』大正13～14年）
・柳田國男　「啓明曾と南島研究」『定本　柳田國男全集』30　筑摩書房　1970年
・横山　學　「琉球物の流行と近世の琉球学」『文学』季刊第９巻・第３号

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

岩波書店　1998年
・読売新聞社編『建築巨人伊東忠太』　読売新聞社　1993年

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

資料１《鎌倉芳太郎略年譜》

凡　例

1　本年譜は、「鎌倉芳太郎の前期琉球芸術調査と美術観の変遷」の補足資料として、鎌倉芳太郎（1898～1983）の略歴を明らかにするために作成した。

2　年譜中には特に出典を記さなかったが、事項は以下の資料を参考にして作成した。

・『沖縄タイムス』大正13年（宮城真治新聞資料）
・『琉球新報』大正13～14年（宮城真治新聞資料）
・「鎌倉芳太郎ノート」（表題「雑ノート」【23】～【28】）
「鎌倉芳太郎文献資料」沖縄県立芸術大学所蔵
・鎌倉芳太郎「先嶋藝術と桃林寺の印象」（1923年「沖縄タイムス」紙上に掲載）［『八重山文化』２、東京・八重山文化研究会、1974年再録］
・鎌倉芳太郎『鎌倉芳太郎型絵染作品集』、講談社、1976年
・鎌倉芳太郎『沖縄文化の遺宝』、岩波書店、1982年
・正木直彦『十三松堂日記』１～４、中央公論美術出版、1965年～1966年
・第一出版センター編『人間国宝シリーズ　鎌倉芳太郎』14、講談社、1984年
・『東京芸術大学百年史　東京美術学校篇』３　東京芸術大学百年史刊行委員会、ぎょうせい、1997年
・平成10年度沖縄県立芸術大学附属研究所公開講座　第６回「鎌倉芳太郎紅型資料収集に至る足跡」祝嶺恭子（沖縄県立芸術大学教授）　配布資料、1999年
・新城栄徳『琉文手帖４　沖縄近代文化年表　1868-1945』琉文菴、1999年

3　1921年（大正10）３月から、1925年（大正14）９月までの事項は資料２《鎌倉芳太郎前期琉球芸術調査記録》に詳細を記したので参照されたい。

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

本年譜中、鎌倉芳太郎の生涯において重要と考えられる事項については、資料２の内容との重複を厭わず記載した。

4　年譜中に、鎌倉芳太郎の関与の有無は明らかでなくとも、影響関係があったと思われる事項については「※」を付して記載した。

1898年 （明治31）	０歳	10月19日	香川県木田郡氷上村字長生に生まれる。
1905年 （明治39）	７歳		母を亡くし、父の事業が失敗したため、叔母のもとに引き取られる。
1909年 （明治42）	11歳		叔母を介し、江村清三郎（明治40年東京美術学校卒業・白山高等女学校教諭　日本画家）と知遇を得て、日本画技法に興味をおぼえはじめる。その後、上京まで日本画技法を学ぶことになる。
1911年 （明治44）	13歳	３月	平井尋常小学校卒業。
1913年 （大正２）	15歳	３月	白山高等小学校卒業。
		４月	香川県師範学校入学。
1914年 （大正３）	16歳		第８回文展にて水上泰生（日本画家1877～1951）の『琉球の花』（３等賞）を見る。
1918年 （大正７）	20歳	３月	香川県師範学校本科第一部卒業。 在学中、同郷出身で竹内栖鳳門下の日本画家穴吹（橘）香村氏につき運筆及び写生の法を学ぶ。 また、中央美術社発行の日本画講義録により、結城素明（写生）、松岡映丘（大和絵）、鏑木清方（美人画）、安田靫彦（模写）を学ぶ。
		４月	東京美術学校図画師範科に入学。

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

			水上泰生を麻布本村町の邸宅に訪ねる。 早速その日から宿泊し、制作の手伝いをすることになる。狩野派の彩色原理は水上泰生から学ぶ。
1921年 （大正10）	23歳	3月	東京美術学校図画師範科を卒業。 文部省より沖縄県出向を命ぜられる。 一カ月以上に及ぶ奈良古美術見学。
		4月	沖縄県女子師範学校美術教員として赴任。 ［1923（大正12）年3月まで］ 沖縄県女子師範学校教諭兼沖縄県立第一高等女学校教諭に赴任。 秋頃、首里士族座間味家に下宿。一年間で首里語を覚える。
1923年 （大正12）	25歳	2月	宮古郡へ入学試験官として出向のおり、八重山郡も見学する。［2月10日～3月6日］
		3月	首里近辺の調査。（ノート【25】に調査メモ）
		4月	美術教員就任期間を終え那覇を発つ。［4月18日］ 東京美術学校研究科（美術史研究室）入学。 琉球藝術資料を正木直彦校長に提出。 同校長の紹介により、東京帝国大学伊東忠太教授の指導を受け、研究を続行する。
		6月	首里城が取り壊しになるとの事を知り、伊東忠太に頼んで文部省に保存を訴える。 首里城解体は免れ、1925年4月には、首里城は国宝指定となる。
		7月11月	「琉球美術史論―島津氏の琉球入りと天才自了の出現に就いて―」1、2を『東京美術学校校友会月報』22-4、6号に掲載。
		8月	「八重山藝術論」を脱稿。

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

		9月1日	関東大震災。 東京を離れ、三ヶ月ほど、奈良、京都の古美術の研究に従事する。
1924年 (大正13)	26歳	1月7日	伊東忠太の勧めで、沖縄円覚寺壁画研究のために財団法人啓明会の補助を受けるための推薦を正木校長に願い出る。
		2月～ 4月	『沖縄タイムス』に「八重山芸術の世界的価値/近代芸術に於る新しき指針」全45回を連載。
		3月18日	伊東忠太との共同研究名義で琉球藝術調査が啓明会の補助を受けることが決定。 出発までの一ヶ月間に東京美術学校写真科主任森芳太郎教授のもとで本格的な写真技術を習得する。 正木校長のはからいで3月31日付で東京美術学校助手となる（美術史研究室勤務・無給）。
		4月26日	東京美術学校より学術研究出張の辞令がおりる。
		5月初旬	沖縄到着。第一回琉球芸術調査事業。[1925(大正14）年5月まで]
		5月7日	首里市役所（高嶺朝教市長）内に写真現像のための暗室を設置することが決まる。 沖縄県師範学校講師としての役を引き受け、特に上級4年生のために毎週2時間の沖縄美術史の講義を行う。
		7月下旬	伊東忠太が滞在20数日間の現地調査を行う。 ［7月25日出発　8月25日帰京］
		8月	黒板勝美が史蹟保存のための現地調査に来沖 ［8月25日帰京］
		8月29日	首里城保存の協議のため沖縄県庁に向かう車中にて雅号「春熙」を偶然得る。

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

1925年 （大正14）	27歳	1月	『琉球新報』に「円覚寺壁画再考」を掲載［1月1日/1月7日/1月10日/1月11日の4回］
		2月28日	「古琉球の美術」古琉球芸術に関する写真数百枚を陳列しての展示会及び講演会（首里市教育部会主催）
		3月26日～27日	文部省古社寺保存委員会にて首里城が特別保護建造物に指定されることが可決される。 これにより首里城は国宝指定となる。
		5月	東京美術学校美術史研究室に帰校。研究資料は東京美術学校美術史研究室に運ぶ。 「紋様、絵画、彫刻、織工、陶磁、漆工、楽工、等につき古記録、実物(三千点)、写真（四切約一千枚カビネ一千枚）を蒐集して…」（ノート【24-269】） また、臨時写真科の一室で写真等の整理作業を行う。 柳田国男を成城の書斎に訪ねる。
		9月5日～7日	琉球芸術展覧会及び講演会（啓明会主催、東京美術学校会場） 鎌倉が主に蒐集した約2000点とその他借入品を併せて3000点。3日間で5000名の来館（1日1600人）。 啓明会第15回講演会 「琉球史概観」東恩納寛惇/「南島研究の現状」柳田国男/「古琉球の歌謡に就きて」伊波普猷「琉球美術工芸に就きて」鎌倉芳太郎/「琉球芸術の本質」伊東忠太/「琉球の音楽に就きて」山内盛彬 展覧会の予想以上の成功に、啓明会からさらに研究費をうけることになり、琉球研究に旅

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

			立つことが決まる。
1926年 （大正15）	28歳	4月	第二回琉球藝術調査事業。［1927年（昭和２）９月まで］ 沖縄本島、奄美大島、久米島、伊平屋島、宮古諸島、八重山諸島、（台湾、上海経由にて帰京）を調査。 特に琉球固有の宗教についての研究、八重山諸島等から琉球染織品を蒐集する。 「二千餘点の実物、写真、拓本、古記録等を携え帰朝しました。」（ノート【24-269】） 琉球王府紺屋宗家澤岻（たくし）家から型紙、染手本等の実物資料を譲り受ける。同時にその技術も習得する。 「琉球神座考断章」（上）（下）を『沖縄教育』157・158に掲載。
		12月末	国頭、伊平屋島調査。
1927年 （昭和２）	29歳	9月	台湾・上海経由で東京に帰着。 正木校長を訪ねる。［９月５日］ 正木校長担当の「東洋絵画史」講座のため有給助手となり、講話を筆録するかたわら琉球研究の整理をすることになる。 この年から数年にわたり、岩波書店刊行の世界美術全集の解説を執筆。 「琉球の人名に就いて」を『世界美術月報』16に掲載。 「私立琉球炭鉱尋常小学校参観記」を『沖縄教育』165に掲載。
1928年 （昭和３）	30歳	1月	※「古琉球〈紅型〉衣裳展覧会」［１月25～29日］銀座松屋呉服店　展覧会目録には伊波普猷の解説が載せられる。

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

			「絵画の有機的構成に於ける色彩論—黒田重太郎氏の構成論に対する質疑」『東京美術学校校友会月報』27-1号に掲載。
		9月	啓明会よりさらに4000円の補助金を受ける。
		9月6日～8日	『琉球朝鮮波斯印度展覧会』及び講演会（財団法人啓明会十周年記念事業、東京美術学校会場） 紅型を中心とする染織工芸資料3000点を陳列。 啓明会第28回講演会 「東洋藝術の系統」伊東忠太/「琉球染色に就きて」鎌倉芳太郎/「朝鮮陶器に就きて」倉橋藤治郎/「燉煌出土品に就きて」矢吹慶輝/「西洋美術に於ける東洋的要素」矢代幸雄/「ペルシャ旅行談」黒板勝美
1929年（昭和4）	31歳		この年、足繁く正木校長を訪ね、絵画史、日本美術史の口授を受ける。 「琉球美術各論」を『世界美術全集』21に掲載。
1930年（昭和5）	32歳	1月	山内静江（帝展洋画部入選）と結婚。 正木校長に「風俗史」講義を担当するよう申しつけられる。 ※三越にて「琉球展覧会」開催。
		4月	東京美術学校講師となり「風俗史」講座を担当。『東洋美術史』（田邊孝次との共著、玉川學園出版部）を執筆、刊行。
		10月	長男秀雄生まれる。
1931年（昭和6）	33歳	3月	大阪、兵庫、京都を正木校長に随行。大阪府工芸協会総会に出席。兵庫県武庫郡住吉の吉田履一郎氏の所蔵品を見る。 「琉球の服飾について」を『国際写真情報』

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

			10-5に掲載。
1932年 （昭和７）	34歳		『南畫と北畫』(玉川文庫第27篇　玉川學園出版部）出版。
1933年 （昭和８）	35歳	４月	東京美術学校にて「東洋絵画史」講座担当。
		８月	『歴代宝案』調査（沖縄県那覇市天尊廟)。理研陽光印画紙を用いて複写本を作る。 『児童百科辞典』（玉川学園出版刊）の「東洋彫刻史」の項を執筆（後に『東洋の彫刻』として大雅堂より刊行)。
1934年 （昭和９）	36歳	11月	中野区沼袋２丁目29番２号の住所に自宅を新築して移る。
1935年 （昭和10）	37歳	６月	円心筆様五大明王画像（平安時代）を感得する。
1936年 （昭和11）	38歳	４月	前年感得した円心筆様五大明王画像が国宝に指定される。
		12月	東京を出発し、沖縄に向かう。
1937年 （昭和12）	39歳	１月	首里城・浦添城を中心に発掘調査。 『南海古陶瓷』を伊東忠太との共著にて出版。
1939年 （昭和14）	41歳	２月	長女恭子生まれる。
		４月	東京美術学校にて「東洋美術史」講座担当、引き続いて「日本美術史」「東洋彫刻史」講座担当。
1940年 （昭和15）	42歳	６月	鳳凰琴附属琴台（杉子爵家旧蔵、現大和文華館所蔵）を譲り受け、東京帝室博物館考古学会議講演において発表。
1942年 （昭和17）	44歳	９月	東京美術学校助教授に任命される。
1943年 （昭和18）	45歳		『東洋の彫刻』を大雅堂より刊行。

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

1944年 (昭和19)	46歳		文部省の東京美術学校改革により教授陣の更迭が行われる。
		6月	依頼本官を免ぜられる。当時の官職は東京美術学校助教授、物品（図書、標本）会計官吏（文庫科主任）。
1945年 (昭和20)	47歳	3月	自宅戦災に偶い、蔵書3000点及び東洋美術史研究資料全部を焼失。但し、琉球芸術資料(数千点）は東京美術学校文庫保存のため焼失を免れる。
1947年 (昭和22)	49歳	3月	焼け跡に自宅を新築する。それまでに琉球資料の写真乾板数百点を焼跡防空壕の水気により損傷する。
1956年 (昭和31)	58歳		「琉球紅型」の実大手彩色豪華本の製作を完成。限定本『琉球紅型・第一集』（定価四万五千円）を京都書院より刊行。 ブラッセル万国博に出品を求められ、限定版八十部に達する。
1957年 (昭和32)	59歳		琉球政府比嘉主席の希望により、名渡山愛順を通じて型紙600点を現地に返還。 紅型技法の保存とこれによる伝統工芸産業の育成に協力する。
1958年 (昭和33)	60歳	7月	『沖縄タイムス』に「沖縄の美しいもの」を連載。[7月16日～26日]
		9月	第5回日本伝統工芸展に「琉球紅型中山風景文長着」出品。入選。以後、毎回出品し入選する。 『古琉球紅型の研究』を京都書院より刊行。
1959年 (昭和34)	61歳	5月	『古琉球型紙』5冊を京都書院より刊行。
		9月	第6回日本伝統工芸展に「型絵染霞松文紬地長着」出品。入選。

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

1960年 (昭和35)	62歳		新潟大学教育学部高田分校の非常勤講師となり、「東洋美術史」及び「東洋工芸史」「東洋美論」を講ずる。
		9月	第7回日本伝統工芸展に「型絵染流水竹桜文紬地長着」出品。入選。
1961年 (昭和36)	63歳		この年、社団法人日本工芸会の正式会員となる。
		9月	第8回日本伝統工芸展に「型絵染印金芦文紬地長着」出品。入選。
1962年 (昭和37)	64歳	5月	日本工芸会理事（二カ年）に就任。
		9月	第9回日本伝統工芸展に「紅朧型印金梅雲縦枠文紬地長着」出品。入選。
1963年 (昭和38)	65歳	9月	第10回日本伝統工芸展に「紅朧型梅波格子文紬地長着」出品。入選。
1964年 (昭和39)	66歳	9月	第11回日本伝統工芸展に出品入選の「藍朧型印金芦文『◆』紬地長着」が日本工芸会会長賞（奨励賞）を受ける。
		11月	『越後系型紙』3冊を京都書院より刊行。
		12月	「久米島紬についての考察―琉球「かすり」の発祥を論ず」を『季刊　南と北』31に掲載。
1965年 (昭和40)	67歳		「尚家所蔵琉球染織」を『大和文華』43に掲載。
		9月	第12回日本伝統工芸展に「藍朧型茄子蝶文紬地長着」出品。入選。
1966年 (昭和41)	68歳	2月	『琉球新報』に「久米島つむぎについての考察」を連載。［2月10日～13日］
		9月	第13回日本伝統工芸展に「紅型梅花氷裂文上布地長着」出品。入選。

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

1967年 (昭和42)	69歳	9月	第14回日本伝統工芸展に「紅朧型芒小花文紬地長着」出品。入選。
		12月	「色彩論」『古琉球紅型第1期』を京都書院より刊行。
1968年 (昭和43)	70歳		サントリー美術館『沖縄の染織展』の目録解説を執筆。
		9月	第15回日本伝統工芸展に「型絵染竹葉文上布地長着」出品。入選。
1969年 (昭和44)	71歳	6月	「技法論」『古琉球紅型第2期』京都書院。
		9月	第16回日本伝統工芸展に「型絵染線条縦枠文上布地長着」出品。入選。
1970年 (昭和45)	72歳	9月	第17回日本伝統工芸展に「紅型蔓草梅小花文上布地長着」出品。入選。
1971年 (昭和46)	73歳	3月	戦後初めて沖縄に赴く。
		9月	第18回日本伝統工芸展に「型絵染波紅葉文上布地長着」出品。入選。
1972年 (昭和47)	74歳	2月	首里の琉球政府立博物館において『50年前の沖縄—写真でみる失われた文化財—』を開く。
		4月	勲四等瑞宝章を受ける。
		9月	第19回日本伝統工芸展に「型絵染竹林文上布地長着」出品。日本工芸会総裁賞を受ける。「砲弾下に失われた琉球の名画」を『古美術』36号に掲載
1973年 (昭和48)	75歳	4月	重要無形文化財技術保持者（型絵染）の個人認定を受ける。 第9回人間国宝新作展に「型絵染霞文上代紬地長着」を出品。以後、同展に毎回出品する。
		7月	『琉球王家伝来衣裳』（講談社）を編集し「沖縄の自然と琉球王統」「琉球の染織工」を執筆。

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

		9月	第20回日本伝統工芸展に「型絵染菱繋竹文上布地長着」出品。入選。
1974年 (昭和49)	76歳	4月	第10回人間国宝新作展に「型絵染霞文上代紬地長着」を出品。
		9月	第21回日本伝統工芸展に「型絵染渡鳥文上布地長着」出品。入選。 この年より玉川大学名誉教授となる。
1975年 (昭和50)	77歳	3月	『沖縄の工芸』(京都国立近代美術館編　講談社)に「沖縄の工芸の歴史と特質」「沖縄の染織について」を執筆。
		4月	第11回人間国宝新作展に「紅型水辺葡萄鶴文紬地長着」を出品。
		9月	第22回日本伝統工芸展に「型絵段染山水文上布地長着」出品。入選。
1976年 (昭和51)	78歳	2月	『セレベス沖縄発掘古陶瓷』(『南海古陶瓷』の復刻版)を国書刊行会より刊行。
		4月	『鎌倉芳太郎型絵染作品集』を講談社より刊行。
		5月	出版記念として「鎌倉芳太郎作品展並びに琉球紅型資料展」を渋谷西武百貨店にて開催。
1982年 (昭和57)	84歳	12月	『沖縄文化の遺宝』を岩波書店から刊行。
1983年 (昭和58)		8月3日	84歳、急性心不全のため東京の自宅にて死去する。
1986年 (昭和61)			沖縄県立芸術大学開設に伴い、鎌倉芳太郎資料が昭和61年と平成2年に分けて同大学に寄贈される。

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

資料２《鎌倉芳太郎　前期琉球芸術調査記録》

凡　例

「鎌倉芳太郎　前期琉球芸術調査記録」は「鎌倉芳太郎ノート」中、表題「雑ノート」ノート【23】～【28】（「鎌倉芳太郎文献資料」沖縄県立芸術大学所蔵）を基本とし、その他管見の限り、鎌倉芳太郎が関わった芸術調査及びそれに関わると思われる事項を記した。本論注(1)にて「前期」と規定した調査記録の期間は、1921年（大正10）４月の沖縄県女子師範学校赴任時から、1925年（大正14）９月に東京上野にて開催された「琉球芸術展覧会」までの期間であり、その期間における事項を掲載した。

本調査記録と「鎌倉芳太郎撮影写真資料」（沖縄県立芸術大学所蔵）、鎌倉芳太郎著『沖縄文化の遺宝』に掲載された写真と対応させるために、以下のような順で記載し、それぞれの資料整理番号を対応させた。

１　調査日　２　調査地　３　調査対象　４　ノート番号

５　画像データ番号　　６　『遺宝』写真番号

但し、４においては「鎌倉芳太郎ノート」以外に参照した参考文献名も記載した。以下に各項目の詳細を記す。なお、詳細を説明するにあたって、資料名は以下のように略称した。各資料については本論１章を参照されたい。

・「鎌倉芳太郎ノート」→「鎌倉ノート」

・「鎌倉芳太郎撮影写真資料」→「鎌倉写真資料」

・「鎌倉芳太郎撮影写真資料画像データベース」→「画像データ」

・鎌倉芳太郎著『沖縄文化の遺宝』（岩波書店　1982年）→『遺宝』

１　【調査日】

調査の記載順は「鎌倉ノート」中の調査日を基準に同ノートのページ番号に従ってすすめた。ただし記述順がページ番号とは関係なく前後している場合は、表中にはページ番号には関係なく、記載されている調査日によって調査順を推定して並べた。

「鎌倉ノート」は通常、見開き左ページから記述されているが、逆に右

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

から記述されている箇所は、記述順が異なるものとして考慮した。推定した記載順によって、ページ番号が大幅に異なる箇所には「＊　＊　＊　＊」を挿入して区切った。

例　記述順がページ番号とは関係なく前後している場合

「鎌倉ノート」中の調査日を基準にそのページ番号に従ってすすめたが、記載される調査日がページ番号とは関係なく前後している場合は、調査順を推定して並べかえたものもある。例えば、ノート【26】の調査順をページ番号通りに並べると、9月5日、8月25日、9月6日、9月21日、8月22日という順になってしまう。「雑ノート」であるがゆえに、調査メモは必ずしもページ番号どおりではない。このようにページ番号には関係なく記載されている場合、記述の前後関係や調査地を考慮して、調査順を推定した。具体例をあげる。最初に出てくる造形関係の記述はページ番号でいうと【26-489】の崇元寺の記録であるが、調査日が明記されたものとして最も早いものは、「8月25日」の記載がある【26-502】の弁財天堂の記録であるため、これを仮にAとする。その後ページ順に進めるが、弁財天堂の記録よりページ番号の早い【26-490】に9月5日の記録があるため、記載日に従って後に並べこれをBとする。その場合、9月5日の記録の前ページ【26-489】の崇元寺の記録も併せて後に並べ、これをB'とする。また、【26-507】に9月6日の記録があるため、これをCとして、9月21日の記載日がある【26-512】を後に続ける。なお、【26-516】記載の「8月22日　長嶺華國翁（60歳）（首里市儀保町）を訪ねる」という記録は、他の記述とは異なりノート見開き半分のスペースが充てられており、明らかに後日、改めて記されたものと思われる。しかし、ここではその記載日に従い、Aの前に並べたため、以下のような順になる。

①　【26-516】「8月22日　長嶺華國翁（60歳）（首里市儀保町）を訪ねる」
②　A【26-502】「8月25日　弁財天堂」～【26-506】
③　B'【26-489】「崇元寺」、B【26-490】「9月5日」
④　C【26-507】「9月6日　自了の墓に詣る」

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

2　【調査地】

地名は基本的には「鎌倉ノート」の記録に従ったが、同記録中の調査地名は、同地、同所在地が数通りの呼び名で記載されている場合があるため、表中では統一して記載した。統一の方法は次の通り。

・字名が現在の行政区画の地名として残っていない場合は、現行地名を〈　〉で括り添えた。

・所在地の家名は統一した名称を用いた。また、調査地がわからない場合は「？」とし、所蔵者が分かる場合には所蔵者名を、調査地が明記されていない場合でも調査対象と画像データの照合からその所蔵がわかる場合には、その所蔵地を記した。その場合、調査地名の前に「＊」（アステリスク）を付した。

例　同所在地が数通りの呼び名で記載されている場合-１

那覇壺川　屋慶名を訪ふ【26-506】
島尻郡真和志村字壺川一三四　屋慶名政方氏【27-69】
→那覇市壺川

例　同所在地が数通りの呼び名で記載されている場合-２

首里市赤平町二丁目五十一番地　読谷山朝慶氏【27-51】
読谷山家【27-54】
→読谷山御殿

なお御殿所蔵に関しては以下のように省略した。

中城御殿　＝尚侯爵家（首里市当蔵町）
宜野湾御殿　＝尚琳男爵家（首里市当蔵町）
松山御殿　＝尚順家（首里市桃原町）
浦添御殿　＝浦添朝顕家（首里市桃原町）
読谷山御殿　＝読谷山朝慶家（首里市赤平町）
伊江御殿　＝伊江朝献家（首里市当蔵町）

例　現在の行政区画の地名として残っていない場合

上泉崎町　渡名喜家を訪ふ【26-508】→渡名喜家（那覇市上泉崎町〈泉

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

崎>)

3　【調査対象】

(1)　調査対象の名称は、基本的には「鎌倉ノート」に記録されている名称を用いた。但し、対象物を明らかにするために必要に応じてその名称を変え、同ノート記録から対象物の特徴をとらえ（　）で括って記した。また、ノートに記された文字の読解が不可能な場合は「◆」を記した。ノート中に名称が記載されていない場合は、適宜対象を表すのに相応しいと思われる名称を記した。その場合名称の前に「＊」（アステリスク）を付した。

例１　白地　ヒヾ　藍絵（香炉のスケッチあり）→*香炉（白地　ヒビ　藍絵）

例２　豊見城家所蔵品　１、座間味之筆　鶉
　　→豊見城朝熙家（首里市）　殷元良筆「鶉図」（絹本極彩色密画）

(2)　画家名は、ノート中に和名、唐名の両方記されている場合でも、唐名に統一した。

例　我謝毛世輝筆「山作蘭図」→毛世輝筆「山作蘭図」

唐名と和名の一覧を以下に記す。

自了　（城間清豊）　1614～1644
琥自謙（石嶺伝莫）　1658～1703
呉師虔（山口宗季）　1672～1743
殷元良（座間味庸昌）1718～1767
呉著温（屋慶名政賀）1737～1800
向元瑚（小橋川朝安）1748～1841
鄭嘉訓（古波蔵泰橋）1767～1832
慎思九（泉川寛英）　1767～1844
翁宏熙（伊良皆盛昆）1777～1849
毛世輝（我謝盛保）　1787～1830
毛長禧（佐渡山安健）1806～1865

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

4　【ノート番号】

(1)　「鎌倉ノート」のノート番号は「鎌倉芳太郎文献資料目録」(『沖縄県立芸術大学附属図書館・芸術資料館所蔵　鎌倉芳太郎資料目録』沖縄県立芸術大学附属研究所、1998年）のうち「鎌倉ノート」目録に従った。ノート番号は【　】で括った。また「鎌倉ノート」は現在、マイクロフィッシュに見開きの状態で焼かれており、整理番号が付されている。「鎌倉ノート」のページ番号を記す場合はこれに従った。「鎌倉ノート」の内、本資料に活用した「雑ノート」【23】～【28】のマイクロフィッシュ資料の整理番号を以下に記す。

「雑ノート」【23】16～97
「雑ノート」【24】102～270
「雑ノート」【25】276～398
「雑ノート」【26】403～533
「雑ノート」【27】16～93
「雑ノート」【28】98～149

なお「鎌倉ノート」の調査記録に調査スケッチがある場合は、ノート番号の後に「●」を記した。

(2)　「鎌倉ノート」以外から記録をひいたものに関しては、その書名、論文名を載せた。その場合、以下のような略称を用いた。

・【先嶋芸術】　＝「先嶋藝術と桃林寺の印象」「沖縄タイムス」1923年（『八重山文化』２、東京・八重山文化研究会、1974年再録）
・【琉球】　＝伊東忠太『琉球―建築文化―』東峰書房、1942年
・【宮城真治新聞資料】＝『沖縄タイムス』『琉球新報』大正13～14年新聞切抜き
・【十三松堂日記】　＝正木直彦『十三松堂日記』３、中央公論美術出版、1966年
・【作品集年譜】　＝『鎌倉芳太郎型絵染作品集』年譜、講談社、1976年

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

・【遺宝】　＝　『沖縄文化の遺宝』、岩波書店、1982年
・【百年史】　＝　『東京芸術大学百年史　東京美術学校篇』1～3、東京芸術大学百年史刊行委員会、ぎょうせい、1997年

5　【画像データ番号】

「鎌倉芳太郎撮影写真資料画像データベース」該当画像データ番号。表中の画像データ番号は、撮影日とは関係なく調査対象と対応するものにはデータ番号を全て記載した。ただし、写真撮影の記録として確認できるのは、ノート【25-340】の2月25日の記録であるため、それ以前の調査対象と一致する画像データ、及び『沖縄文化の遺宝』掲載の写真番号には、全て「＊」を付して記載した。

6　【『遺宝』写真番号】

鎌倉芳太郎著『沖縄文化の遺宝』（岩波書店　1982年）に収められている写真の該当番号。

「鎌倉写真資料」現存1269点（整理番号1287点中18点欠損）のうち半数の655点が『遺宝』に掲載されている。ただし、実際に『遺宝』に掲載された写真は541点であり、655点という数値は重複した写真の枚数も含める。

（次頁より調査記録表示）

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

資料2

【調査日】	【調査地】	【調査対象】	【ノート番号】	【画像データ番号】	【『遺宝』写真番号】
1921年（大正10）					
3月	東京美術学校図画師範科を卒業				
	文部省より沖縄県出向を命ぜられる				
	一カ月以上に及ぶ奈良古美術見学				
4月	沖縄県女子師範学校教諭兼沖縄県立第一高等女学校教諭に赴任				
	夏、現役兵として6週間、熊本第六師団第二中隊に入隊				
	秋頃、首里士族座間味家（首里市大中町）に下宿、一年間で首里語を覚える				
1922年（大正11）					
	春、「沖縄タイムス」に末吉安恭の「琉球画人伝」が数週間にわたり掲載される				
	末吉安恭氏（那覇市松山町　沖縄タイムス社脇の書斎）を訪ねる				
	伊波普猷（沖縄県立図書館長）、真境名安興（那覇市泉崎）を相次いで訪ねる【遺宝】167P				
8月22日	長嶺華國翁（60歳）（首里市儀保町）を訪ねる		【26-516】		
8月25日	弁財天堂（首里蓮池内）		【26-502】	*37	*134 「弁財天堂　東南面」
	安国寺（首里市寒川町）	「出山釋迦図」「釋迦涅槃図」	【26-503】		
	〃	不動明王像（琉球製）	〃		
	〃	釈迦像（木像、中国製）	〃		
	〃	観音菩薩像（木像、中国製）	〃		
	〃	誕生仏（銅像、中国製）	〃		
	〃	薬師像（日本製）	〃		
	〃	聖観音像（厨子入、日本製）	〃		
	読谷山御殿	孫億筆「花鳥絵巻」	〃		
	玉城盛康家（首里市赤平町玉城殿内）	自了筆「仙人図」	【26-504】	*886	*333 「高士逍遥図」自了筆
	譜久山朝宜家（首里市）	探幽筆「蘆雁図」	【26-505】		
	〃	自了筆「陶淵明図」	〃 ●	*901	*328 「陶淵明図」自了筆
	屋慶名家（島尻郡真和志村字壺川）	殷元良筆「雪中雉図」	【26-506】	*181、186、737、	*342 「雪景花鳥図」殷元良筆
	〃	殷元良筆「虎の図」	〃		

＊ ＊

	崇元寺（那覇市）		【26-489】	*21、298、382、	*203～205 「崇元寺石門」

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

					1244、1245、	
	〃	伝除葆光筆「東峯禅師像」	〃			
	〃	殷元良筆「普化禅師図」	〃	●		
	〃	天井画	〃		*62、160～162、164～170、681、	*208～215 「崇元寺　本堂天井画」
	那覇三省堂	殷元良筆「猫図」	【26-490】	●		
9月5日	那覇市壺川	呉著温（屋慶名政賀）の系図の研究	【26-490】			
	浦添御殿	浦添御殿花鳥画	【26-490】			

＊　＊

	比嘉朝健氏（龍界寺小路？）	殷元良筆「山水図」	【26-507】		*226、740、870、	*341 「秋景山水図」殷元良筆
	〃	毛長禧筆花鳥図五巾	〃		*101、868、	*354 「牡丹尾長鳥図」毛長禧筆
	〃		〃		*99、748、	*355 「桃竹白鴨図」毛長禧筆
	〃		〃		*211、745、	*356 「鷹雀枯木芙蓉図」毛長禧筆
	〃		〃		*22、747、	*357 「梅尾長鳥図」毛長禧筆
	〃		〃		*525、1118、	*358 「柳椿双鳩図」毛長禧筆
	〃	呉著温筆「山水図」	〃			
9月6日	自了の墓に詣る。		〃	●		
	渡名喜家（那覇市上泉崎町〈泉崎〉）殷元良筆「花鳥画」（柳に芙蓉・池と鴛鴦対・柳樹鵪鴿）		【26-508】			
9月21日	安里八幡（島尻郡真和志村安里）		【26-512】		*410、1255、	
	〃	御神体、小鐘（百斤位）	〃			
	護国寺（那覇市若狭町）		【26-512】		*1250、	
	〃	不動明王像	〃		*190、261、1134、	*162 「護国寺　不動明王像」
	〃	立像二童子	〃		（407、860）	
	〃	鐘	〃			
	〃	観音像（塑像）	〃			
	〃	不動明王像（小）	〃			
	臨海寺（那覇市住吉町）	梵鐘	【26-513】			
	〃	自了筆「観音菩薩図」	【26-514】		*16、429、884、	*330 「渡海観音図　自了筆」
	〃	聖天像	〃	●	*761（？）	
	〃	不動明王木像（高四、五寸）	〃		*732、733、1136、	（？）
	〃	弘法大師像	〃			

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

	〃	本尊薬師如来像	〃	●	*246、1127、	*165 「臨海寺　沖寺本　尊薬師三尊像」
	仙寿院（那覇市松下町〈松山・久茂地〉）不動明王像		【26-519】	●	*177、180、	163 「仙寿院　不動明王像」
	東龍寺*聖現寺隠居寺（那覇市久米町）熊野権現御神体（阿弥陀仏）		【26-520】		*1190	
	〃	〃　（阿弥陀仏）	〃		*1188	*219 聖現寺　熊野権現本地仏
	〃	〃　（釈迦仏）	〃		*1191	
	神応寺・識名社宮（島尻郡真和志村識名）		【26-525、526】			*207
10月20日	沖縄御嶽（崇元寺前）を望む　「日本古代史にあらはれたる琉球」研究		【25-278～286】			

1923年（大正12）

2月10日	宮古郡へ入学試験官として出向のおり、八重山郡も見学する［2月11日～3月5日］					
2月11日	宮古島着					
2月14日	祥雲寺	達磨像（掛軸）	【25-293】			
	〃	涅槃像（掛軸）	〃			
	〃	本尊釈迦如来像（木像）	〃			
	〃	誕生仏（銅　四寸）	〃			
	〃	〃　（木彫　三寸）	〃			
	〃	聖観音像（木彫　五寸）	〃			
	〃　左壇	観音浮彫板	〃			
	〃　右壇	達磨大師像（木彫　六寸五分）	〃			
2月15日	漲水神社		【25-296】			
	権現堂	御神体海馬鏡	【25-297】			
	観音堂	獅子石彫、本尊観音像	【25-297】			
2月17日	平良港出発		【25-306】			
2月18日	石垣港到着。由地旅館に宿泊		【25-307～309】			
2月21日	八重山権現堂		【25-320】		*668、734、791、798、849、864、888、	*402 「八重山権現堂本殿」
	〃	観音像（厨子入　三体）	〃			
	〃	額面	〃		*1123	
	〃	聯	〃		*1123	
	山里朝・家（石垣市字大川）	鷹図（岩水）	【25-321】			
	〃	〃（小鳥ヲトラントスル図/蘆）	〃			

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

	〃	〃（小鳥ヲトリタル図/松椿）	〃		
	〃	〃（小鳥ヲハナシタル図/梅椿）	〃		
2月22日	桃林寺（住職岡本辨山氏）		【25-323～330】	*791	*395 「八重山権現堂表門と桃林寺山門」
	〃	仁王像	【25-323】	*902、913、1216、1217、	*397 「八重山桃林寺山門の仁王」
	〃	梵鐘	〃		
	〃	釈迦涅槃之図	〃		
	〃	十王図（十巾）	〃		
	〃	神像	〃		
	八重山権現堂	扉絵	【25-327、328】	*912、1220、	*389、390 「八重山権現堂内陣扉絵麒麟図」
	〃	鬼面三面	【25-329】	*1123、1219、	*406 「八重山権現堂　本殿内陣正面四柱鬼面」
	崎山用松家（石垣市字石垣）	位牌龍鳳凰及鬼	【25-330】		
	〃	ローソク立一対龍彫刻	〃		
2月23日	桃林寺	鬼図の模様	【先嶋芸術】14P		
2月24日	桃林寺	鬼図の模様	【25-335】		
	桃原用祖家（石垣市字石垣）	位牌（位牌龍鳳凰及蓮 久田ヌウシュマイ作）	【25-335】●	*863	*398 「位牌　竜鳳凰蓮台金竜蠟燭 グダウシュマイ（長興氏大浜善巧）作」
	宮良長扶家（石垣市字新川）	金龍一対、金花（久田ヌウシュマイ作）	【25-335】		
	〃	*大浜善繁筆「松下鍾馗図」	【先嶋芸術】24P		*1125　*391 「松下鍾道図　大浜善繁筆」
	宮良長庸家（石垣市字新川）	寿老人図	【25-335】		
	玻座真忠敬家（石垣市字登能城）額面（木材楠）		【25-336】		
2月25日	喜舎場永洵、喜舎場用安、崎山用宴と桃林寺を訪ねる。		【25-340】		
	桃林寺、権現堂の全ての写真撮影		【先嶋芸術】25P		
	宮良安宣氏（字登能城）を訪ねる		【25-355】		
3月1日	桃原用豊家（字石垣）	花米繕一対　ケヤキ	【25-358】		
	〃	龍　盆（祭用）	〃		
	〃	唐人舟中奏琴之図（旅立用）	〃		
	〃	松下唐人物図（正月用）	〃		
	〃	鶴松図（婚礼用）	〃		
	〃	葡萄図	〃		
	〃	虎図（旅立用）	〃		

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

	〃	水仙花胡蝶飛舞図	〃		
	〃	仏壇煙草盆	〃	1143	399 「飛龍把手煙草盆 グダウシュマイ（長興氏大浜善巧）作」
	〃	金花　金龍一対宛	〃	1145	400 花米膳一対 グダウシュマイ（長興氏大浜善巧）作」
	宮良安宣氏の写真を撮る		【25-358】		
	新城野佐家（字登能城）	弥勒面	【25-359】		
	〃	獅子（木彫）	〃		
3月2日	宮良安宣氏(字登能城)より八重山蔵元絵師の画稿を譲り受ける		【遺宝】212P	1214、1215、1218、	
3月3日	十六日祭				
	八重山権現堂	鳳凰絵の扉	【25-363】		
	〃	龍柱	〃		
	〃	麒麟の扉（左右）	〃	912、1220、	389、390「八重山権現堂　内陣扉絵麒麟図」
	〃	鬼面（阿吽）	〃	1123、1219、	406 「八重山権現堂本殿内陣正面四柱鬼面」
	〃	内陣扉(葡萄、梅、奥カズラ花、前)	〃		
	〃	扉止彫刻	〃 ●		
	〃	欄干彫刻	〃 ●	849、864、	405 「八重山権現堂本堂正面階段欄干獅子」
	桃林寺	仁王像	【25-364】	902、913、 1216、1217、	397 「八重山桃林寺山門の仁王」
	富永長章家（字新川）	「旗頭記」旗頭製作の図案	【25-364、370～376】		
	岩崎卓爾氏(石垣測候所所長)	喜友安信筆「八重山農具類并士族平民風俗之図」	【25-376】		
3月5日	石垣港出発				
3月7日	那覇港到着				
3月17日	中城御殿	衝立「古渓三笑之図（表）」	【25-378】	100	247 「中城御殿書院絵戸（表）虎渓三笑図」
	〃	〃 「鍾馗獅子架之図（裏）」	〃	202	248 「中城御殿書院絵戸（裏）騎獅鍾馗図」
	〃	〃 「高士岩面書字図（表）」	〃		
	〃	〃 「松鷲図」	〃	151	250 「中城御殿書院絵戸　藤竹白鷹図」
3月18日	附岩崎卓爾(石垣測候所所長)よりグダウシュマイに関する書簡が届く		【先嶋芸術】28P		
3月23日	卒業式		【25-378】		
3月24日	宮里家（那覇市西本町）	写真撮影に行くが都合つかず	【25-378】		
3月25日	坂元商店（那覇市大門前通り）	にて写真乾板購入	【25-379】		

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

	円覚寺	写真撮影	〃			
3月26日	大宜見朝隆家（首里市）	写真撮影（小橋川朝重とともに）				
		浦添◆◆の兄の肖像	〃			
	〃	前川親方肖像	〃			
	〃	向元瑚の絵画　三枚	〃			
	松山御殿訪問		〃			
3月27日	松山御殿	神猫図	〃	310、854、	339	「神猫図　伝殷元良筆」
	?	写真撮影（小橋川朝重とともに）				
3月28日	崎原家（那覇市）	翁宏熙筆「蘆雁之図」	〃	210、405、		
	〃	〃　「水鳥之図」	〃	392		
	小川写真館（那覇市）	写真撮影（尚順男爵所蔵品）	【25-379】			
	〃	慎思九筆「松下高士之図」	〃	875		
	〃	呉着仁筆「春景山水之図」	〃	1045、1135、	376	「春景山水図　呉著仁筆」
	〃	殷元良写「夏景山水之図」	〃	312、746	340	「夏景山水図　殷元良筆」
	〃	自了筆「神猫之図」	〃	310、854、	339	「神猫図　伝殷元良筆」
	〃	毛長禧筆「孔子像」	〃			
	〃	自了筆「歸去来之図」	〃	313、882、899、901、1053、	328	「陶淵明図　自了筆」
	〃	古琉球窯染付武者像	〃	976（？）		
	〃	琉球蕎麦釉神農像	〃			
	沖縄県立図書館	（写真撮影）馬を引く図	〃			
	亀嶋家（那覇市久米町）	毛世輝筆絵画	〃			

＊　＊

3月29日	中城御殿	野国名馬之図	【23-18】	1018？		
	〃	呉坤ノ虎	〃			
	〃	清原氏女雪信（？）、山水絵巻	〃			
	〃	支那行列絵巻	〃			
	〃	清明上河図記	〃			
	〃	伏義龍馬図	〃			
	末吉安恭家（首里市儀保）	古波蔵毛文達筆関羽之図	【23-22】			

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

	首里市役所	仁王像（石像）	〃		
	護国寺（那覇市若狭町）	石像仁王像（七尺位）	【23-26】	1250（護国寺の総門）	

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

4月1日	宮里オミト家(那覇市西本町)	写真撮影	【25-380】		
		呉著温筆「関羽像」	〃	341	371 「関帝王図　伝呉著仁筆」
	〃	慎思九筆「ユリ鉢　牡丹鳳凰図」	〃		
	?	仇英筆「花鳥図」	〃		
	?	毛長禧筆「闘鶏図」	〃		
	?	殷元良筆「粟ウズラ図」	〃		
	?	向元瑚筆「松下猛虎図」	〃		
	?	慎思九筆「蘆雁図」		143	
4月3日	小川写真館（那覇市）にて末吉氏より『日本及日本人』［大正6年2月11日発行］について聴く		【23-34】		
4月5日	伊江御殿	向元瑚筆「巴凌橋之図」	【23-34】	196、858、	
	〃	自了筆「松下三士囲碁之図」	〃	345、879、	334 「松下三高士囲碁図　自了筆」
	宜湾朝起家（首里市赤平町）	向可伝前川親方朝邑肖像画	〃	102、892、	429 「向可伝前川親方朝邑画像」
		〃	〃	1120、1272、	430 「向可伝前川親方朝邑画像（画稿）」
	宮里家（那覇市西本町）	毛長禧筆「闘鶏図」	【23-35】		
	大宜見朝隆家（首里市）	向鶴齢ノ肖像	〃	880	426 「呉（向）鶴令国頭親方朝致画像」
4月7日	知念間津家（首里市儀保町）	毛長禧筆猛虎図	〃		

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

4月9日	伊良皆チルー氏（島尻郡安里村字安里）を訪ねる	【25-381】

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

4月18日	美術教員就任期間を終え那覇を発つ	【23-29】
4月20日	鹿児島着　九州内を見学	〃
4月24日	下関発	〃
5月1日	東京に帰京	【23-30】
	東京美術学校研究科（美術史研究室）入学	【遺宝】276P
	琉球研究資料が正木直彦校長に認められる	〃
	同校長の紹介により東京帝国大学伊東忠太教授の指導を受け研究を続行	
6月	首里城が取り壊しになるとの事を知り、伊東忠太に頼んで文部省に保存を訴える首里城解体は免れ、1925年4月には首里城は国宝指定となる	〃

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

7月　「琉球美術史論　―島津氏の琉球入りと天才自了の出現に就いて―」1、2
『東京美術学校校友会月報』22-4号（7月）、6号（11月）に掲載
8月9日　「八重山藝術論」を脱稿　【25-389】
9月1日　関東大震災　【23-49～51】
東京を離れ、三ヶ月ほど、奈良、京都の古美術の研究に従事する　【作品集年譜】
11月6日　製作を始める　【23-52】
11月25日　「レオナルド・ダ・ビンチ伝」を読む　【23-52】
11月28日　セザンヌの風景画二点を写真板で見る　【23-53】

1924年（大正13）
1月5日　鎌倉の東慶寺、円覚寺、寿福寺　【23-54】
1月7日　伊東忠太の勧めで、沖縄円覚寺壁画の研究をするために財団法人　【十三松堂日記】1-176
啓明会の補助を受けるための推薦を正木校長に願い出る。　【宮城真治新聞資料】
2月～4月　「八重山芸術の世界的価値/近代芸術に於る新しき指針」
『沖縄タイムス』紙上に連載
3月18日　伊東忠太との共同研究名義で琉球藝術調査が啓明会の補助を受けることが決定【十三松堂日記】1-199
東京美術学校写真科主任森芳太郎教授のもとで本格的な写真技術を習得する【24-104～130】
4月26日　東京美術学校より沖縄県への学術研究出張の辞令がおりる　【百年史】3-208
5月初旬　沖縄到着、第一回琉球芸術調査事業（翌年4月まで）

5月7日	首里市役所（高嶺朝教市長）	写真現像暗室設置準備	【24-132】		
	円覚寺仏殿	模写や写真の設備を考える	【24-132】	38、91、908、1241、	87～89 「円覚寺　仏殿」
		壁画	〃	19、32、185、248～250、267、280～286、387～390、412、420、422、424、425、1213、1273、	98～118 「円覚寺仏殿須弥壇後壁金剛会図」
	円覚寺龍淵殿	*龍淵殿	〃	636、637、957、1240、	128～130 「円覚寺　竜淵殿（方丈）」
	円覚寺獅子窟	*獅子窟	〃		
5月19日	首里市役所庭	工芸学校の家敷発掘の仁王像	【24-133】		

「オモロに現はれたる麻布に就て/
麻布と芭蕉布とどちらが先かといふ疑問/紋様資料」　【24-143】
6月2日　「島津家の文化研究のヒント」　【24-146】
「サツマとキリシタン及至南蛮船との史料」「型付史料」　【24-153】

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

6月5日	泊海岸	ハーリー競争	【24-155】
6月8日	知念積昌氏（那覇西新町）	紅型型紙（2、30種類）	【24-155】
6月20日		型紙の地文調べ	【24-160】
	知念家（首里市上儀保）	型付伝来の起原に関して	【24-163】
6月21日	金武良仁氏（首里市当蔵町）	琉球古典音楽に関して	【24-163】
	中城御殿	紋様研究比較資料「クェーナー」	【24-164】

* *

6月28日	ダゴールデッハ版写真撮影の練習をはじめる		【27-18～】		
	この時期、研究記録がみあたらない。				
7月31日	伊東忠太が現地調査を行うため那覇港に到着		【琉球】18P		
	20日の間に那覇市、首里市、中頭郡を調査［8月9日～16日は台風］		【琉球】25P		
8月	黒板勝美が史蹟保存のための現地調査に来沖［帰京8月25日］				
8月11日	伊東　女子師範学校にて琉球美術建築の講演会		【琉球】161～164P		
	夕べには宜野湾御殿で琉球式歓迎会				
8月20日	伊東　那覇港を出発		【琉球】203P		
8月22日	円覚寺	（写真撮影）石橋	【27-19】	850、910、960、	68　69「円覚寺　放生池石橋」
8月23日	円覚寺山門	（写真撮影）山門彫刻	〃		
	〃		〃	*34、903、	80「円覚寺三門　正面」
	〃		〃	*908	81「円覚寺三門　背面」
	〃		〃	*315	82「円覚寺　山門楼上向かって左部分」
	〃		〃	*1241	
	〃	観音像	〃	639	83「円覚寺　三門楼上観音大士像」
	〃	*羅漢像	〃	641	84「円覚寺　三門楼上羅漢像（木彫彩色）」
	〃	羅漢像A	〃	640、698、	85「円覚寺　三門楼上羅漢像（木彫彩色　鬼児羅漢）」
	〃	羅漢像B	〃	638、700、	86「円覚寺　三門楼上羅漢像（木彫彩色　獅子持羅漢）」
	円覚寺仏殿	仏像（釈迦三尊像）	〃	193、1213、	97「円覚寺仏殿須弥壇上釈迦三尊像と三面方牌」
	〃	仏像（土地神像）		253、907、	122「円覚寺仏殿東南隅壇上土地神
	〃	仏像（三宝大荒神）	〃	1212、1269、	123「円覚寺仏殿東南隅壇上三宝大荒神」
	〃	韋駄天	〃	697（？）	

NII-Electronic Library Service

	円覚寺獅子窟	花瓶	〃		
	〃	仏像	〃		
	〃	仁王	〃		
8月24日	松山御殿	獅子	【27-20】		
	〃	花瓶	〃		

＊ ＊

8月29日　首里城保存の協議のため沖縄県庁を訪ねる。鎌倉の雅号「春熈」を車中にて偶然得る。【27-93】

『琉球藝術三部門　美術、工藝、住居』		【27-42】		
ニンプチャー、琉球伝来浄土宗研究、		〃		
護国寺	護国寺小鐘	【27-41】		
玉陵	写真撮影	【27-34】	57	143「玉陵（首里城外）」
天尊廟（那覇市若狭町）		【27-32】	10	175「天尊廟　正面」
〃　龍王壇		〃	23	192「天尊廟　竜王壇諸像」
〃	千里眼	〃	890、945、	198「天尊廟　竜王御側立像（千里眼）」
〃	御側立	〃	943	195「天尊廟　竜王御側立像」
〃	*龍王（白（北））	〃	942	193「天尊廟　北（白）竜王像」
				1192　194「天尊廟　北（白）竜王像頭部」
〃	*龍王(黒(西)黄(中央)赤(南)青(東))	〃		
〃	御側立	〃	897、941、	196「天尊廟　竜王御側立像」
〃	順風耳	〃	670、944、	197 天尊廟　竜王御側立像（順風耳）
〃　（？）	関羽	【27-31】		
〃　天尊壇	天尊像	〃	*125、1141、	176「天尊廟　天尊壇諸像」
〃	*御側立像	〃	*809	178「天尊廟　天尊御側立像」
〃	*雷公像	〃	*810、874、1119、	177「天尊廟　天尊前雷公像」
〃	*御側立像	〃	*811	179「天尊廟　天尊御側立像」
〃	*麒麟像	〃	*1126	
〃　天妃宮		〃	*124	180「天尊廟　上天妃宮諸像」
〃	*御側立像	〃	*729	181「天尊廟　上天妃御側立像」
〃	*御側立像	〃	*728	182「天尊廟　上天妃御側立像」
〃	*下天妃像	〃	*1004	183「天尊廟　下天妃像」
〃	*御側立像	〃	*783、978、	184「天尊廟　下天妃御側立像」

Okinawa Prefectural University of Arts
NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

	〃	〃	〃		*808	185 「天尊廟　下天妃御側立像」
	〃	〃	〃		*807	186 「天尊廟　下天妃御側立像」
	〃	〃	〃		*805	187 「天尊廟　下天妃御側立像」
	〃	〃	〃		*727	189 「天尊廟　下天妃御側立像」
	〃	〃	〃		*730、731、	190 「天尊廟　下天妃御側立像」
	〃	〃	〃		*726	191 「天尊廟　下天妃御側立像」
	〃	香ロ足	〃		917	
	〃	香ロ中	〃		914	
	〃	香ロ小	〃		915	
	〃	花瓶、壺	〃			
9月8日	田名宗華家（那覇市若狭町）	観音	【27-30】		426（？）	
	〃	宝珠	〃			
	〃	龍一対	〃			
	〃	位牌	〃		423、768、769、	537 「田名家位牌　田名宗経作」
	〃	障子腰板ノ獅子彫一対	〃		773、777、	
	〃	文章帝君像	〃			
9月13日	護国寺（那覇市若狭町）	焼物(乾隆十八癸酉年二月銘)	【27-28】			
9月14日	金剛寺	香炉、位牌等	〃			
	*護国寺（那覇市若狭町）	印度仏（鉄）	【27-27】			
	〃	支那仏（木）	〃			
	〃	誕生仏（銅）	〃		689	
	〃	阿弥陀仏（銅）	〃			
	〃	日秀作三体（木）	〃		721、722、	161 「護国寺　波上権現本地仏」
	〃	香炉	〃	●	718	
	〃	*香炉（白地　ヒビ　藍絵）	〃			
	〃	香炉（口青緑）	〃			
	〃	香炉（灌頂会用）	〃		1036	
	〃	宝鏡	〃		724、1037、	
	〃	梵字前立	〃		723、1039、	
	浦添御殿	仏壇	〃			
	〃	彫刻（金龍一対）	〃			
	〃	香炉（銅　1）	〃			

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

	〃	火立（銅　1）	〃			
	〃	香炉（孔子廟内　1）	〃		145	
	〃	彫刻（龍打出　1）	〃			
	〃	板絵（2枚）	〃			
	〃	慎思九筆絵画（2枚）	〃		63、1128、255、712、714～717、779、861、930～934、1280、	377 首里那覇泊全景図　慎思九筆 378 那覇綱引図　慎思九筆
	安江汪氏（那覇市天妃町）	仏前花立	【27-25】			
	〃	置床花挿	〃			
	西平守睦氏（首里市儀保町）	染色技法に関して	【27-25】			
	西平ウシ氏、守貞氏、守模氏(首里市鳥堀)染色技法に関して		〃			
9月22日	臨海寺（那覇住吉町）	大黒天像	【27-24】		997	
	〃	誕生仏	〃		996	
	〃	不動明王像	〃		732、733、1136、	
	〃	南方仏	〃		806	164 「臨海寺　沖寺シャム渡来仏」
10月1日	陶磁器調査		【27-24】			
	〃	*花生(ソバ色ヲ帯ビタル黒キ上薬)	〃	●	692	
	〃	*壺(南バント称スルモノノ如キ作)	〃	●	660（？）	
	〃	佛壇ローソク台	〃	●	694	
	〃	酒瓶	〃	●		
	〃	火炉（フィーロー）	〃	●	658（？）	524 「白土白釉雲龍線彫手炉（壺屋製）」
	〃	瓶　壺屋作	〃	●		
	〃	茶壺	〃	●	812	
	〃	擲禅壺	〃	●	1155	
	〃	鶴瓶	〃	●	1153	
	〃	茶碗（尚侯爵家）	〃	●		
	〃	*酒器	〃	●	1150	
	〃	*花葉形皿	〃	●	813	
	〃	白ヒビ焼香炉	〃	●	1151	
	〃	*黒褐色上薬対瓶	〃	●	1152	527 「黒釉変形対瓶」
	〃	*筒形火取	〃	●	814	
	〃	酒壺	〃	●	1154	

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

	〃	*酒器	〃	●	1156	522「荒焼からから」
	〃	*香炉（城岳オガンヨリ発掘）	〃	●		
10月27日	国吉牛氏（那覇市壺屋町）	荒焼壺	【27-21】			
* * * * *	* * * * *	* * * * *	* * *	*	* * * * *	* * * * * * * * * *
	集告社（那覇市西本町）	丁字風呂(白ヒビ藍ハメコミ絵)	【27-50】	●	1230	
	〃	丁字風呂（白地嵩茶絵）	〃	●	984	
	〃	*花瓶（赤褐茶上クスリ）	〃	●	1231	
	〃	*花瓶（朝鮮青磁白ヒビ藍緑ハメエ	〃	●	927	
	〃	*花瓶(赤味アル灰イロヒビ白イロエ)	〃	●		
	〃	*盤（玉城尚秀氏出陳）	〃	●	986	
	宜野湾御殿	ウクファン（朱塗沈金）、台	【27-51】	●	418	307「宜野湾御殿朱塗沈金御籠飯と台盆」
	〃	御盃(ウサカズチ　錫製)、台	〃	●	418	307「錫製御盃と盃洗及び朱塗沈金盆小と台盆（中央)」
	〃	御玉敷(ウタマシチ錫製)、台	〃	●	418	307「錫製酒瓶御玉貫と朱塗沈金台盆（左)」
	読谷山御殿	中央卓	〃	●	8	295「読谷山御殿　黒塗堆錦中央卓」
	〃	丁字風呂（白焼彩絵）	【27-52】	●	983	
	〃	料紙箱と硯箱（黒塗青貝）	【27-53】	●	14、299、452、	
	〃	クイチクン（黒塗青貝）	〃	●	295、1020	296「読谷山御殿　黒塗青貝食籠」
	宜野湾御殿	クイチクン（黒塗青貝）	〃	●	462、463、963、	308「宜野湾御殿　黒塗青貝食籠」
	〃	貝摺九寸重箱（黒塗青貝）	【27-54】	●	240、611（？）	
	〃	膳（黒塗青貝）	〃	●	461	309「宜野湾御殿　黒塗青貝膳」
	〃	自了作短刀（黒木製）	〃	●		541「雲竜彫短刀　伝自了作」
	読谷山御殿	クイチクン春盤（食摘　黒塗青貝）	〃	●	295、1020、	296「読谷山御殿　黒塗青貝食籠」
	〃	重箱（朱塗堆錦）	【27-55】	●	317、448、514、	297「読谷山御殿　朱塗堆錦流水桜花文重箱」
	〃	長刀	〃	●		
	金城紀光家(那覇市崇元寺町)	堆錦衝立	〃	●		
	普天間助宜家（島尻郡真和志村字真嘉比）		【27-56】	●	獅子香炉	189
	黒田金作家（那覇市若狭町）	平鉢（壺屋製）	〃	●	530	
	〃	香炉（壺屋製）	〃	●	1221	529「緑釉流香炉」
	田名宗華氏（那覇市若狭町）	観音木像	〃		426（？）	
	〃	位牌木製（田名宗経作）	〃		423、768、769、	537「田名家位牌　田名宗経作」
	小橋川家（那覇若狭町）	重箱（棕櫚色）	【27-57】	●	520、521、	479、480「棕櫚色金箔絵重箱」

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

〃	支那製重箱（比較研究資料）	〃	●	238、594、751、962、	481	「棕櫚色地金箔絵重箱」
〃	瓶巣外箱（春慶墨画）	〃	●	516、1033、	491	「透漆塗黒絵山水図」
〃	〃共台（一個）	〃	●	753		
〃	〃線香入（一個）	〃	●	593、988、		
〃	〃共小箱（二個）	〃	●	753		
〃	〃皿台（一個）	〃	●	752		
〃	印籠	【27-58】				
浦添御殿	料紙箱（黒漆堆錦）	〃	●	365、626、	299、300	「浦添御殿　黒塗堆錦料紙箱」
〃	硯箱（黒漆堆錦）	〃	●	454（？）		
〃	料紙箱（朱塗沈金）	〃	●	421、458、	301、302、	「浦添御殿　朱塗沈金料紙箱」
〃	硯箱（朱塗沈金）	〃	●	928		
〃	中央卓（黒塗堆錦）	【27-59】	●	9	298	浦添御殿　黒塗堆錦中央卓
〃	聖廟香炉	〃	●	145		
〃	祝の道具	〃				
當間安貞家（首里市当蔵町）	「仲宗根」の研究に関して	〃				
宜湾朝起家（首里市赤平町）	前川親方肖像（大）	〃		1120、1272、	429	「向可伝前川親方朝邑画像」
〃	〃　（小）	〃		102、892、	430	「向可伝前川親方朝邑画像（画稿）」
〃	宜湾親方肖像	〃		198、682、	428	「向有恒宜湾親方朝保画像」
〃	宜湾親方筆「竹図」	〃		515		
〃	「馬之図」	〃		214、889、	362	「群馬図　尚廷楷」
玉城盛康家（首里市赤平町）	自了筆「仙人図」	【27-60】	●	343、886、	333	「高士逍遥図　自了筆」
末吉安恭氏	鄭嘉訓筆「関羽像」	〃		379、873、（？）		
仲吉朝助家（島尻郡真和志村字小波蔵）	香炉（知花ヤキ）	【27-61】	●	446		
〃	平皿（朝鮮青ジノ白薬藍絵）	〃	●			
〃	菓子器（壺屋製　朝鮮青磁釉）	〃	●	337		
〃	筆立（緑青色釉　底曰大里御殿）	〃	●	142		
〃	荒焼立壺（黄色　南蛮物の壺）	〃	●	251		
銘苅御殿（島尻郡真和志村安謝）	「白鷹図」	【27-65】				
〃	「銘苅子画像」	〃		247	424	「銘苅子画像（板絵）」
〃	「天女画像」	〃		269	425	「銘苅子伝説天女昇天図（板絵）」
県立第一高等女学校に金武朝盛氏より毛長禧筆「猛虎図」が依託される【27-66】						
平尾喜三郎家（那覇市天妃町）	青貝椀四十個	【27-66】		52、74、918、	286	「中城御殿　御祭行事御道具

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

					黒塗青貝竜文椀（平尾喜三郎家蔵）」
〃	青貝中央卓(元尚侯爵家所蔵)	〃	●	362	313 「識名園離宮　黒塗青貝中央卓」
〃	弁当箱（黒塗青貝）	〃	●	361	319 「識名園離宮　黒塗青貝堤重箱」
儀間寿家（那覇市久米町）	*茶碗（白釉薬小ヒヾ）	【27-66】	●		
〃	*茶碗（箱銘曰尚豊王御自作焼物碗御賜蔡堅喜友名大夫）	【27-67】	●	434、782、	525 「白釉三脚茶碗　尚豊王作」
〃	*茶碗（天目茶碗箱銘、尚豊王御賜蔡堅）	〃	●	436 か1025	
〃	赤土素焼竈	〃			
仲吉朝助家（那覇市）	煙草盆	【27-67】	●	517、929、980、982、	325 「識名園離宮　桑木地堆錦煙草盆」
平尾喜三郎家(那覇市天妃町)	青貝椀	〃	●	527、918、	286 「中城御殿　御祭行事御道具黒塗青貝竜文椀」
〃	提重（黒塗青貝）	【27-68】	●	15、451、456、528、770、961、965、	314～317 「識名園離宮　黒塗青貝重箱」
屋慶名政方家(島尻郡真和志村壺川)	殷元良筆「花鳥画」	【27-69】		181、186、737、	342 「雪景花鳥図　殷元良筆」
〃	殷元良筆「猛虎図」	〃			
〃	呉著温筆「猛虎図」	〃			
〃	慎思九筆「猛虎図」	〃			
北村重敬氏	「爬龍舟之図」	〃		375（？）	
安江白水氏	毛長禧筆「花鳥図」	〃			
沖縄県立図書館	伝自了筆「観音像」	〃		16、429、884、	330、331 「渡海観音図　自了筆」
〃	天久権現神像板絵（本宮阿弥陀）	〃		355、909、	220 「天久権現宮御神体板絵本宮阿弥陀如来」
〃	〃　（新宮薬師如来）	〃		354、911、	221 「天久権現宮御神体板絵新宮薬師如来」
〃	海北友松筆「仙人図」	〃			
〃	高麗焼	〃	●	522	520 「黒地瑠璃釉白釉草花絵中皿伝一官三官作」
仲村渠致知家(那覇市上泉町)	菓子皿（朝鮮青磁）	【27-70】	●	523	519 「淡青釉粟彩絵菊形中皿　仲村渠致元作」
〃	平鉢（釉薬黄褐黒色）	〃	●	231	

1925年（大正14）

1月1日　大里紀行　【27-70～72】

NII-Electronic Library Service

『琉球新報』に「円覚寺壁画再考」を掲載（1月1日/1月7日/1月10日/1月11日の4回）

浦添御殿	鐘蟠龍銀印籠	【27-73】	●	588、591、	533 「鐘蟠竜印籠　臥牛根付　田名宗経作」
〃	（紐止木彫座牛　田名作）				
〃	印籠（黒木製　田名宗徑作）	【27-74】	●	587、589、	534 「雲龍彫印篭　田名宗経作」
〃	鋳銅製打出龍頭	〃			
中城御殿	能楽面20個	【27-74】		126、239、336、394、653、654、 655、656、819、820、821、822、823、	
〃	鬼面（銘曰、那覇梅氏宗孫田名作）	〃	●	335	536 「能面（鬼）　田名宗経作」
〃	鬼面（裏銘曰、宗里刻）	〃	●	334	
〃	貴人面（裏銘曰、宗里刻）	〃	●	336	
〃	フン怒相面(無銘一個　琉球作)	〃		126、394、822、823、	
〃	貴婦面（無銘二個）	〃			
〃	武士面（無銘一個）	〃			
〃	武士面（無銘一個　琉球作）	〃			
〃	童子面（無銘一個　琉製作）	〃			
〃	翁面（無銘一個）	〃		820、821、	
〃	猩々面（無銘一個）	〃			
〃	貴婦面（有銘　小面　満高）	〃			
〃	〃　(有銘　辰右衛門作　出目栄満)	〃			
〃	〃　(有銘　出目栄満(印))	〃			
〃	若武士面(有銘　出目栄満(印))	〃		656	
〃	武士面(有銘　出目加見(印))	〃			
〃	〃　(有銘　出目加見(印))	〃			
〃	貴婦面（有銘　出目加見（印） 墨ヲ塗タレバ真黒シ）	〃		655	
〃	フン怒相面（有銘出目加見（印））	【27-75】		653	
〃	武士面（有銘　松本）	〃			
円覚寺獅子窟	芥隠和尚位牌	〃	●	367、687、688、	62 「円覚寺　開山芥穏和尚大禅師位牌」
仙寿院（那覇市松下町）	不動明王像	〃		177、180、	163 「仙寿院　不動明王像」
〃	額「光明山」「院静飛香」	〃			
玉陵	*欄干羽目（双獅子）	〃		119	146 「玉陵　欄干羽目」
〃	*　〃（鳳凰）	〃		117	148　〃

Okinawa Prefectural University of Arts
NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

〃	* 〃（獅子）	〃		66	149	〃
〃	* 〃（花）	〃				
〃	* 〃（キリン）	〃		192	150	〃
〃	* 〃（龍）	〃		300	151	〃
〃	* 〃（天馬）	〃				
〃	* 〃（鶴）	〃		114	152	〃
〃	* 〃（蝙蝠）	〃		191	153	〃
〃	* 〃（双天馬）	〃		115、217、（？）	147	〃
〃	ランカン獅子	〃		209	144	「玉陵　欄干獅子」
〃	大獅子（左右）	〃		408	145	「玉陵　入口前獅子」
那覇市役所	筆者不詳屏風	【27-76】				
〃	手皿（壺屋作）	〃	●	244、1042、		
臨海寺（那覇住吉町）	薬師石仏	〃		246、1127、	165	「臨海寺　沖寺本尊薬師三尊像」
県立高等女学校（首里市当蔵）	爬龍舟頭	【27-77】	●	82、998、999、		
〃				1000、1001、1002、		
中城御殿	中央卓（黒塗青貝製）	〃	●	129、296、	243	「中城御殿　黒塗青貝中央卓」
				711、1041、		
〃	食籠（クイチクン真塗貝摺）	【27-78】	●	919、1023、	282	「中城御殿　御祭行事御道具
						黒塗青貝食籠」
〃	朱塗沈金御徳盆五個（御法事御用）	〃	●	72、127、	281	「中城御殿　御法事御道具
						朱塗沈金御徳盆」
〃	君使官（黒塗双龍青貝）	〃	●	297	283	「中城御殿　御祭行事御道具
						黒塗青貝双竜文八花御菓子器」
〃	絵入手巻物台（真塗貝摺　梅花）	〃	●	78	241	「中城御殿　黒塗青貝梅華小禽図巻物台」
〃	御料紙箱（真塗貝摺）	【27-79】	●	128 、455、	246	「中城御殿　黒塗青貝御料紙箱蓋上面」
〃	美硯箱（美硯　カネ水入）	〃	●			
伊江男爵家（首里市石嶺町）	中央卓（黒塗沈金）	〃	●	176	303	「伊江御殿　黒塗沈金中央卓」
〃	クイチクン（黒塗青貝）	〃	●	83		
中城御殿	御菓子盆弐個（真塗貝摺）	〃	●	200	288	「中城御殿　御祭行事御道具
						黒塗青貝御菓子盆」
〃	花台壱個（真塗堆錦絵）	【27-80】	●	199		
〃	手巻物台壱個（真塗堆錦絵）	〃	●	235、758、	240	「中城御殿　黒塗堆錦

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

					竹小禽図巻物台」
〃	御水椀壱個蓋共(内真塗外豆色 菊水蒔絵　金御紋付)	〃	●	508	
〃	御茶台（真塗貝摺）	〃	●	754	
〃	盃洗蓋台共一個（朱塗沈金）	〃	●	81	276「中城御殿　三御飾（饗宴用） 朱塗沈金御盃洗と方台」
〃	立御盃台（真塗青貝）	〃	●	148、453、	285「中城御殿　御祭行事御道具 黒塗青貝山水文御盃台」
〃	御小飯（朱塗沈金）	【27-81】	●	236	273「中城御殿　三御飾（饗宴用） 朱塗沈金御籠飯と台盆」
〃	大御菓子盆并御玉貫（朱塗沈金）	〃	●	74	274「中城御殿　三御飾（饗宴用） 錫製酒瓶御玉貫と朱塗沈金台盆」
〃	大御菓子盆并御玉垂（朱塗沈金）	〃	●	194	275「中城御殿　三御飾（饗宴用） 錫製酒瓶御玉垂と朱塗沈金台」
〃	大御菓子盆（真塗貝摺）	〃	●	294	287「中城御殿　御祭行事御道具 黒塗青貝御菓子盆」
比嘉朝健家（那覇市西本町）	酒注（白ノハメコミ絵）	【27-83】	●	433	523「白土象嵌酒注（壺屋製）」

＊　＊

中城御殿	急須（琉焼　茶家）	【28-100】	●	766	
〃	鉢（灰褐色、模様ハ掘り混ミ白絵）	〃	●	344	
〃	急須（紋―ルリ薬）	〃	●	763	
〃	急須（琉彩色）	〃	●	703、765、	
〃	急須	〃	●	708	
〃	*鉢（黒藍押判色付紋様）	〃	●	1043	
〃	琉焼御小皿	〃	●		
〃	*鉢（白地花コン青絵）	【28-101】	●	757	
〃	火入（白地黒藍ハメコミ絵）	〃	●	762	526「象嵌線彫火取（壺屋製）」
〃	*花瓶(白土、アンピン薬ナマコ薬)	〃	●	1034	
〃	焼酎入（仲宗根作）	〃	●	702？	
〃	*手水鉢（龍）	〃	●	303	518「白土白釉雲竜透彫二重胎手水鉢」
〃	重箱（黒塗青貝）	〃	●		
〃	額掛止台	〃	●	760	

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

神応寺（島尻郡真和志村字識名）仁王像一対		〃		111、113、	
〃	羅漢（木像）	〃			
〃	聖天	〃		761（？）	
中城御殿	神位台（黒塗沈金製）	【28-102】	●	225、264、	278、279 「中城御殿　御法事御道具 黒塗沈金御神位台」
〃	仏壇隅飾	〃	●	256、259、	538、539 「仏殿上部左右隅透彫飾」
〃	蠟燭立（仲宗根喜元作）	〃	●	112	528 「窯変把手付蠟燭立　仲宗根喜元作」
慈眼院観音堂（首里市山川町）	地蔵菩薩（鋳造）	〃		260、1146、	142 「慈眼院観音堂　地蔵菩薩像」
〃	仏壇唐獅子一対（木彫彩色）	〃	●	64、122、	
中城御殿	*建築部材（主懸魚）	【28-103】	●	595	
〃	*　〃　（蓮華浮彫肘木）	〃	●	596	
〃	美硯蓋（黒塗青貝）	〃	●	120	284 「中城御殿　御祭行事御道具 黒塗青貝美硯蓋」
〃	小飯　a、大御菓子盆	〃	●	237 、288、	263 「中城御殿　朱塗沈金御籠飯と台と蓋」
〃	〃　b、美花　御小飯美蓋	〃	●	270	264 「中城御殿　御籠飯透彫蓋」
〃	〃　c、朱塗沈金御小飯	【28-104】	●	1229	
〃	大御菓子盆（ヌーメーウスリー）	〃		182	265 「中城御殿　三御飾（美御前御揃） 御酒用品一具」
〃	御菓子盆小（ヌーメーウスリー）	〃			
〃	流大（ナガレデー）	〃	●	287	267 「中城御殿　三御飾（美御前御揃） 金製御盃・銀製流台・御盆小」
〃	御盃　a、金御盃（鳳凰打出）	〃	●	563、599、	266 「中城御殿　三御揃（美御前御揃） 金製御盃」
〃	〃　b、銀製大盃二個	〃	●	562、778、	269 「中城御殿　三御飾（美御前御揃） 銀製大盃と天目台」
				604	271 「中城御殿　三御飾（美御前御揃） 銀製天目台上面」
〃	〃　c、銀製盃二個	〃	●	538 、614、	270 「中城御殿　三御飾（美御前御揃） 銀製盃（馬上盃形）」
〃	御玉敷	〃		77	272 「中城御殿　三御飾（饗宴用） 錫製酒瓶御玉貴と浮彫箔置牡丹唐草文台」
〃	御盃洗（朱塗沈金）	〃		243	

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

?	*絵図（紫冠行列一部）	【28-105】		289 、1040、	
?	迎恩亭之図	【28-106】		318	
?	天使館之図	〃		152	
?	崇元廟之図	〃		149	
?	城元之図	〃		277、412、	
?	城元仲秋宴之図	〃		18、330、	
?	紋様下図（素描　双龍）	【28-107】		648	438 「皮弁服仕立図案」
?	〃（双龍　美後）	〃		647	436 「皮弁服仕立図案」
?	〃（双龍　美前）	〃		617	437 「皮弁服仕立図案」
?	〃（波蟠龍）	〃		106、616、	435 「皮弁服竜金筋入補子図案」
?	〃（足袋形龍鳳凰紋）	〃		106	446 「国王着用足袋刺繍下絵」
中城御殿	衝立「板絵白タカ図」	〃		151	250 「中城御殿　書院絵戸　藤竹白鷹図」
〃	衝立「虎渓三笑図」	〃		100	247 「中城御殿　書院絵戸（表）虎渓三笑図」
〃	衝立「獅子鐘馗図」	〃		202	248 「中城御殿　書院絵戸（裏）騎獅鐘馗図」
〃	御天目（真塗沈金）	【28-108】	●	70、88、	280 「中城御殿　御法事御道具 朱塗沈金天目形椀と台」要チェック
〃	連台（朱塗沈金　花椀台）	〃	●	147	
〃	御曲（朱塗沈金　菓子器）	〃	●	71	277 「中城御殿　三御飾（饗宴用） 朱塗沈金御菓子器と台盆」
〃	御丸盆（朱塗沈金）	〃	●	71	277 「中城御殿　三御飾（饗宴用） 朱塗沈金御菓子器と台盆」
県立図書館	向元瑚筆「猛虎図」（紙本極彩色）	〃		373	
〃	〃　〃　（絹本墨画）	〃			
黒田金作（那覇市若狭町）	大獅子神像（壺屋作）	【28-109】			
中城御殿	（写真撮影）衣類				
〃	黒地絣	〃		232	504 「王宮婦人着用上布（宮古島） 黒地白飛切」
〃	〃	〃		414	505 「王宮婦人着用上布（宮古島） 黒地白飛切」
〃	黄色地久米島紬(岱、テカチ、緑、黒)	〃			
〃	黄色地久米島紬（御内原作）	〃			
〃	黄色地飛白入縞	〃		45	502 「王子着用紬（久米島）

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

	（芭蕉　尚典侯元服前着用）			綾の中の飛切（絣）」
〃	黄色紅花染トッチリ（御内原作）	〃	172	503 「王宮婦人着用紬（久米島） 黄色地飛切入縞」
〃	白地赤染飛白（トンベン）	〃		
〃	白地赤染紺飛白入（トンベン）	〃		
〃	白地赤縞紺トッチリ（トンベン）	〃	233	509 「王宮婦人着用夏単衣芭蕉布 白地紅（紅花）縞（紺飛白）」
〃	白地黒トッチリ （ローオリ　尚質王御夫人）	〃	11	507 「王宮夫人着用夏単衣芭蕉布 白地黒飛切」
〃	アヤノナカノトッチリ （黒地　尚昌侯御幼少の折着用）	〃	159	
〃	黄色地風呂敷	〃	228	
〃	紺地菖蒲紅型（風呂敷）	〃	41	
〃	紺地菊花紅型（風呂敷）	〃	39	
〃	白地紅型（女物着物）	〃	155	98 「王女着用白地紅型鎖大模様上布地上衣」
〃	水色地紅型（女物着物）	〃	227、372、	492、493 「王宮婦人着用水色地紅型大模様 木綿地上衣（裏表）」
〃	黄色地紅型（女物着物）	〃		
〃	胴衣	〃	40	501 「王宮夫人着用段染地大模様絽地胴衣」
〃	胴衣	〃	163	500 「王宮婦人着用白地紅型大模様絹地胴衣」
〃	水色地紅型（男物着物）			
〃	茶褐色鶴紋紅型（女物着物　木綿）			
〃	白地紅型（チヾミ　女物着物）	〃	48	496 「王宮夫人着用白地紅型大模様 縮緬地上衣」
〃	白地水色赤紅型（男物着物上布）	〃		
〃	段染地波形紅葉紅型（女物着物木綿）	〃		
〃	黄色地鳳凰紅型（木綿）	〃	171	465 「王妃着用黄色地紅型大模様 木綿地上衣（納殿紺屋作）」
〃	薄水色地龍紅型（女物着物　木綿）	〃	42	439 「国王着用紅型竜文襯衣（絽）」
〃	黄色地紅型（王子着物　木綿）			
渡嘉敷通昭家（首里市）	自了筆「松下山仙図」（紙本水墨）	【28-109】	885、1276、	
〃	鄭嘉訓筆「竹立図」（紙本水墨）	〃	223	360 「墨竹図　鄭嘉訓筆」

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

	円覚寺仏殿	琥自謙筆「普化禅師画像」	【28-110】	183、222、904、	364	「普庵禅師図板絵　琥自謙筆」
	安里八幡宮写真撮影		〃	410、1255、	201	「安里八幡宮　正面」
	沖宮権現写真撮影		〃	409、1256、	202	「沖宮」
	比嘉朝建家（那覇市西本町）	殷元良筆「山水図」	〃	226、870、	341	「秋景山水図　殷元良筆」
	〃	呉着温筆「雪中山水図」	〃	357（？）	375	「雪景山水図　呉著仁筆」（？）
		（紙本水墨）		75、742（？）		
	〃	毛長禧筆「梅花尾長鳥図」	〃	22、747、	357	「梅尾長鳥図　毛長禧筆」
	〃	〃　「鷹檎小禽図」	〃	211、745、895、	356	「鷹雀枯木芙蓉図　毛長禧筆」
	〃	〃　「竹桃白鴨図」	〃	99、748	355	「桃竹白鴨図　毛長禧筆」
	〃	〃「牡丹カキツバタ尾長鳥図」	〃	101、868	354	「牡丹尾長鳥図　毛長禧筆」
	〃	毛世輝筆「山作蘭図」	〃	258		
	豊見城朝熙家（首里市）	殷元良筆「鶉図」	〃	348、340、1144、	337	「粟鶉図　殷元良筆」
	〃	（絹本極彩色密画）				
	〃	向元瑚筆三幅対「鴛鴦　竹花図」	〃	383、862、	343	「竹朝顔鴛鴦図　向元瑚筆」
		（絹本極彩色）				
	〃	〃　「松下双鶴図」（〃）	〃	351		
	〃	〃　「相牡丹鳳凰」（〃）	〃	338、738、1277、	345	「桐牡丹鳳凰図　部分　向元瑚筆」
	伊江御殿	向元瑚筆「巴陵橋之図」	〃	196、858、		
	〃	自了筆「松下三仙図」	〃	885、1276、		
	崎原氏所蔵	翁宏熙筆「蘆雁図」	〃	210、405、		
	〃	〃　「菖蒲小禽図」	〃	392		
	〃	〃　「寿老人図」	〃	224、855、	363	「寿老人図　翁宏熙筆」
	小波蔵必達家（那覇市）	鄭嘉訓筆「山水図」	〃	84		
	〃	鄭元廣筆「山水図」	〃	213、509、818		
	比嘉盛章氏所蔵	*陶磁器「琴高乗鯉」	【28-111】	208		
2月15日	金武朝仁氏（首里市当蔵町）	劇研究　衣裳について	【28-111～112】			
	新崎盛信家（首里市崎山町）	「船之図」	【28-112】			
	黒田金作家（那覇市若狭町）	*花瓶（白土白釉、菊竹絵）	【28-113】●	350		
	〃	唐獅子一対（白土、ルリ釉）	〃 ●	349	532	「瑠璃釉唐獅子」
	〃	抹茶茶碗（黒釉）	〃 ●	144		
	〃	太鼓(朱、黄、緑、黒ノウルシ絵)	〃 ●	353		
	〃	仏前器具	〃 ●	47		

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

		（白土、ルリ釉ノ紺青色地色、黄、緑青、朱ノ模様）					
	〃	硯箱（真塗青貝　蓋部　実部は破損）	〃	●	352	473	「真塗青貝硯箱」
	阿波連承範氏（那覇市松下町）	を訪ねる	【28-113】				
	至聖廟（那覇市久米町）	扁額	【28-114】				
	〃	孔子神像（塑像　漆塗絵）	〃		276、679、	226	「孔子座像」
	〃	至聖先師孔子神位（朱塗金箔絵）	〃		368、736、1142、	227	「那覇文廟（至聖廟）　孔子神位」
	〃	装飾龍（木彫金箔　諭祭用）	〃	●	157		
	〃	〃	〃	●	273		
	〃	〃	〃	●	272		
	〃	旗頭（龍頭）	【28-115】	●	801	231	「那覇文廟（至聖廟）孔子祭典用旗頭竜」
	〃	述聖子思子神位	〃				
	〃	復聖顔子神位	〃				
	〃	宗聖曾子神位	〃				
	〃	*装飾龍	〃	●	327	230	「那覇文廟（至聖廟）孔子祭典用器具装飾竜」
2月26日	？	玉城朝薫筆「関帝王図」（絹本極彩色）	【28-115】		750　（？）		
2月28日	「古琉球の美術」古琉球芸術に関する写真数百枚を陳列しての展示会及び講演会（首里市教育部会主催）						
3月4日	孔子廟祭典		〃				
	宮里オミト家（那覇市西本町）	写真撮影					
		孫億写「松下寿老人図」	【28-116】				
	〃	毛長禧筆「闘鶏図」（紙本極彩色）	〃				
	〃	慎思九筆「蘆雁図」（絹本淡彩）	〃		143		
	〃	殷元良筆「粟鶉図」（紙本極彩色）	〃		406、1124（？）		
	〃	〃　「花鳥図」（紙本極彩色）	〃				
	〃	呉著温筆「関帝王図」（紙本極彩色）	〃		341	371	「関帝王図　伝呉著仁筆」
	〃	向元瑚筆「桐下鳳凰」（絹本極彩色）	〃		*参考豊見城家（338、758、1277、）		
	〃	双鳳凰丸凹面額（木地極彩色）	〃		500		
	〃	食籠（支那製ウクハン）	〃	●	438	324	「識名園離宮　福建製御籠飯」
	〃	作者未詳「闘鶏図」（紙本極彩色）	〃				

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

	〃	向元瑚筆「猛虎図」(紙本極彩色)	〃		373	
	玉城朝賢氏(島尻郡大里村字与那原)	肖像画(紙本紫衣冠十二世朝富)	【28-116】		275(?)	
	〃	肖像画(紙本　青芭蕉御衣 後方花色地紅形　十三世朝敕)	〃		274(?)	
	護国寺(那覇市若狭町)	本尊不動明王　二童子	【28-117】		190、261、 (407、860、)	162「護国寺　不動明王像」
	〃					
3月5日	玉城盛重氏、譜久山朝規氏、運天賢良氏等の舞踊練習を見学		【28-118】			
	奥原政元氏、古堅盛保氏、金武良仁氏、読谷山朝慶氏、浦添朝顕氏等と会食、舞踊談、音楽談		【28-118】			
3月6日	中城御殿	(写真撮影) 御後絵	【28-119】			
	〃	尚円王様御後絵(紙本極彩色)	〃		136	407「初代尚円王御後絵」
	〃	尚真王様御後絵(〃)	〃		52	408「三代尚真王御後絵」
	〃	尚元王様御後絵(〃)	〃		140	409「五代尚元王御後絵」
	〃	尚寧王様御後絵(〃)	〃		141	410「七代尚寧王御後絵」
	〃	尚豊王様御後絵(〃)	〃		137	411「八代尚豊王御後絵」
	〃	尚貞王様御後絵(〃)	〃		134	412「十一代尚貞王御後絵」
	〃	尚敬王様御後絵(〃)	〃		135	413「十三代尚敬王御後絵」
	〃	尚穆王様御後絵(〃)	〃		51	414「十四代尚穆王御後絵」
	〃	尚●王様御後絵(〃)	〃		139	415「十七代尚●王御後絵」
	〃	尚純公御後絵(〃)	〃		138	423「尚純公御後絵」
	〃	尚育王様御後絵(〃)	【28-120】		50	416「十八代尚育王御後絵」
	宜野湾御殿	「琉球古劇研究会」	〃			
3月7日	一力亭にて古典劇鑑賞　批評会		〃			
* *						
3月8日	中城御殿	玉冠	【27-84】	●	558、559、 561、1014、	431、432、433「王冠(皮弁冠)」
	〃	御ヒザ当(スツアテ)	〃	●	557	449「国王着用膝当」
	〃	御官庫壱足	〃	●	566	450「国王着用官庫」
	〃	御足袋	〃	●	624、1021、1282、	444、445「国王着用足袋」
	〃	石帯	【27-85】	●	571	442「国王着用屏角白玉石帯(石御帯)」
	〃	唐御衣裳	〃	●	560	434「皮弁服」
	〃	正殿使用ノ幕(型付)	〃		174	51「首里城　正殿国王執政間入口大幕 松竹双虎図」

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

〃	刺繍資料 (asagikunni)	〃	●	201、605、	457、458 「あしやげこむね　緞子地綵繍」
〃	〃 (　〃　)	〃	●	413、605、1283、	457、459 「あしやげこむね　緞子地綵繍」
〃	〃 (Sufasaji)	〃	●	80、242、1026、1027、	460 、461、462 「王妃手ばつ」
〃	国王音召用御羽織	【27-84】		291 、651、	454、455 「国王平常着用御羽織」
〃	漆工 (朱塗沈金)	〃	●	70、88、	280 「中城御殿　御法事御道具　朱塗沈金天目形椀と台」(?)
〃	*櫃 (朱塗箔絵内部黒塗製　Kei)	〃	●	290、1019、1022、	289 「中城御殿　御祭行事御道具　朱塗箔絵鳳凰雲文櫃」
〃	御簪	〃	●	603、607、608、	451 、452、453、「国王金簪」
松原熊五郎家(那覇市松下町)	彩釉龍紋透彫大香炉	【27-87】	●		
〃	仏壇用花立一対	〃	●		
黒田金作家 (那覇市若狭町)	観音	〃	●	650	531 「青白釉観音像」
〃	茶碗 (白土、白クスリ)	〃	●		
〃	花瓶 (本ゴス　染付アイエ)	〃	●	539	
〃	*土瓶 (ハケ目白薬　彩絵)	【27-90】	●	1012	
大津久之介氏 (大阪商船会社那覇支店長)	大花瓶 (彩絵　壺屋作)	〃	●	1285	

* *

生島慶作家 (那覇市天妃町)	印籠 (真塗堆錦)	【28-120】	●	592、1035、	
〃	印籠 (黒木　彫刻　朝睦作)	〃	●		
〃	根付 (琉球宗経)	〃	●		
〃	*湯庫 (朱塗沈金)	【28-121】	●		
〃	*瓶子 (錫製)	〃	●		
井上為一家 (那覇市東町)	印籠 (黒木　八重山産　銘曰「朝信」)	【28-121】	●		
〃	*印籠 (黒木に象牙細工)	〃	●	498	
〃	火打道具	〃	●	518	540 「尚真王所持火打道具入 (火打付)　伝田名宗経作」
大里朝直家 (首里市大中町)	対瓶 (薩摩焼　尚◆王より拝領)	〃	●	384	
高嶺朝教氏 (首里市長)	*肖像画 (模写)	【28-122】		363	422 「尚恭浦添王子朝良公御後絵 (改画)」
〃	〃 (原図)	〃		342、364、439、440、441、	417 、418、419、420、「尚恭浦添王子朝良公御後絵」

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

	比嘉朝健家（那覇市西本町）	五人弁当箱（尚家旧蔵 桑木地蒔絵堤重箱）	〃	●	404、513、	320、321、「識名園離宮 桑木地蒔絵堤重箱」
	〃	〃 盃盆（ユホーボン）	【28-123】	●	511	323 「識名園離宮 桑木地蒔絵提重箱附属 黒塗蒔絵盃台四方盆」
	〃	〃 重箱（内ハ青塗）	〃	●	504、512、	322 「識名園離宮 桑木地蒔絵提重箱」
	〃	〃 木皿（春慶塗、蒔絵）	〃	●		
	小波蔵必達家（那覇市）	鄭元廣筆「山水図 大癩老人筆法」	〃		509	
	〃	〃 「山水図 石田翁筆意」	〃		509	
	〃	〃 「山水図 元人筆意」	〃		818	
	〃	〃 「山水図」	〃		818	
	絵画調査	尚元瑚筆「山水之図」	【28-125】		85 346 「冬景山水図	向元瑚筆（那覇市役所蔵）」
	〃	鄭嘉訓筆「墨竹之図」	〃		85	359「墨竹図 鄭嘉訓筆 （那覇 山里永昌家蔵）」
	〃	尚元瑚筆「寿老人之図」	〃		84、895、	347 「寿老人図 向元瑚筆（首里市役所蔵）」
	〃	「唐船之図」（新崎盛信氏所蔵）	〃		84	
	円覚寺山門	観音像	〃		639	83 「円覚寺 三門楼上観音大士像」
	〃	羅漢像（獅子持）	〃		638、700、	86 「円覚寺 三門楼上羅漢像 （木彫彩色 獅子持羅漢）」
	〃	羅漢像（鬼連れ）	〃		640、698、	85 「円覚寺 三門楼上羅漢像 （木彫彩色 鬼児羅漢）」
	〃	羅漢像	〃		641	84 「円覚寺 三門楼上羅漢像（木彫彩色）」
3月30日	*中城御殿	毛長禧筆「闘鶏花房之図」（紙本着色）	〃		73、(179)、652、958、1015、1016、1017、	351～353、「闘鶏花房之図 毛長禧筆」
	〃	〃 「闘鶏隼之図」（紙本着色）	〃			
	〃	慎思九筆「闘鶏尾花之図」	〃		178	384 「闘鶏尾花之図 慎思九筆」
	〃	〃 「闘鶏尾花祖父之図」	〃		175	385 「闘鶏尾花祖父之図 慎思九筆」
	〃	〃 「闘鶏はなたれ之図」	〃		98	386 「闘鶏はなたれ之図 慎思九筆」
	〃	殷元良筆「粟鶉之図」（紙本淡彩）	〃		195	
	〃	慎思九筆「野国名馬図」	〃		1018	
	玉城太郎家（首里市久場川町）	仏像（朱塗 デイ梧樹）	〃	●		
	〃	面（御知行躍ノ面）	〃	●	610	

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

〃	*「京太郎」舞台道具	【28-126】●	612 、613、	
〃	獅子頭（三個）	〃 ●		
〃	人形(十九個　躍人形、子持人形)	〃 ●	602	
?	*獅子舞獅子頭	【28-127】●	292	
中城御殿	真塗山水絵貝摺手箱	【28-129】		
〃	印籠（牙彫亀形）	〃		
〃	料紙及硯箱（外真塗貝摺　内朱塗）	〃		
〃	獅子形椰子酒入（同椀付）	〃		
〃	五彩耳壺（壺屋製）	〃		
〃	自了筆「野国名馬図」	〃		
〃	火炉（貝摺手焙）	〃		
〃	印籠（真塗山水絵貝摺）	〃		
〃	印籠（牙彫雲龍）	〃		
〃	根付（宝珠形）	〃		
〃	御玉敷	〃	194	275 「中城御殿　三御飾（饗宴用） 錫製酒瓶御玉垂と朱塗沈金台」
〃	大菓子盆(三ツ組　朱塗沈金)			
〃	差喰（朱塗沈金）	〃		
〃	一輪差花瓶	〃	129	
〃	鉢巻冠（紫冠）	〃		
〃	〃　（黄冠）	〃		
〃	〃　（紫地浮織冠）	〃		
〃	丁字風呂大鉢（紅葉彩絵）	〃		
〃	中央卓（真塗貝摺）	〃	129	243 「中城御殿　黒塗青貝中央卓」
〃	香合（真塗貝摺）	〃	1041	
沢岻仁王家(那覇市久茂地町)	染色方法に関して	【28-130】		
知念績昌家（首里市儀保町）	〃	【28-132】		
那覇市高橋町泊新屋敷	爬龍船の龍頭龍尾	【28-134】		
城間栄光家（那覇市久米町）	染色方法に関して	【28-135】		
浦添御殿	慎思九筆「綱引之図」	【28-138】	255、712、 861、1280、	378～383 「那覇綱引図　慎思九筆」

5月　東京美術学校美術史研究室に帰校

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

研究資料は東京美術学校美術史研究室に運ぶ　紋様、絵画、彫刻、　【24-269】
織工、陶磁、漆工、楽工、等の古記録、実物（三千点）、写真（四切約一千枚カビネ一千枚）

5月5日　東京に帰京　正木直彦東京美術学校校長を訪ねる　【十三松堂日記　1-310】

5月7日　正木直彦東京美術学校校長を訪ねる　琉球研究の報告　〃

5月12日　〃　染物類を携示（一千種余）　【十三松堂日記　1-312】

5月18日　〃　陶器類を携示(朝鮮系統多数)　【十三松堂日記　1-313】

5月27日　〃　焼物、織物、染物類　【十三松堂日記　1-316】

6月12日　東京美術学校写真科研究室　正木校長に琉球花布原委の研究談　【十三松堂日記　1-319】
正木直彦校長、鎌倉が沖縄から将来した絵熊川の茶碗を手入するため持帰る

7月31日　正木直彦東京美術学校校長を訪ねる　【十三松堂日記　1-328】
展覧会出陳のための琉球聘使略一冊琉球調査復命書友禅考などを携示
東京美術学校臨時写真科研究室で写真等の整理作業　【24-203～210】

9月　琉球芸術展覧会　9月5日～7日（啓明会主催、東京美術学校会場）
鎌倉が主に蒐集した約2000点とその他借入品を併せて3000点。3日間で5千名の来館（1日1600人）。
また3日間の間に琉球文化に関しての講演会が開かれる。
啓明会第15回講演会　「琉球史概観」東恩納寛惇/「南島研究の現状」柳田国男/「古琉球の歌謡に就きて」伊波普猷
「琉球美術工芸に就きて」鎌倉芳太郎/「琉球芸術の本質」伊東忠太/「琉球の音楽に就きて」山内盛彬
展覧会の予想以上の成功に、啓明会からさらに研究費をうけることになり、琉球研究に旅立つことが決まる

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

資料３《鎌倉芳太郎撮影写真資料目録正誤表》

凡　例

沖縄県立芸術大学附属研究所では平成８年度より、「鎌倉芳太郎資料」を「鎌倉芳太郎文献資料」「鎌倉芳太郎撮影写真資料」「鎌倉芳太郎収集染織関係資料」の三部門にわけて調査研究を進めている。平成10年度３月に『沖縄県立芸術大学附属図書館・芸術資料館所蔵　鎌倉芳太郎資料目録』（以下「鎌倉芳太郎資料目録」と略称）が刊行された。

資料中の「鎌倉芳太郎撮影写真資料」とは、鎌倉芳太郎氏が大正から昭和にかけて沖縄各地で撮影したガラス乾板と、同乾板から焼付された紙焼写真である。現在、紙焼写真をスキャニングすることによって画像データに変換し、パーソナルコンピュータ上で「鎌倉芳太郎写真画像データベース」を構築中であり、データに関する整理研究が継続されている。本資料は、同目録中筆者が担当した「鎌倉芳太郎撮影写真資料目録」の正誤表であり、且つ目録刊行後、現時点までの資料整理研究によって新たに得られたデータの一覧表である。

1　正誤表に記載する場合、それぞれ該当する項目を【　】で括って示した。

2　「鎌倉芳太郎撮影写真資料目録」刊行以降も調査研究は進められているため、正誤表には目録内容の訂正箇所の他、上記の画像データベースに関わるデータ収集に伴い明らかになったことも記載した。

3　正誤表の記載方法は３通りある。
追加する場合…追加事項を加える。
削除する場合…「→削除」とした。
変更する場合…「変更前→変更後」とした。

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

・41ページ　凡例

「資料の形態を大別すると、整理番号１～421、1237～1287は四つ切版（300mm×255mm）の印画紙が、422～1236はキャビネ版（162mm×120mm）の印画紙が、368mm×309mmの台紙に貼られ、表面には薄葉紙がかけられている。」

→「資料の形態を大別すると、整理番号１～426、1237～1287は四つ切版（300mm×255mm）の印画紙が、427～1236はキャビネ版（162mm×120mm）の印画紙が、368mm×309mmの台紙に貼られ、表面には薄葉紙がかけられている。」

16　【備考】　＊比嘉朝健「狩野安信と琉球の画人自了」

74　【名称】　中城御殿　錫製酒瓶御玉玉貴と朱漆巴紋牡丹唐草沈金足付盆

→中城御殿　錫製酒瓶御玉玉貫と朱漆巴紋牡丹唐草沈金足付盆

【備考】　酒瓶（錫製、玉貴）→酒瓶（錫製、玉貫）

77　【名称】　中城御殿　錫製酒瓶御玉貴と浮彫箔置牡丹唐草文足付盆

→中城御殿　錫製酒瓶御玉貫と浮彫箔置牡丹唐草文足付盆

【備考】　酒瓶（錫製、玉貴）→酒瓶（錫製、玉貫）

85　【備考】　古波蔵泰橋→山里永昌家蔵

【遺宝】　346、360→346、359

100　【名称】　中城御嶽　書院絵戸（表）虎渓三笑図→中城御殿　書院絵戸（表）虎渓三笑図

【備考】　中城御嶽→中城御殿

112　【備考】　中城御殿

126　【備考】　中城御殿

129　【分類】　漆工芸→漆工芸、金工、

141　【遺宝】　710→410

142　【名称】　竹形筒花生→竹形筒筆立

152　【備考】　配置図（国王、正使、副使の座）

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

→冊封使、文字（国王、正使、副使、頭門、二門、東表門、西表門、冊封）、
旗（冊封）二基、外壁（嶮山、日照、雲）、六角堂（二堂）、首里城、＊318

163　【備考】　中城御殿

172　【備考】　中城御殿

176　【名称】　伊江御嶽→伊江御殿

【備考】　伊江御嶽→伊江御殿

196　【名称】　関公馬上図→巴陵橋之図

239　【備考】　中城御殿

243　【名称】　中城御殿　朱漆巴紋牡丹唐草沈金御盃洗
→朱漆巴紋牡丹唐草沈金御盃洗

【備考】　中城御殿、尚公爵家、→削除

253　【備考】　香炉、→香炉（陶磁器）、＊662に壇上の花瓶写真あり

258　【備考】　「寫生僅未施彩色不学他家寫□図　□豈人」
→「寫生従未施彩色不学他家没骨図　筆山主人」、毛世輝（我謝盛保）1787-1830、
＊比嘉朝健

269　【名称】　銘苅子画像→銘苅子伝説天女昇天図

【備考】　画像、銘苅子、冠（八巻）、従者（刀、団扇）、後屏、曲ろく、銘苅御殿蔵、

【遺宝】　424→425

289　【備考】　割印、＊1040と関連資料か？（冊封、勅書諭祭之時の行列か？）、首里城、

293　【備考】　線香

313　【備考】　＊比嘉朝健「狩野安信と琉球の画人自了」

318　【備考】　冊封使迎送配置図、那覇港、冠船、文字（国王、国王控所、正使、副使、龍亭、彩亭、
諸官、賛礼物□、乗船之時、国王迎所）碑、＊152

【備考】　川→削除

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

334　【備考】　中城御殿、銘（宗里（刻））
336　【備考】　中城御殿、貴人面、銘（宗里（刻））
344　【備考】　中城御殿
353　【分類】　生活風俗・漆工芸
　　【備考】　黒漆、漆絵、
357　【備考】　＊比嘉朝健「琉球の画家呉著温」
394　【備考】　中城御殿
399　【名称】　中城御嶽　石灯籠→中城御殿　石灯籠
429　【備考】　＊比嘉朝健「狩野安信と琉球の画人自了」
446　【分類】　金工→陶磁器
　　【備考】　香炉、唐金、鋳物、→香炉、釉薬、知花焼、仲吉朝助氏、
470　【分類】　生活風俗→生活風俗（漆工芸、金工）
　　【備考】　天目台（二基）に家紋あり、
498　【分類】　金工→漆工芸
　　【名称】　百足柄鰐口形印籠
　　【備考】　鰐口→印籠、鰐口形、
　　銅製→木製、黒木、象牙細工、
523　【遺宝】　519
587　【遺宝】　＊534
589　【遺宝】　534
592　【名称】　木彫→黒漆山水楼閣螺鈿印籠
595　【備考】　中城御殿
596　【備考】　中城御殿
605　【備考】　中城御殿
653　【備考】　中城御殿
654　【備考】　中城御殿
655　【備考】　中城御殿、貴婦面　（出目加見（印）
656　【備考】　中城御殿、銘、若武士面、
676　【備考】　＊比嘉朝健「狩野安信と琉球の画人自了」、
702　【備考】　中城御殿

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

703　【備考】　中城御殿

708　【備考】　中城御殿

735　【備考】　毛世輝（伝我謝盛）→毛世輝（伝我謝盛保）

754　【分類】　陶磁器→漆工芸、陶磁器、

757　【備考】　中城御殿

760　【備考】　中城御殿、額掛止台、

763　【備考】　中城御殿

765　【備考】　中城御殿

766　【備考】　中城御殿

818　【備考】　「元人□意　雪峰元広　■（白文）■（朱文）」

→「元人筆意　雪峰元広　■（白文）■（朱文）」

819　【備考】　中城御殿

820　【備考】　中城御殿

821　【備考】　中城御殿

822　【備考】　中城御殿

823　【備考】　中城御殿

858　【名称】　関公馬上図→巴陵橋之図

869　【遺宝】　894→394

882　【備考】　＊比嘉朝健「狩野安信と琉球の画人自了」

884　【備考】　＊比嘉朝健「狩野安信と琉球の画人自了」

899　【備考】　＊比嘉朝健「狩野安信と琉球の画人自了」

901　【備考】　「自了謹写」「後素（白文）」「珠自了印（朱文）」尚順男爵家、

→「後素（白文）」「珠自了印（朱文）」、首里譜久山朝宜家蔵、

＊比嘉朝健「狩野安信と琉球の画人自了」、

915　【名称】　文字入獣足鼎→天尊廟　文字入獣足鼎

【備考】　文字入（「聖武」「□船」「□弐」「士申」）

→文字、銘文（「□聖武」「同治」「壬申」「□弐」「□船」「□」）、

＊23　天尊廟内の写真に同香炉あり

916　【備考】　銘文、「道光二十一年辛丑□月　天尊　王舅向□正□国官向

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

□□正議太夫□常□正議太夫元信諸員役□天命」道光21（1841）年

→銘文（「天尊　道光二十一年辛丑□月（？）　王舅向邦正耳目官向国弼正議太夫林常裕正議太夫鄭元偉諸員復（「役」か？）□天命」道光21（1841）年、進貢船関係、同治20年（1840）進貢船帰還奉納品か？天妃宮、

922　【分類】　陶磁器→陶磁器（金工？）

989　【備考】　データ全部→食籠、箔絵、八角食籠、足付盆、螺鈿、紗綾形、菱万字、万字繋、

1019　【備考】　＊290、1023→＊290、1022　＊『美術全集』2-126

1040　【備考】　御輿（龍文、霊芝文、四柱、雲）

→御輿（龍亭、龍文、霊芝文、四柱、雲、８人担ぎ）、割印、＊289と関連資料か？

（冊封）、首里城、崇元寺（儀礼場所）

1043　【備考】　中城御殿、黒藍押判色付紋様

1053　【備考】　＊比嘉朝健「狩野安信と琉球の画人自了」

1132　【遺宝】　120→121

1156　【名称】　水差し→荒焼からから

【遺宝】　522

1262　【分類】　彫刻→建築

【名称】　首里城　正殿正面階段下　大龍柱（向かって右）→井戸

【備考】　龍柱、石彫、丸彫、龍、阿形、柱、首里城、正殿、

→井戸、石造、樋川、樋（流水）、階段、

【遺宝】　＊45→削除

1283　【備考】　中城御殿

NII-Electronic Library Service